『平家』の全篇に通ずる特得の味はひで、この特得の趣味を成立たせる呼吸の祕密の一つは、多分長く七五に執着せずして、やがて「盛者必衰の、ことわりをあらはす」のやうな準律語式なる「八九」となし、やがてまた純粋の散文姿とする所にあるであらう。而して此の、七五の末を散文の間に沒入させ、散文の間から七五を浮かび出させるところが、『平家』の文章美の主なる一面の宿つてゐるところだと、吾等は思ふのである。

長くつゞく七五の繰返しでも此の通りであるが、一鎖二鎖の、素知らぬげに見える挿入などは枚擧に暇もない。例へば

心も詞も　及ばれね。

泣くより外の　ことぞなき。

かくやと覺えて　哀れなり。

あるに甲斐なき　我が身かな。

横笛といふ　女あり、瀧口これに　最愛す。

西王母と　謂ひし人も、昔は有りて　今は無し、東方朔と　聞きし者も、名をのみ聞いて　目には見ず。

の如き、此の物語のあちこちに散見する常文句は、恐らく多數の讀者から、七五調としての一瞥をも與へられぬものであらう。また作者自身も改めては七五調と意識せずに書いたものではあらうが、しかしながら、彼等が知らず〳〵の間に及ぼす影響は侮るべからざるもので、かういふ光を韜んだ七五調が積もりつもつて、『平家』の文章の美趣の上に、また之れを讀む讀者の心理の上に、驚くべき寄與をなしてゐるのである。

五

吾等はさきに「鎌倉軍記に完成されたのは七五調を中心とした短歌の要素の挿入である」と云つた。それは『平家物語』に取り入れられた律語の要素は「七五」だけではなく、七五の外に「五七」「七七」「五七五」等の諸形式も取り入れられたからである。のみならず時としては、「五七五七七」といふ短歌の全容までが、少しく姿を變へて攝取されてゐるからである。而して是等の「五七」「七七」「五七五」及び「五七五七七」等は「七五」と同じく、皆自己を際立たせずして、散文の間につゝましく仲間入しつゝ、互に相助けて、美しい調子を現じて居るのであるが、吾等はその一例として、『平家物語』の巻第三、「有王島下り」の一節を引くであらう。

姫御前（ひめごぜ）斜（ぜかの）ならず悦び、やがて書いてぞ賜（たま）うでける。暇（いとま）を乞ふともよも許さじとて、父にも母にも知らせず、

唐船の纜は、卯月五月に解くなれば、夏衣たつを遅くや思ひけん、三月の末に都を立つて、薩摩潟へぞ下りける。薩摩より彼島へ渡る船津にて、有王を人怪しめ、着たる物を剝ぎ取りなどしけれども、少しも後悔せず、姫御前の御文ばかりを人に見せじと、髻結の中には隠しける。さて商人船に乗つて、件の島へ渡つて見るに、都にてかすかに傳へ聞きしは、事の數ならず、田もなし、畑もなし、里もなし、村もなし、おのづから人はあれども、言ふ詞をも聞き知らず。

かうざッと讀み流したところはで、此の中に特別な調子の文句があるとも思はれぬが、注意して讀んで見ると、「七五」「五七」「五七五」「七七」など、いろ〳〵の珠玉が光を韜んで隠れてゐることがわかる。先づ最初から「父にも母にも知らせず」までは、散文質の普通な句立であるが、次ぎの四句、

もろこし船の　ともづなは、卯月五月に　解くなれば、

は、云ふまでもなく立派な七五の二鎖である。また次ぎの

夏ごろも　たつを遅くや　思ひけん、

は、立派な五七五で、短歌の上の句そつくりの句立である。そして次ぎなる。

やよひの末に　都を立つて、

は七七調で、前の五七五から續けて讀み下すと、立派な三十一文字の短歌の調子となるであらう。而してこゝは前後連絡の關係上、最後を言ひ切らずに、次ぎの句へ續けて居るが、もし最後を終止段にして、

夏ごろもたつを遅くや思ひけん　やよひの末に都たちけり

とでも云へば、そのまゝ立派な短歌となるであらう。即ち此の調子よく讀めるといふだけで、何とも見えぬ文句の間に、短歌の持つ、七五、五七、七七、五七五等、いろ〳〵の調子が人知れず潜んで居るので、加之短歌の全形が散文の間に、假裝して本具の光を收めつゝ、全文の調子の美を助けて居るのである。

この「五七五」調や「五七五七七」が、散文句の間に人知れず介在して居るのは、『平家物語』に取つて、必ずしも稀有の例ではない。「灌頂の巻」なる「小原御幸」の

庭の若草茂りあひ、青柳糸を亂りつゝ、池の浮草浪にたゞよひ、錦をさらすかと謬たる。中島の松にかゝれる藤波の、裏紫に咲ける色、青葉交りの遅櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲き亂れ、八重立つ雲の絶間より、山郭公の一聲も、君の御幸を待ち顔なり。

の如きは、七五調の句の豊かな挿入は、擧げるまでもないが、特に「五七五」及び短歌全容の現はれについて云ふと、

中島の　松にかゝれる　藤波の

は短歌の上の句そつくりの五七五で、その次ぎに「裏紫に咲ける色」の二句を續けて、最後に二音句の感詞でも加へれば、立派な短歌となるであらう。思ふに『平家』の作者は、あらかじめ此のやうな意圖を以て句立を案じたのではあるまい。彼れに取つては、唯だ平生口馴れ耳熟してゐる短歌の口調が、知らず識らず飛び出して散文句の間に割り込んだに過ぎぬのであらうが、しかしながら其の結果は散文律語の調和融合といふ文學史上の一大事業を成就したことになるので、形式上に於ける『平家物語』の此の偉勳は、稱へても稱へ盡くされぬものであると、吾等は思ふのである。

六

前に引いた「有王島下り」には、その他にも尙ほいろ〳〵の律語調を含んで居る。

多くの波路を　渡ぎつゝ、薩摩潟へぞ　下りける。

は、云ふまでもなく、七五調二鎖（第一句は委しくは字餘りの八音）の連續である。次ぎに

薩摩より　彼の島へ渡る　船津にて、

は、普通の散文句とも見られるが、正しくは五七五の字餘りなる五八五調と見るべきであらう。また少しおいて、

田もなし、畑もなし、里もなし、村もなし。

は對偶式の散文句とも見られると同時に、五五調の狂ひと見ることも出來るであらう。さて問題は其の次ぎの

おのづから　人はあれども、言ふ詞をも　聞き知らず。

の四句であるが、これは恐らく五七に次ぐに七五を以てした變化の妙調であらう。謠曲の「次第」といふのに、よく此の五七、七五の交互する調子がある。例へば

行方定めぬ　道なれば、こし方も　いづくならまし。（鉢の木）

定めなき世の　なか〳〵に、憂き事や　頼みなるらん。（蝉丸）

の類ひで、謠曲の持つ此の變はり調子も、恐らく『平家』の暗示によるのであらうと考へられる。

とにかく『平家物語』に於ける七五、五七五、五七、七七等、短歌の諸要素の使用振は、概してかういふ風に　すつかり艶を消し光をつゝんだもので、譬へば空氣の、水の、日光の惠みの如く、知らずに讀み過ぎても、何となく快感につゝまれる、知れば理解と驚歎と奥床しさとに打た

れて、更に感興を新にする、といふ風のものである。讀者は物語の中で屢〻出遇ふ

濃き墨染に　やつれ果て、嵯峨の奥にぞ　栖まれける。

六彌太を　捕つて引き寄せ　馬の上にて　一刀落ちつく所で　一刀、三刀までこそ　突かれけれ（七五）

等の例を見て、短歌のいろ〳〵な調子が、『平家』に於いて、如何に廣く、如何にしば〳〵用ゐられたか、さあらぬ事にまで巧みに用ゐられて、それが人に心づかれぬ間に、いかに物語全體の美觀を築き上げてゐるかを想像されるであらう。

鎌倉に於ける軍記の精華は『保元物語』『平治物語』及び『平家物語』の三篇である。此の三名作が七五調を取つてその文體を美化する爲めに、三代がかりで短歌攝取の功夫を凝らしたのは、文學史上の面白い現象であるが、殊に『平家物語』が短歌の特質ともいふべき、あらゆる要素を悉く用ゐ、多く用ゐ、しば〳〵用ゐたるのみならず、縱横に使ひこなして、こゝに短歌調を踏まへた大散文詩を成就したのは、實に驚嘆すべきことであつた。

（昭和十二年）

第七　『太平記』再讀重愛の心緒を述ぶ

一

私は今年の正月早々から、やむを得ぬ仔細があつて、『太平記』を通讀した。私に取つて『太平記』の通讀は、これが二度目で、およそ四十年振のことであつた。前回は活版の流布本一種を、註釋にもたよらず、唯だ猪のしゝ讀みに讀んだのであつたが、今度は貰つた本などが手許にあるまゝに、神田本や西源院本やの數種を、ところ〴〵參照しつゝ讀み進んだ。そして昔の思ひ出としては、郷里の中學校に居た時分に、『太平記』が楠公を呼び捨てにしてゐる癖に、尊氏に對しては「將軍筑紫へ御開きの事」といふ風に、彼れが謀叛最中の言行までを敬語づくめに書いてゐるのを怪しんで、當時漢詩の師匠と仰いでゐた上村節山先生にお尋ねすると、「それあお前、正成と尊氏とでは、位が違ふし、第一人物が違ふからなあ」と言はれて、くやしいやうな、情ないやうな、不思議な思ひのした事や、東京に出て來る早々、何新聞かで諸名士の愛讀書の投票を募つた時に、『太平記』が第一位になつてゐるのを見て悅んだことなどを思ひ出して、一種の懷かしさを感じたが、さて段々に讀んで見ると、四十年の昔とは大分違つた事が考へられ、またその後、平家物語と比較の爲めに拔き讀みをした時とも可なり違つた事が考へられるのに氣がついた。その新に浮かんだ考へや感じを、少しばかり整理して書き並べて見たのが、この小論である。

二

『太平記』四十卷は後醍醐天皇御即位の文保二年（一九七八）から、吉野朝後村上天皇の正平二十二年（北朝貞治六年、一〇二七）に至る五十年間の史實を潤色したものであるが、もし全篇に通ずる中心興味の戰亂を本位とするならば、干戈の始めて動かされた元德元年（一九八九）の九月から、足利義詮が歿して三代義滿が其の後を襲ぎ、細川頼之が管領となつた正平二十二年に至る約四十年間の天下爭亂記であると云つてもよいであらう。

『太平記』の作者は、久しく知られなかつた。また數人の作者がそれ〴〵異なる部分を擔當したものと想像されて、玄惠、善智、壽榮、新田義貞、兒島高德等がその主なる執筆者とも考へられたが、明治の中頃に至り、洞院公定日記の應安七年（一〇三四、吉野朝文中三年）五月三日の條に、「傳聞去廿八九日之間小島法師圓寂云々。是近日翫天下太平記作者也。凡雖爲卑賤之器、有名匠聞、可謂無念」（『太平記』は一名『天下太平記』とも呼ばれたと云はれる。公定日記の「近日翫天下太平記」は世に「近日天下に翫ぶ太平記」と讀まれて居るが、恐らく「近日翫ぶ天下太平記」

と讀むべきであらう。)とあるのが發見されて、小島某といふ文學堪能の沙門であることが信ぜられるやうになつた。之れについて星野恒博士は、小島法師は遁世後の小島高德であらうといふ興味ある說を發表して居られる。但しこれには確實な證據があるのではない。又「卑賤の器」と云つて居る所を見ると、此の作を南朝勤王の名將が後半生の事業とは考へにくい嫌ひはあるが、しかしながら彼れが在來想像された數人の作者の中の一人である所を見ると、あながち無稽の當て推量とも云はれぬであらう。また若し是れが事實ならば、北畠親房卿が關東出征の陣中に『神皇正統記』を撰じたのと相並んで、當代に於ける文武兼備者の名作の双璧と稱ふべきであらう。

『太平記』が小島法師の作であるとしても、その全部が此の法師一人の筆に成つたか否かは疑問である。そも〳〵『太平記』には幾十種の異本があつて、その文章が可なりの相異を見せて居る。從つて其の相異を輕く傳寫の際の加除變改と見ても、少なくとも大小幾十人の執筆者もしくは加筆者が居たわけであるが、こゝに異本の多いことに絡んで、成立上一つの大きな疑問は、『太平記』は連續的に書かれたものでなくして、中途で取り纏めつゝ、二度か三度かに書き足しては公表されたものではないかといふことである。此の疑問の主なる起因は、流布本第一卷の冒頭に、

これより四海大きに亂れて、一日も未だ安からず、狼煙天を翳め、鯨波地を動かす事、今に至るまで四十餘年、一人として春秋に富めることを得ず、萬民手足を措く所なし。

とある所が、天文本等には「二十餘年」とあり、西源院本、神田本等には「三十餘年」となつて居る。それについて、高野辰之博士は、この二十餘年、三十餘年、四十餘年の相違がある上に、『銘肝腑集抄』に入つて居る『太平記』の遺編の初めに「太平記上之上」とある所を見ると、四十卷の太平記は、切めは大亂の初期二十年間を寫した九卷位のものであつたので、後から次第に書き繼がれたものであらうといふ說を立てられたが、高木武博士は更に成立年代を三段に刻んで、最初の二十餘年間は興國の末から正平の初めに至る數年間に纏められ、二度目は正平十三年に於ける尊氏の逝去を機會として改修的に纏められ、而して最後は應安三年から四年までの間に取纏められて、こゝに四十餘年にわたる一大軍記の完了を見たのであらうといふ說を立てられた。

吾等も先づその邊であらうかと考へるが、尙ほ之れに聊か加へる事を許されるならば、『太平記』の四十卷全部が、一度は先づ小島法師一人の手によつて取り纏められたものであらう。而して此の小島法師の作が成立した後に、之れを筆寫する人達が、自分々々の所見により、或は上司の命令依賴などによつて、之れを添削變改したものであらう。他人の作の瑕疵は、遙かに劣つた文筆家にも容易に見出だされるものである。思ふに『太平記』を寫し取る者の中で、先輩名家の

文疵を見遁すの雅量がなく、我が批評眼の鋭さに誇りを持つ文人等は、筆寫の際に爭つて局部々々の修正を試みたであらう。或は上司長官に命ぜられ、或はその意を迎へて褒貶の調子を變へたでもあらう。或は我が見聞を基本として事實を改めることをもしたであらう。吾等が『太平記』を讀む際に於ける一つの不快は、尊氏等に對する敬語が、重きに過ぎ、多きに過ぎて、義貞、正成等に對する敬語の、或は甚だ少なく、或は全く無きことである。無論これは身分の相違によることでもあり、當時の言ひ慣はしによつたのでもあらうが、それにしても叛亂最中の謀叛人に對する過度の敬語と、節を渝へずして義に殉じた忠臣に對する敬語の皆無とは、妥當でもなく、また面白いことでもない。吾等はそれに關して多くの例を引く餘裕を持たぬが、試みに卷第十六の「正成が首故郷へ送る事」の條の最後で、流布本に

其の後よりは正行、父の遺言、母の教訓。心に染み肝に銘じつゝ、或時は童部共を打倒し、首を取る眞似をして、これは朝敵の首を取るなりと云ひ、或時は竹馬に鞭を當てこれは將軍を追ひ懸け奉るなんと云ひて、はかなき手ずさみに至るまでも、唯だ此の事をのみ業とせる、心の中こそ恐ろしけれ。

とあるところを取つて、之れを他の異本に對照すると、神田本には、

少心にも正行げにもとや思ひけん、腹切らん事をば思ひ止まり、父の遺言母の教訓心に深く染みければ、あだなる遊戯の小弓草鹿の庭までも、亡魂の恨みを散ずべき義兵を擧げんと心にかけ、武略智謀の營み、弓箭劍戟の嗜み、また他事もなくぞ見えし。千里の山野に虎の子を隱して育つる心地して、世上又無爲ならじと思はぬ者もなかりけり。

とあり、西源院本には、

さすが正行幼少心にも、げにもと思ひつゞけつゝ、自害の事は止みにけり。父の遺訓母の教訓に、深く染りにければ、其の後は一筋に身を全うして、あだなる戯れにも只だ此の事をのみ思ひつゝ、武藝智謀の稽古の外、また爲る態もなかりけり。是れぞ誠の忠孝なると、正行を感ぜぬ者はなし。されば幼少より敵を滅す智謀を挾みける、行末の心の中こそ恐ろしけれ。

となつて居る。全體として、神田本、西源院本が素樸であり、未熟であり、之れに對して流布本は遙かに華やかでもあり、精錬されても居るが、特に最後の逆徒討伐の豫習をする幼遊びの部分について見ると、小島法師の最初の作は恐らく、「武略智謀の營み、弓箭劍戟の嗜み、また他事もなくぞ見えし」とか、或は「あだなる戯れにもたゞ此の事をのみ思ひつゝ、武藝智謀の稽古の外また爲るわざもなかりけり」とかいふ如く、神田本式もしくは西源院本式であつたのであらう。而して後の文筆に長けたる筆寫人等が、北朝方の大身者の命により、或は彼等の意を迎へて、これは將軍（尊氏）を追ひ懸け奉る。

などと、正行等勤王將士の夢にも思はぬ敬相の表現をしたのであらう。同時にその優れた文學上の意見によつて、「弓箭劍戟の嗜み」「武藝智謀の稽古」といふが如き抽象的の叙事に代ふるに、童部共と遊戯する際にも朝敵の首を取る眞似をしたといふ、具體的描寫を以てしたのであらう。一斑は全豹を暗示する。吾等はどうしても、第一回の『太平記』を完成した小島法師が、正行を して 將軍を追ひかけ奉る」（楠氏樣を追つかけ申上げる）と云はしめたとは考へることが出來ぬ。また小島法師が、文學として見て遙かに優れた先行の流布本の文章を拙劣に改めたとも思はれない。法師の原作は必ず文章としては拙劣で、修飾の比較的少ない神田本、西源院本式のものであり、態度としては比較的勤王の諸將士を揚げ、同時に足利方を押へたものであつたであらう。

吾等は此の序を以て、此の同じ章により、簡單に、代表的に、異本の文學的比較を試みたいと思ふ。此の章の冒頭、尊氏が正成の首を河内に送る所を、流布本には、

其の後尊氏卿、楠が首を召されて、朝家私日久しく相馴れし舊好の程も不便なり。跡の妻子共今一度空しき貌をも、さこそ見たく思ふらめとて、遺跡へ送られる情の程こそ有難けれ。

と書いて居るが、神田本、西源院本には、それ〴〵に、

其の後尊氏卿正成が首を取り寄せて、朝家に久しく相馴れし、舊好も不便なり、妻子共今一ト度空しき貌をも見度うこそ思ふらめとて、楠が遺跡へぞ送り遣はさる、情の程こそ有難けれ。（神田本）

其の後正成が跡の妻子共、今一度容貌をもさこそ見たく思ふらめとて、子息の正行が許へ送り遣はされける情の程こそ有難けれ。（西源院本）

となつてゐる。此の三種の異本の三樣の書振を見て、吾等の想像に浮かぶ事はかうである。最初に小島法師が書いたのは西源院本に近い極めて簡單なもので、「尊氏卿」といふ敬稱のついた主格も用ゐず、「朝家私日」などいふ情を見せた對句をも使はず、一語半句の修辭らしい文句を用ゐずして、唯だあッさりと事實の核心のみを見せたものであつたであらう。次ぎに筆寫した好事の文章家は、尊氏に對して敬語を附けないのは不都合であると考へて、「尊氏卿」と言ひ、そして尊氏が人情味を見せようとして、一旦六條川原に懸けた楠公の首を取り寄せ、宮中で人魂にした舊好を思ひ出して、といふ事を加へて、「正成が首を取り寄せて、朝家に相馴れし舊好も不便なり」と は改めたのであらう。而して流布本を書き寫した筆者は、更に藝術的表現に工夫を凝らして、「首を取り寄せて」は卑俗だからとて、「首を召されて」と敬相の古雅な文句に改めて、詞を風流にしつゝ同時に尊氏に位を附け、又「朝家に」だけで對偶がなくては文章に成らぬからと、「私日」の二字を加へて「朝家私日」といふ天朝れの對句を作り成したのであらう。かくして流布本の

『太平記』は、文章としては他のいづれの異本も遠く及ばぬ立流な藝術品となつたが、同時に二つの大切なる此の作特殊の生命を失つた。その一つは叛將尊氏を崇め過ぎることによつて、此の作に於ける根本義ともいふべき國體擁護の尊嚴味を薄くしたことである。他の一つは、楠公は、朝廷でこそ止むを得ず尊氏とも袖を連ねられたれ、馴れ〳〵しい私的の交際などは恐らくされなかつたであらうと思はれるやうな臆測の虚事を書き添へて、事實の嚴肅味を失つたことである。吾等は此の原則を鍵として、『太平記』の異本に見出ださるゝ相異の祕密の一部を開くことが出來ると思ふのであるが、要するに原作者小島法師の筆に成つた最初の『太平記』は、文章が比較的素樸で修飾の少ないものであつたのであらう、而して比較的南朝の忠臣を痛はり、叛臣を抑へたものであつたであらうと思はれる。無論虚飾誇張の文句の多いのは、あらゆる『太平記』に通じた特色で、例へば「立后の事」の一節に、中宮が君寵を得られなかつたことを寫して、

御齡已に二八にして、金鷄障の下にかしづかれて、玉樓殿の内に入り給へば、夭桃の春を傷める粧ひ、垂柳の風を含める御形、毛嬙西施も面を恥ぢ、絳樹青琴も鏡を掩ふほどなれば、君の御覺えも定めて類ひあらじと覺えしに、君恩葉よりも薄かりしかば、一生空しく玉顔に近づかせ給はず、深宮の中に向つて春の日の暮れ難き事を歎き。秋の夜の長き恨みに沈ませ給ふ。金屋に人無くして、耿々たる殘んの燈の壁に背ける影、薰籠に香消えて蕭々たる時雨の窓を打つ聲、物毎に皆涙を添ふる媒となれり。（流布本）

といへるが如き、或は笠置の戰に、本性房といふ律僧の大力を寫して、

烏帽子の袖を結んで引違へ、尋常の人の百人しても動じ難き大磐石のありけるを、輕々と脇に挾み、鞠の勢に引懸け〳〵、二三十が程續け打ちにぞ拋つたりける。……人馬いやが上に落ち重なり、さしもに深き谷二つ、死人にてぞ埋まりたりける。（西源院本）

と云へるが如き、是等はあらゆる異本にほゞ同樣の姿を見せて、此の作の風致を代表的に現はしたものであるが、それでも流布本と他の系統の異本との間には可なりの相異があつて、流布本の文章が最もやゝこしく、けば〳〵しく、調子に囚はれてゐるのであつた。また尊氏等に對する敬相の過多、義貞正成等に對する敬相の甚微皆無も、概してはあらゆる異本に通ずることではあるが、その中でも流布本が最も甚だしいことは、特殊の場合々々の比較によつて知られることである。吾等は前者の例として、わざと風變はりな道行文を引くであらう。試みに『太平記』で最も名高い俊基朝臣東下りの道行の一部を取つて見ると、流布本に

落花の雪に踏み迷ふ、片野の春の櫻がり、紅葉の錦を着て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明かす程だにも、旅宿となれば物憂きに、恩愛の契り淺からぬ、わが故郷の妻子をば、行方も知らず思ひおき、年久しくも住み馴れし、九重の帝都をば、今を限りと顧みて、思はぬ旅に出で給ふ、心の中ぞ哀れなる。憂きをば留めぬ

相坂の、關の清水に袖濡れて、末は山路を打出の濱、沖を遙かに見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く、身を浮舟の浮き沈み、駒もとゞろと蹈み鳴らす、勢多の長橋打渡り、行き交ふ人に近江路や、世のうねの野に鳴く鶴の、子を思ふかと哀れ也。

とあるところを、西源院本には

落花の雪に道まがふ、交野の春の櫻狩、紅葉の錦を着て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明す程だにも、旅宿となれば物憂きに、恩愛の契り淺からぬ、故郷の棲家を出でて、互に悲しき妻子をば、行方も知らず思ひ置き、住み馴れし九重の帝都をば、今を限りと顧みて、思はぬ旅に出で給ふ、心の中ぞ哀れなる。嵐の風に關越えて、打出の濱より沖を遙かに見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く、身を浮船の浮き沈み、駒も轟ろに蹈みならし、勢多の長橋打渡り、行き逢ふ人に近江路や、世を宇禰の野に鳴く鶴だにも、子を憶ふかと哀れ也。

と書いてある。思ふに西源院本は原作者小島法師の筆か、或は原作者の筆に最も近いもので、彼れは此の勤王公卿の悲痛な心情を、移り行く名所に絡んで美しく寫す中にも、傍ら素樸に自然に、と心懸けたのであらう。また之れを歌謠の調子で操つて行く中にも、單調な七五のひた押しにならぬやうにと心して、『平家物語』や、宴曲や、乃至後世の近松門左衞門などに見るやうな三句連絡、その他の破調を鏤めて變化をつけたのであらう。而して此の磨かれざる天才の高級な用意を少しも感知し得ざる、誇張好き流麗好みの筆寫文人が、筆の立つまゝに、一切を七五調化し、文句長に仕立て直して、天晴れ珠玉の名文を成したと思ひ誤つたのであらう。例へば

一。住み馴れし、九重の、帝都をば（五、五、五）
二。打出の濱より、沖を遙かに、見渡せば（八、七、五）

等の三句連絡は、短歌の上の句に見る三句連絡の系統を引いたもので、『平家』や宴曲が、七五の間に變化のあしらひとして屢〻挿入したものであるが、それが流布本の筆者に、單調化、冗漫化されて、それ〴〵に

一。年久しくも、住み馴れし、九重の、帝都をば、
二。末は山路を、打出の濱、沖を遙かに、見渡せば、

と書き伸べられたのである。これはいづれも原作者が心あつて試みた變化の句作りをば、後の寫本家が、未熟ゆゑに出來た調子のちぐはぐと誤認して、不遠慮な均平の加筆を敢てしたと見るべきものであらう。また「嵐の風に關越えて、打出の濱より沖を遙かに見渡せば」を改めて「憂きをば留めぬ相坂の、關の清水に袖ぬれて、末は山路を打出の濱、沖を遙かに見渡せば」としたるが如きも、味はひはそれ〴〵ながら、後人加筆の冗漫なる麗句の臚列といふべきものであらう。

叛臣敬稱、義臣呼捨の傾向が流布本に於いて殊に甚だしくなつて居る簡單な例を、今度は義臣の方から擧げると、第十六巻の楠公討死の後、義貞朝臣が尊氏直義を迎へ戰ふ所で、西源院本に

將軍左馬頭一所に成つて、新田左中將に懸り給ふ。義貞義助これを見給ひて、紺部の濱よりあぐる敵は、旗文を見るに、四國中國の者共と覺えたり、湊川より懸る勢こそ足利兄弟と覺ゆれ。

と書いて居る所を、流布本には

義貞これを見て、西ノ宮より上る敵は、旗の紋を見るに、末々の朝敵共なり。湊河より懸る勢は尊氏直義と覺ゆる。

と改めて、「給ひ」を除いて居る。ほんの一寸した事ではあるが、小島法師の原作から流布本に變はつて行つた消息の一端を窺ふべきものであらうと思ふ。

三

『太平記』の中心興味は、鎌倉の末期から室町の初期にかけて、我が建國精神の危機に臨んだ前後の事情を、力强く美しく寫した點にある。委しくいへば、危機に臨んで一たび脱し、やがて再び更に大いなる危機に襲はれて久しく揉みぬいた後に、辛うじて妥協した悲劇の顚末を委曲に寫した點にある。更にその精髓について、此の書の隱微を象徴的に言ひ表はすと、『太平記』は建國精神の崩壞を支へた巨柱群の相次いで倒れた事實、彼等が肉に死して魂に活きたる犧牲の物語を、當時の能文家等が技能を盡くして次ぎ〳〵に細說力寫したものであるが、現存する諸種の異本の中、最も素樸にして最初に出來たらしき一端と、最も壯麗にして最後に出來たらしき一端とを擧げると、前者は恐らく西源院本で、後者は恐らく流布本であつたであらう。

『太平記』の異本群は、主として第二十二巻を缺くと立つるとによつて區別される。第二十二巻は越前に於ける脇屋義助を中心とする吉野方と足利方との激戰を寫してあるべき筈の部分で、それが原作に近いらしい西源院本、島津家本、北條家本、南都本、神田本等に缺けて居るのは、其の巻に尊氏直義の甚だしき惡逆を記して居るからで、細川常久(武州入道)が天下を遍く搜し求めて悉く燒き失つたと、『太平記評判祕傳理盡抄』が傳へて居るものである。而して流布本系が立てた第二十二巻は、前に擧げた原始的なる異本の二十三、二十四、兩巻の中から數段を拔き取つて獨立した一巻に纒め上げたもので、たとへば『平家物語』に於ける灌頂巻にも似た成立事情を持つて居るものであるが、讀者はこれらの二群を比較して、容易に第二十二巻を缺いた異本の方が記述の自然なる點から見て原形であるべきことを認められるであらう。

此の第二十二卷の有無にかゝはらず、『太平記』は自然に、(第一)冒頭から北條幕府の滅亡を通ほして建武中興に至るまでと、(第二)足利尊氏の謀叛から楠正成、新田義貞等、南朝柱石の名將達がつぎ〳〵に戰死して、國民が南風不競の悲痛な現象を見出だす迄と、(第三)後村上天皇の御卽位から足利の三代義滿が將軍職について、細川頼之がその輔佐役となる迄、言ひ換へると勝ち誇つて內輪揉めをつゞける足利方と、微弱ながら大義名分の誇りを持つて散布介立式の存在をつゞけた吉野朝方とが、六十餘州のあちこちに散ちばつて、三十年にわたる無中心の小競合をつゞけた期間と、此の三大部分に分かたれるが、此の國寶古典一篇の中に重きを成して、思想文學の兩方面に光彩を放つて居るのは第一第二の兩部分で、殊にその第一部である。最初の第一部が、後醍醐天皇が承久以來の宿怨に燃えさせられた、ねばり强き復古の御意志を中心として、帷幕の廷臣と、關東の幕府と、勤王の將士とが、目ざましい浮沈勝敗を繰返して後、やうやく待望の王政復古を見るに至る迄の消息を寫した手際は、一實に鮮かなものであつた。資朝、俊基の悲痛な最期から、楠正成が數百の小勢を以て、關東三十萬の大兵を赤坂城に惱ました善戰の記述、やがて承久を繰返した隱岐遷幸について、今度は正成が千劍破城に關東百萬の大軍を破つて形勢一轉の機運を作り、やがて先帝の還幸、勤王軍の蜂起、新田義貞の鎌倉攻め、北條氏の滅亡、而して最後に公家一統の御政道の成就と、息をもつがせぬ面白さは、そのたるみなき開展といひ、漸層の妙味といひ、君側の公卿、關東の武士、勤王の將士等が、三方三樣の心理を以て、それ〳〵其の主君に忠誠をさゝぐる間に、國體の本義が次第に輝きを加へ來たる趣といひ、逆徒となつた六波羅、鎌倉までが武士道的なる最後の光を見せて、北條仲時等四百三十二人が番場山麓に自刄し、執權高時等八百七十人が鎌倉東勝寺に膝を並べて切腹する光景といひ、實に壯觀を極めたものであつた。若し當時の國史が建武の中興に於いて公家武家の葛藤を打切り、而して此の作が、此の平和將來を以て大團圓とすることが出來たならば、『太平記』は少なくとも、其の變化に富んで無駄のない結構と華麗悲壯なる文致とを以て、『平家物語』の向うを張ることが出來たであらうに、惜しいかな、此の中興の平和はやがて破れて、之れに次いで起こつた長い戰亂は、史實その物も、之れを表現した文學も、その興味に於いて、遙かに第一部に及ばぬものであつた。無論正成義貞等の奮鬪戰死を中心とする第二部は、後村上天皇御卽位後の第三部に比して遙かに優つて居るけれども、それすら戰後の恩賞が勤王諸將間に於ける不平の種となり、新田足利の確執が爭亂の再起を促し、兩統の並立が大義名分の所在を曖昧にする等の不純な事情があつた上に、上下に通じた歡味方の頻繁たる入り替はりが、楠新田等が折角の忠義の光りを削減する觀があつた。抑も立

派な叙事文學の成立つには、一貫した中心思想があつて、枝葉の事象がその成立に協力することを要とする。筋の發展に隙間の無い緊張があつて、その間に漸層の妙味のあるのを可しとする。我が古來の戰記の中で、最もよく此の要求に叶つたのは『平家物語』であつた。而して『太平記』は恐らくこの要求に最も多く背馳したものであつたであらう。殊に遺憾であつたのは、折角此の要求を滿たして、玉成の姿を見せた第一部が、散漫冗雜なる第二部、第三部を繼ぎ足すことによつて、全容としては龍頭蛇尾の情ない結果を現はしたことである。獵虎の裘に川獺を繼ぎ、更に栗鼠の皮の細切の繼接を加へたことである。かくして第一部に於いて堂々たる登り坂の緊張味を持つてゐた名作が、第二部を經て第三部に入ると、もう著るしく降り坂の弛緩味を感じさせて來たのであるが、特に情ないのは結尾の振はなかつたことである。義滿、賴之の就職は太平實現の劃期符としては餘りに貧弱であるが、殊にその後も長く戰亂が引き續いて二十數年後の元中九年（一三八五）にやうやく兩朝合一の出來た事を知り拔いて居る後世の讀者に取つて、此の結尾は、一種の半端とも、尻切とも感ぜられるであらう。吾等は卷一の冒頭の「後醍醐天皇御治世の事附武家繁昌の事」の一段を顧み、中間の北條足利に對する勤王諸將士が壯烈なる奮鬪戰死の連續した記事を見て後に、「將軍（義詮）薨逝の事」に次いだ第四十卷最後段の「細川右馬頭西國より上洛の事」と題した僅々數行の、しかも

群議同趣に定まりしかば、右馬頭賴之を武藏守に補任して、執事職を司る。外相内德げにも人のいふに違はざりしかば、氏族もこれを重んじ、外樣も彼れの命を背かずして、中夏無爲の代になつて、めでたかりし事ども なり。

で終はつてゐる文句を讀む毎に、國寶『太平記』の爲めに一掬の涙を灑ぐのであるが、かの元弘、延元の大義戰に椽大の筆を揮つた作者が、一執事の入洛によつて、一足利の爲めに、わづかな近畿地方の小康を頌するとは、何ぼう情ないことではないか。しかしながら、よく考へると、文學『太平記』の龍頭蛇尾は、半ば史實その物に餘儀なくされた結果である。四十年の狼煙鯢波に飽き果てた作者は、此の小太平に對して一種の諦めの歡びをも感じたであらう。而して之れを悅ぶ身邊京畿の群衆心理に捲き込まれて、かの復古回天の新機運に昂奮した建國鴻業讃美の大精神が、知らず識らず目前姑息の太平に謳歌するまでには萎縮したのであらう。吾等は此の點に於いて特に深く『太平記』の作者に同情するものである。

四

小野高尙は、その『夏山雜談』の中に、『平家』と『太平記』とを比較して、

平家物語は古き詞ありて耳遠きやうなれども、幾かへり見てもあかず。太平記は文勢も花やかに聞こゆれども數反見にくし。況んやそれより後の軍物語は二反とは見られず。何にても古き文面白き。

と云つて居る。寶井其角は「平家なり太平記には月も見ず」と歌つて居る。趣味の眼で、文學として見れば、いかにもさうであらう。吾等は曾て『太平記』を『平家物語』と比較して、

『太平記』の文章は實に息もつがせぬ文章である。實景實狀を目のあたりに見せて手に汗を握らせる文章である。一種の强い魂を吹き込んで士氣を鍛へ成す文章である。凡そ是等の點に於いて『太平記』は我が古今の文學中の最高位を占むべきものであるが、惜しいかな、そこに微妙な心の潤ひの味がない。『平家』の持つてゐるやうな、細み、微けみ、寂寥味、柔軟味、曲折味、沈潛味、浸透味がない。戰を寫すに於いて然り、死を寫すに於いて然り、景を寫すに於いて亦然り、戀を寫すに於いて亦々然りである。

と云つたことがある。無論是れは嚴格なる意味で、特に『平家物語』と比較して云つたのであるが、暫らく批評のメスを收めて、作者の導くがまゝに、おとなしく讀み進むと、吾等は先づ『太平記』の文章の高き調子が大波を打ちつゝ、吾等が祖先傳來の日本精神を喚び醒ますのを感ずる。

『太平記』が吾等の心を惹くのは、第一にこの國體を宣揚する壯烈な調子であらう。例へば高時に命ぜられて齋藤太郎左衞門利行が帝の御告文を讀む所を寫して、

叡心僞らざる處、天の照覽に任すと遊ばされたる處を讀みける時に、利行俄に眩き蟻垂りければ、讀みはてずして退出す。其の日より喉の下に惡瘡出でて、七日の中に、血を吐いて死にけり。時澆季に及んで道塗炭に落ちぬと雖も、君臣上下の禮違ふ時は、さすが佛神の罰もありけりと、これを聞きげる人毎に、怖ぢ恐れぬはなかりけり。

と云つて居るが如き、或は楠公討死の條の最後に、

抑も元弘より以來、忝くも此の君に憑まれ進らせて、忠を致し、功に誇る者幾千萬ぞや。然れども此の亂又出で來て後、仁を知らぬ者は朝恩を捨てゝ敵に屬し、勇みなき者は苟も死を免れんとて刑戮にあひ、智なき者は時の變を辨ぜずして道に違ふことのみありしに、智仁勇の三德を兼ねて、死を善道に守るは、古より今に至るまで、正成ほどの者はまだなかりつるに……

と書き添へて居るが如き、皆作者が國體皇道に對する熱誠の迸り出でたものである。

『太平記』が吾等の心を打つ第二は、勤王武勇の將士等が忠魂義膽の發揚である。南朝の諸忠臣の中で特に高く作者の心の中に齋かれたのは大楠公であつた。彼れは此の心の中の神に對して常に最大の禮讃をさゝげたかのやうに見える。それは笠置に召された最初の拜謁の砌に於いて、

東夷近日の大逆唯だ天の譴を招き候上は、衰亂の弊に乘つて天誅を致されんに、何の仔細か候べき。但し……合戰の習ひにて候へば、一旦の勝負をば必ずしも御覽ぜらるべからず。正成一人いまだ生きてありと聞召

され候はゞ、聖運遂に開かるべしと思召され候へ。

と凛々しく奏上せしめたのを始めとして、赤坂城に籠つては數百騎の寡兵を以て三十萬の關東勢を惱まさしめ、金剛山では百萬の敵兵を破らしめたるが如き、その他、櫻井の訣別、湊川に於ける七生報國の戰死等、いづれも日本忠臣の儀表たる面目を發揚せんが爲めに、懸命の筆を揮つたものである。それは楠公一人の場合の例であるが、總じて日本に特殊なる忠義の精神を、此の作者ほど立派に現はしたものは、恐らくあるまい。

『太平記』が吾等の心を惹く第三は、忠義に對する作者の公平なる讃美である。彼れは仕ふる所により、敵味方の名に拘泥して、敵方の勇士の美談を見逃すことをしなかつた。その武士道に傾倒する心が、自然に彼れをして、朝敵を憎んでも、朝敵に事ふる家の子等の忠義を讃歎する雅量を失はしめなかつたのであらう。

『太平記』に於ける朝敵の臣下等の忠勇讃歎は數知れずあるが、その最初の美しき現はれは、鎌倉滅亡の際に於ける長崎次郎高重が最後の合戰であらう。

去る程に長崎次郎高重は、初め武藏野の合戰より今日に至るまで、夜晝八十餘箇度の戰ひに、毎度先を駈け圍みを破つて、自ら相當たること其の數を知らざりしかば、手の者若黨共次第に打亡ぼされて、今は僅かに百五十騎になりけり。……かくて相模入道（高時）のおはします葛西谷へ歸りまゐつて、中門に畏り涙を流し申しけるは、高重數代奉公の義を忝うして、朝夕恩顏を拜し奉りたる御名殘、今生に於いては今日を限りとこそ覺え候へ。高重一人數箇所の敵をうち散らして、數度の戰に毎度うち勝ち候といへども、方々の口々皆攻め破られて、敵の兵鎌倉中に充滿して候ひぬる上は、今は矢長に思ふとも叶ふべからず候。只だ一筋に敵の手に懸らせ給はぬやうに、思召し定めさせ給ひ候へ。但し高重歸り參じて勸め申さん程は、左右なく御自害候ふな。上の御存命の間に、今一度快く敵の中へかけ入り、思ふ程の合戰して、冥途の御供申さん時の物語に仕り候はんとて、又東勝寺をうち出づ。……

（高重）これを最後と思ひ定めければ、先づ崇壽寺の長老南山和尙に參じて案內申しければ、長老威儀を具して出で會ひ給へり。方々の軍念にして甲冑を帶したりければ、高重は庭に立ちながら、左右に掛して問うて曰く、「如何なるか是れ勇士凭麼の事」。和尙答へて曰はく、「吹毛急に用ゐて前まんにはしかず」。高重此の一句を聞いて問訊して門前より馬引き寄せ、うち乘つて、百五十騎の兵を前後に相隨へ、笠符かなぐり棄て、閑かに馬を步ませて、敵陣に紛れ入る。其の志偏に義貞に相近づかば組んで勝負を決せん爲めなり。高重旗をもさゝず、打物の鞘をはづしたるものなければ、源氏の兵敵とも知らざりけるにや、をめ〳〵と中を開いて通しければ、高重義貞に近づくこと、僅かに半町許りなり。……されども長崎次郎は未だ討たれず、主從唯だ八騎になつて戰ひけるが、猶ほも義貞に組まんと覓うて、近づく敵を打ち拂ひ、やゝもすれば刺し違へて、義貞兄弟を目にかけて廻りける。……去る程に高重走り廻つて、早々御自害候へ。高重先を仕りて

手本を見せまゐらせ候はんといふまゝに、胴ばかり殘りたる鎧ぬいで拋げすてゝ、御前にありける杯を以て、舍弟の新右衞門に酌を取らせ、三度傾けて、攝津刑部大夫入道道準が前に置き、「思ひさし申すぞ、これを肴にし給へ」とて、左の小脇に刀を突き立て、右の傍腹まで切目長く掻き破つて、中なる腸たぐり出して道準が前にぞ伏したりける。……

この忠魂義膽善戰の花も實もある働きを、朝敵の片割なればとて、どうして看過することが出來よう。國體發揚を念とした作者も、之れを寫す事をば、筆持つ者の譽れとして　腦漿を絞つたに相違ない。吾等は此の一章の筆の冴えをば、新田楠等勤王諸公が勇戰の描寫に比較して、必ずしも遜色がないと思ふものであるが、先づ心を打たれるのは、彼れが忠君の一念に燃えて千里を獨往するけなげさである。高僧の一偈に大悟の腹を据ゑて颯爽と立ち出づる氣高さである。滿眼の敵兵に目もくれずして大將軍一人の首を狙ふ心懸の殊勝さである。また言々句々が主人公の心境に應じて變々化々の活躍振を見せて居るところも面白く、殊に處々に想出の深い暗示が鏤められて居るところには、何とも云はれぬ味はひがある。例へば相模入道に暇乞の條には、後の小楠公最後の參内を思はせるものがある。南山和尚との「吹毛急用」の問答は、蒙古擊攘を決意した北條時宗の往事を思はせるであらう。義貞に近づかうとする所は、楠公が湊川で直義を狙ふところに彷彿して居るが、作者が後の十六卷で、

正成と正季と、七度會ひて七度分かる。其の心偏に左馬頭に近づき、組んで討たんと思ふにあり。

を書いた時には、恐らく、こゝの

閑かに馬を歩ませて、敵陣に紛れ入る。其の志偏に義貞に相近づかばや、組んで勝負を決せんが爲めなり。

の一節を思ひ浮かべたことであらう。また

されども長崎次郎は未だ討たれず、主從唯だ八騎になつて戰ひけるが、

には、『平家物語』の「木曾殿最期」の「木曾殿今井四郎唯だ主從二騎に成つてのたまひけるは」を想はせるものがある。『太平記』の作者は深く『平家』に私淑してゐたらしく、例へば「源平の國爭ひ今日を最後とぞ見えたりける」（先帝御入水）を移して、「新田足利の國の爭ひ、今を限りとぞ見えたりける」（新田殿湊河合戰）と書いて居る類ひが屢々あるのを見ると、これも恐らく『平家』の英雄旭將軍の最期に思ひ寄せつゝ、緣のある名句を以て、此の青年英雄の最期を飾つたのであらう。その他、主君に暇乞し、坂東一の名馬に跨がり、南山和尚に問訊してより、敵の大將を追ひ廻はし、殘れる八騎を從へ、鎧に二十三筋の矢を、簑毛の如く折り懸けながら、悠然と歸つて來て、最後に自害の音頭を取り、高時以下八百七十餘人に、引きつゞき自刃させて、北條九代の最

期を飾らしめるに至るまで、序破急の運び、思考と動作との織り交ぜ、一々の文句のあしらひなどが、それ〳〵に詞藻の限りを盡くして寫されたところを見ると、彼れは恐らく此の青年英雄が、朝敵の一味たることをすッかり忘れて、歎美の筆を揮つたのであらう。吾等は作者が、この敵味方の觀念を超越して、けなげな武將等が清高非凡なる氣節行動に傾倒した態度を偉なりとするものである。

もう一つ『太平記』が吾等の心を惹くのは、その非常に賑かな詞藻である。これは內容方面に於ける忠義の精神の鼓吹と相並んで、恐らく形式方面に於ける最大の興味であらう。何人も『太平記』を讀んで、その文章の花やかさ賑かさに打たれぬ者はあるまい。けれども適切にいふと、『太平記』の文章は、その樣式に於いて極めて單純なるものであつた。『太平記』の文章はその中心樣式について云へば、『平家物語』を襲踏して、その駢儷的な漢文樣式を極度にやゝこしくしたものと云つてもよい。冒頭や、結尾や、中間の繫ぎに用ゐた「さる程に」「千劒破の城へぞ向ひたる」終り給ひけるとぞ聞こえし」といふ風の文句を始めとして、平時の對話、戰場の駈引、多くは『平家物語』式と云つてよく、のみならず深き感歎を現はした、

悲しいかな、義を專らにせんとして、忽ちに死せる人は、永く修羅の奴となつて、苦しみを多劫の間に受けんことを。痛はしいかな、恥を忍んで苟も生くる者は、立ちどころに衰窮の身となつて、笑ひを萬人の前に得たることを。（卷十一）

の如き麗句を對偶させた樣式も、先づ殆んど『平家物語』調の襲踏と云つてよい。彼等の『平家』と異なる所は、先づ足らぬ方では、平安朝風の文致の、皆無と云つてよい程に乏しいことであつた。『太平記』の文章の中で、平安朝風ともいふべきものは、先づたまさか挿入される「夜も更け候ひなん、はや御忍び候へ」などいふ類の短い文句だけであつた。而して最も王朝式なるべき義貞對勾當內侍の愛情物語などの條すら、專ら「羅綺にだも堪へざる貌は、春の風一片の花を吹き殘すかと疑はる、紅粉を事とせる顏は秋の風半江の月を吐き出だすに似たり」といふ風の漢文駢儷式に寫されて居る。吾等は四十卷の中最も王朝ぶりを實現したと見える、此の義貞對勾當內侍の事を寫した中の、

中將(義貞)その怨聲に心引かれて、覺えず禁庭の月に立吟ひ、あやなく心そゞろに憧れてければ、唐垣の傍に立ち紛れて伺ひけるを、內侍見る人ありと物わびしげにて、琴をば彈かずなんぬ。夜彌ゝ更けて、有明の月の隈なくさし入りたるに、類までやはつらからぬと打詠め、しをれ伏したる氣色の、折らば落ちぬべき萩の露、拾はゞ消えなん玉篠の、あられより尙ほあだなれば、中將行方も知らぬ道にまよひぬる心地して、歸る方もさだかならず、淑景舍の傍らに、やすらひかねて立ち明かす。

や、高師直對鹽冶判官の妻の戀情を寫した文などまでが、形を拙く模したばかりで、神を得てゐないのを見ても、此の作に王朝要素の極めて少なく、また其の用ゐぶりの拙いのを知ることが出來るであらう。而して此の王朝文の要素の少なかつた事が、『太平記』が『平家』よりも單調になり、活きた美相の乏しくなつた主なる原因であると、吾等は思ふ。

『太平記』が『平家』と異なる、もう一つの過ぎたる方は、漢文式駢儷句の重疊累積した煩はしさである。例へば北條高時の惡政を記して、

行跡甚だ輕くして人の嘲りを顧みず、政道正しからずして民の弊えを思はず、只だ日夜に逸遊を事として前烈を地下に羞かしめ、朝暮に奇物を翫んで傾廢を生前に致さんとす。衛の懿公が鶴を乘せし樂しみ早盡き、秦の李斯が犬を牽きし恨み今に來りなんとす。見る人眉を顰め、聽く人唇を禦す。

と云つて居る類ひで、それも一つは豐かな蘊蓄と文才とが自然に然らしめたものではあらうが、過ぐれば一種の缺點となつて、高き趣味者に眉を顰めさせるところがある。吾等は後醍醐天皇の還幸に楠正成が前驅を承つた所を、「其の道十八里が間、干戈戚揚相挾み、左輔右弼列を引き、六軍次を守り、五雲閑かに幸す」といふ風の、わざとらしい調子に寫して居るのを見ても、作者の爲めに惜しむ心地がするのであるが、しかしながらよく考へて見ると、かういふ批評は時代を離れた一種の空想で、當時に於いては、是れが作者の最も骨を折つたところであり、同時に讀者の最も悅んだところであつたのであらう。當時は討幕を企つる公卿達が閑遊のすさびと見せた無禮講に於いて、韓昌黎が文集の談義を聽いた時代である。流されの公卿が敷皮の上に坐して、

五蘊假成レ形、四大今歸レ空、將レ首當二自刎一、截斷一陣風。

といふ辭世の頌を誦した時代である。青年武人が出陣の門出に禪僧の一摑を乞うて丹田を据ゑた時代である。殊に『太平記』の作者自身が、尊氏義詮等の葬儀に際して、鎖龕、起龕、奠茶、奠湯、下火などいふ禪家の儀式を、禪家の專門語で委しく記したのを見、また事ある毎に好んで駢儷の辭句を並べ、後世の讀者も亦特に其の部分を愛誦した所を見ると、作者の淫するが如くに用ゐた此の文體は、當代及び後世にわたる大多數の讀者の好尚を代表したので、此の點から見れば、『太平記』の作者が美辭駢儷の重疊は、時代の嗜好を大成した一種の金字塔ともいふべきものであらう。

最後にもう一つ『太平記』について陳べたい事は、作者が知らず〳〵の間に時代を集大成して居るとである。當代に於ける筆執つての雄豪は、『神皇正統記』の藤原親房と、『つれ〴〵草』の吉田兼好と、『太平記』の小島法師とであつた。（もう一人、能樂謠曲を大成した結崎世阿彌が居るけれども、これは時代が少し降つて居る。）准后親房卿の『正統記』は、東征の陣中に於ける忙中閑

を惜しんで、頭脳の記憶藏に據りつゝ、憂國の至情と國史の見識とを表白したものである。兼好法師の『徒然草』は、世間的經驗を豐かに積んだ後に世を捨てた聰明叡智の洒脫な一沙門が、浮かぶがまゝの卽興を取りとめもなく書き集めたものである。卽ち前者は博識の頭一つから繰り出した單線一路の國史であり、後者は思ひ浮かぶに任せて心の影を紙上に留めた、櫛の齒並べの隨筆であるが、之れに對して『太平記』の四十卷は、博覽旁搜、人にも尋ね、場所にもあたり、事實の記錄は云ふに及ばず、詞藻修飾の料にまでも心を配つた、經營慘憺の結果に成つたものである。此の浩瀚な四十卷の中には、恐らく一種の『神皇正統記』が形式を異にして潛んでゐるであらう。また一種の『徒然草』が、違つた風味を具して含められてゐるであらう。處々に象嵌された國體論を、楠、新田、北畠、名和、菊池、脇屋等、南朝將士勤王の功業が實證してゐるのは、まさしく『正統記』を物語化したものではないか。藤原藤房が遁世の際に書き殘した「曠劫恩波盡レ底乾、不ニ是胸中藏ニ五逆一」の二句の如きは、まさしく兼好が意中の最要部を道破したものであらうが、小島法師（俗姓で呼ばゝ居るところを見ると、彼れは恐らく本來の僧侶ではなくして、藤房、兼好等と同じく、在俗武將、宮人などの、世を捨てゝ後に文筆に遊んだものであらう。）の筆致は、已に藤房、兼好の心理を了得して居るものの如く、その轉々して六十餘州に起こり頻つた戰を叙し、或は落首の滑稽皮肉を傳へ、或は小楠公が敵に藥を與へ、物の具を着せ、色代して歸らしめた赤十字的の美談を記し、また暫らく立ち留まつては、前後に酔酌なく唐土天竺の昔話を語るが如き、いづれも隨筆式と云ふべきであらう。また高師直が好色の執着を、さもありさうに寫しつつ、同時に正しき愛情をも思ひ切る勇士の美しき逸話を傳ふるあたりは、兼好が色好まざらん男は玉の屁底なきが如しと說くあとから、色に惑ふ愚かさを敎へたのにも似てゐるといふべきであらう。殊に時代の集大成的反映とも見るべきは、其の拘はりなき自由博大なる同情性である。無論彼れの本尊佛は吉野朝であり、楠氏、新田氏等勤王の諸將士ではあらうけれども、地を換へては屢〻北條方、足利方にも同情して、敬語讃辭を惜しまずに用ゐ、題目だけでも謀叛した尊氏の九州落に對して、「將軍筑紫へ御開きの事」といふが如き美辭をさゝげ、尊氏の逝去については、

春秋五十四歲にて遂に逝去し給ひけり。さらぬ別かれの悲しさはさる事ながら、國家の柱石摧けぬれば、天下今も如何とて、歎き悲しむ事限りなし。

など悼み、剩へ足利義滿の將軍補任、細川頼之の管領就職に「太平」の稱をさゝげて、之れを四十卷の獲麟としたるが如きは、一面徹底した操守の無いことを自白して居るやうにも見えるが、しかしながら事實は當時の國民の上下一般が南北兩朝に右往し左往して怪しまなかつた實情の自

然に現はれたもので、また一つには彼れに劇作者たるに適した特殊性があり、その無數心、ミリナッド・マインドを以て多くの大物の多くの境遇に同情した結果であらう。見方は人それ〴〵であるが、とにかく吾等は是等の諸點に於いて、『太平記』が當時の時代及び文學を集大成して、此の意義深き四十年の歴史の大きな鏡となつて居る點に於いて、その最もすぐれた偉大性を見るものである。

以上を以て、吾等は粗雜ながら此の太平記小論の筆を收める。要するに『太平記』はやうやく待ちつけた平和にほッとして、危なかつた過去四十年の戰爭期を回顧した戰物語である。個人に取つて、魂を消す思ひをした大苦痛も、想出となれば美しい後光を放つて現はれて來るやうに、國としても、太平實現の後に振返つて見た過去の戰亂は、一種の樂しい床しい幻であつたであらう。『太平記』の作者は此の、その時は危なかつたが、今となつては樂しい過去の幻を追うて、縱横の筆を揮つたので、作の名までも、目出度き結果の方に寄せて、『太平記』とは命けたのであつた。

さてかやうな心理を以て此の大波瀾の四十年を寫すに當たつて、專ら作者の心を占領したのは、しば〳〵危險に瀕した國體に對する關心と、命を捨てゝ之れを護らうとした忠臣等が義戰の顚末とであつたであらう。而して之れを表現するには、かねて愛誦した『平家物語』の筆意によりつゝ、當時流行の駢儷式漢文調を美しく積み累ねて、そこに獨得の文體を建立しようとしたであらう。彼れは武士道を尊重する一念から、しば〳〵叛臣に方人した家の子等の忠勇をも公平に讃美したが、その後幾百年にわたる無數の熱心な讀者から、作者の最も重要視して懸命の筆を揮つた吉野朝の諸忠臣讃美の部分のみが、殆んど狂熱的に愛誦されて、國體擁護、忠義鼓吹の最大文學と視られるやうになつたのは、まことに悅ばしいことである。

（昭和十四年九月）

第八　謠曲、隅田川（結崎世阿彌作）

――その本分解釋及び批評――

ワキ詞「これは武藏の國隅田川の渡守にて候。今日は舟を急ぎ人々を渡さばやと存じ候。又この在所にさる仔細候ひて、大念佛を申す事の候間、僧俗を嫌はず人數を集め候。男次第「末も東の旅衣、末も東の旅衣、ひも遙々の心かな。詞「かやうに候者は都の者にて候。我れ東に知る人の候程に、かの者を尋ねて只今罷下り候。道行「雲霞あと遠山に越えなして、あと遠山に越えなして、いく關々の道すがら、國々過ぎて行く程に、爰ぞ名に負ふ隅田川、渡りに早く着きにけり、渡りに早く着きにけり。詞「急ぎ候程に、これは早隅田川の渡りにて候。又あれを見れば舟が出て候。急ぎ乘らばやと存じ候。如何に船頭殿舟に乘らうずるにて候。ワキ詞「中々の事急いで召されて候へ。先づ〳〵御出で候あとの、けしからず物騷に候は何事にて候ぞ。ツレ「さん候都より女物狂の下り候が、是非もなく面白う狂ひ候を見候よ。ワキ「左樣に候はゞ、暫らく舟を留めて、かの物狂を待たうずるにて候。先づ此方へ渡り候へ。シテ、サシ、一聲「實にや人の親の、心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ白雪の、道行き人に言づてゝ、行方を何と尋ぬらん。聞くやいかに、うはの空なる風だにも、地「松に音する習ひあり。シテ「眞葛が原の露の世に、地「身を恨みてや、明け暮れん。シテ、サシ「これは都北白河に、年經て住める女なるが、思はざる外に一人子を、人商人に誘はれて、行方を聞けば逢坂の、關の東の國遠き、東とかやに下りぬと聞くより心亂れつゝ、そなたとばかり思ひ子の、跡をたづねて、迷ふなり。地、下歌「千里を行くも親心子を忘れぬと聞くものを、上歌「もとよりも契り假りなる一つ世の、契り假りなる一つ世の、そのうちをだに添ひもせで、爰や彼處に親と子の四鳥の別かれこれなれや、尋ぬる心の果てやらん、武藏の國と下總の中にある隅田川にも着きにけり隅田川にも着きにけり。シテ詞「なう舟人、我れをも舟に乘せて給はり候へ。ワキ詞「お事はいづくよりいづ方へ下る人ぞ。シテ「これは都より人を尋ねて東へ下る者にて候。ワキ「都の人といひ狂人といひ、面白う狂うて見せ候へ。狂はずは此の舟には乘せまじいぞとよ。シテ「うたてやな隅田川の渡守ならば、日も暮れぬ舟に乘れとこそ承るべきにさはなくて、カヽル「かたの如くも都の者を、舟に乘るなと承るは、隅田川の渡守とも、覺えぬ事を

な宣ひそよ。ワキ詞「げに〳〵都の人とて名にし負ひたるやさしさよ。シテ「なう其の言葉はこなたも耳に留まるものを、かの業平もこの渡りにて、カヽル「名にしおはゞいざ言問はん都鳥、我がおもふ人は、ありやなしやと。詞「なう都人、あれに白き鳥の見えたるは、都にては見馴れぬ鳥なり。あれをば何とか申し候ぞ。ワキ「あれこそ沖の鷗候よ。シテ「よし浦にては千鳥ともいへ鷗ともいへ、などこの隅田川にて白き鳥をば、都鳥とは答へ給はぬ。ワキ、カヽル「げに〳〵誤り申したり。名所には住めども心なくて、都鳥とは答へ申さで、シテ「沖の鷗と夕波の、ワキ「昔に歸る業平も、シテ「ありやなしやと言問ひしも、ワキ「都の人を思ひ妻、シテ「わらはも東に思ひ子の行方を問ふは同じ心の、ワキ「妻を偲び、シテ「子を尋ぬるも、ワキ「思ひは同じ、シテ「こひ路なれば、地「我れもまたいざ言問はん都鳥、いざ言問はん都鳥、我が思ひ子は東路に、ありやなしやと、問へども問ひども答へぬはうたて都鳥、鄙の鳥とやいひてまし。げにや舟ぎほふ、堀江の川の水際に、來ゐつゝ鳴くは都鳥、それは難波江これはまた隅田川の東まで、思へば限りなく、遠くも來ぬるものかな。さりとては渡守舟、こぞりて狹くとも、乘せさせ給へ渡守さりとては乘せてたび給へ。ワキ詞「かゝる優しき狂女こそ候はね。急いで舟に乘り候へ。この渡りは大事の渡りにて候、かまへて靜かに召され候へ。

男詞「なうあの向ひの柳の本に、人の多く集まりて候は何事にて候ぞ。ワキ「さん候あれは大念佛にて候。それにつきて哀れなる物語の候。この舟の向ひへ着き候はん程に語つて聞かせ申し候べし。語り「扨も去年三月十五日、やゝしかも今日の事にて候。人商人の都より、年の程十二三ばかりなる稚き者を買取つて、奥へ下り候が、この稚き者、未だ習はぬ旅の疲れにや、以ての外に違例し、今は一足もひかれずとて、この川岸にひれ伏し候を、なんぼう世には情なき者の候ぞ、この稚き者をばそのまゝ路次に捨て置き、商人は奥へ下つて候。さる間この邊の人々、この稚き者の姿を見候に、よしありげに見え候程に、樣々に痛はりて候へども、前世の事にてもや候ひけん、たんだ弱りに弱り、既に末期と見えし時、お事はいづく如何なる人ぞと、父の名字をも國をも尋ねて候へば、われは都北白河に、吉田の何某と申し、人のたゞ一人

子にて候が、父には後れ、母ばかりに添ひ奉り候ひしを、人商人にかどはされて、かやうに成り行き候。まことは都の人の足手影までも懐かしう候へば、この道のほとりにつき籠めて、標に柳を植ゑて賜はれと、おとなしやかに念佛四五遍唱へ、遂に事終はつて候。なんぼう哀れなる物語にて候ぞ。見申せば船中にも、少々都の人もどざありげに候。逆縁ながら念佛を御申し候ひて御弔ひ候へ。や、よしなき長物語に舟が着いて候。とう〳〵御上がり候へ。男詞「いかさま今日た此所に逗留仕り候ひて、逆縁ながら念佛を申さうずるにて候。

ワキ詞「いかにこれなる狂女。何とて舟よりは下りぬぞ急いで上がり候へ。あら優しや。今の物語を聞き候ひて落涙し候よ。急いで舟より上がり候へ。シテ「なう舟人、今の物語はいつの事ぞ。ワキ「去年三月しかもけふの事にて候。シテ「さてその兒の年は、ワキ「十二歳。シテ「主の名は。ワキ「梅若丸。シテ「父の名字は。ワキ「吉田の何某。シテ「さてその後は親とても尋ねず、ワキ「親類とても尋ね來ず、シテ「まして母とても尋ねぬよなう。ワキ「いや思ひも寄らぬ事。シテ、カ、ル「なう親類とても親とても、尋ねぬこそは理なれ。その稚き者こそ、この物狂が尋ぬる子にては候へとよ。なうこれは夢かやあらあさましや候。ワキ詞「言語道斷。今まではよその事とこそ存じて候へ、扨はおことの子にて候ひけるぞやあら痛はしや候。よし〳〵御歎き候ひても歸らぬ事、かの人の墓所を見せ申し候ふべし。此方へわたり候へ。これこそなき人の舊跡にて候。よく〳〵御弔ひ候へ。

シテ「今まではさりとも逢はんを頼みにこそ、知らぬ東に下りしに、今はこの世になき跡の、しるしばかりを見ることよ。さても無慙や死の緣とて、生所を去つて東のはての、道のほとりの土となりて、春の草のみ生ひ茂りたる、この下にこそあるらめや。

地「さりとては人々この土を、かへして今一度、この世の姿を母に見せさせ給へや。

地「殘りてもかひあるべきは空しくて、かひあるべきは空しくて、あるはかひなき帚木の、見えつ隱れつ面影の、定めなき世の習ひ、人間憂への花盛り無常のあらし音添ひ、生死長夜の月の影不定の雲おほへり實に目の前のうき世かなげに目の前のうき世かな。

ワキ詞「今は何と御歎き候ひてもかひなき事。たゞ念佛を御申し候ひて、後世を御弔ひ候へ。カヽル「すでに月出で川風も、早更け過ぐる夜念佛の、時節なればと面々に、鉦鼓を鳴らしすゝむれば、シテ「母は餘りの悲しさに、念佛をさへ申さずして、唯だひれ伏して泣きゐたり。ワキ詞「うたてやな餘の人多くましますとも、母の弔ひ給はんをこそ、亡者も喜び給ふべけれと、鉦鼓を母に參らすれば、シテ「我が子のためと聞けばげに、この身も鳧鐘を取り上げて、ワキ「歎きを止め聲澄むや、シテ「月の夜念佛もろともに、ワキ「心は西へと一筋に、シテ、ワキ「南無や西方極樂世界、三十六萬億、同號同名阿彌陀佛。シテ「南無阿彌陀佛。地「南無阿彌陀佛　南無阿彌陀佛　南無阿彌陀佛。シテ「隅田川原の、浪風も聲たて添へて、地「南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。シテ「名にし負はゞ都鳥も音をそへて、地、子方「南無阿彌陀佛　南無阿彌陀佛　南無阿彌陀佛。シテ詞「なう唯今の念佛の聲は、まさしく我が子の聲にて候。この塚の内にてありげに候よ。ワキ詞「我等も左樣に聞いて候。所詮此方の念佛をば止め候べし。（母御一人御申し候へ。シテ「今一聲こそ聞かまほしけれ。南無阿彌陀佛。子「南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛、地「聲のうちより幻に見えければ、シテ「あれは我が子か。子「母にてましますかと、地「互に手に手を取りかはせば又、消え〳〵となり行けば、いよ〳〵思ひはます鏡、面影も幻も、見えつ、隱れつする程に東雲の空も、ほの〴〵と明け行けば、あと絶えて、我が子と見えしは塚の上の、草茫々として、たゞしるしばかりの淺茅が原となるこそ哀れなりけれなるこそ哀れなりけれ。（寶生流による）

講釋

この謠曲一篇の荒筋は、京都北白川なる吉田の某の一人子に梅若丸といふが、人買にかどはかされて、奥州へ下る途中、隅田川のほとりで病み煩ひ、置き去りにされて亡くなつた。子を失つた母は狂亂して、我が子の行方を尋ねつゝ、遙々東國に下つて來たが、丁度去年の今日死んだといふ一週忌にあたる日に、隅田川の渡し船の中で、船頭の口から我が子の横死の次第を聞いて、柳の下なる愛兒の塚を弔ふと、いたいけな愛兒の亡靈が、母の聲に和して念佛を唱へ、やがて、幻に現はれたといふのである。

謠曲は、神、男、女、狂、鬼と云つて、其の内容は大體、この神物、男物、女物、狂ひ物、鬼

物の五種に盡くされるが、「隅田川」は四番目物の狂女物と稱せられ、謠曲中での名作であり、また最も高尚な曲として、砧、大原御幸、景清、卒都婆小町、綾の鼓などと共に最高十一番の「許し物」の一つとされてゐる。吾々は此の一篇を讀むことによつて建築、彫刻、繪畫、音樂、文學、舞踊の六大藝術を綜合した「能」といふ特殊の藝術の趣を知り、此の一曲がシテ、ワキ、ツレ、男、子役などいふ役々によつて舞臺の上に演ぜらるゝ趣を知り、また此の一篇の文章としての味を知るべきである。

因みに言ひ添へておきたいのは、親子の愛情と人買との事である。此の二つの人間事象が、謠曲の中に數多く面白く描かれてゐるのは、一つは時代の現はれであらう。謠曲には親子の情を主題とした作が非常に多く、丸岡氏の『古今謠曲解題』によると、古今の謠曲八百餘篇の中に、親子關係のものが百餘篇も含まれて居る。また親子關係のものの中で、特に注目されるのは、「親子の別かれ」を扱つたものの多いことである。この「隅田川」もその一つであるが、これは恐らく、室町期が、生存競爭の極めて烈しかつた時代で、從つて家の榮枯盛衰も數多く、それに伴つて親子の別かれといふが如き悲慘事の極めて多かつたことを語つて居るのであらう。また人買傳說もこの時代には相當多く、謠曲の「櫻川」「三井寺」など、皆この種の傳說に依つて脚色されたもので、「隅田川」はその代表的のものであるが、これも當時が、政治の取締が行き屆かず、惡者が大手を振つて橫行した物騷な世の中であつたことを語るものであらう。

「隅田川」の作者については『能作者註文』には世阿彌元清の作とし、『二百十番謠目錄』には元雅の作としてあるが、暫らく前者に從つて世阿彌の作とした。

世阿彌は觀阿彌結崎清次の長男で、名を元清と云つた。世子とも稱せられてゐる。正平十八年（一三六三）に生れた。能藝の大成者で、實演、作曲、文章、及び藝術論等の凡てに於いて、實に絕倫の大才であつた。自覺ある藝術家としては、紫式部及び近松門左衛門と相並んで、我が古文藝界の三大偉人といふべきであらう。足利將軍義滿及び義政の殊遇を受けたが、故あつて後年仙洞の御勘氣を蒙り、又將軍義政の勘氣を受けたりして、佐渡が島に配流されたこともあつた。嘉吉三年（一四四三）に八十一歳で歿した。

【隅田川】　隅田川は角田川、墨田川とも書き、風流書きには墨水、澄江などと書かれ、俚俗には「たゞ「大川」ともいふ。武藏國荒川の下流、主として千住大橋から下流の稱である。此の川、昔は武藏國（西岸）と下總國（東岸）との境であつたが、今は兩岸ともに武藏領に取り入れられ、

國境は遙か東の江戸川となつた。

【この在所】在所は田舎の一郷村。在所、「在郷」「サイガウ」「ザイゴ」「ザイ」皆同じ意。

【さる仔細あつて】特別の事情があつて。「さる」は「然るべき」で、特別なる深い、といふ意。

【大念佛を申すこと】謠曲では、音便で「大念佛ト申す」と讀むことになつてゐる。「大念佛」は大掛りの念佛講といふこと。「申す」は唱へるといふ意。餘りにも哀れな梅若丸の菩提供養の爲めに、多人數集まつて諸共に念佛を唱へるといふ企があるので、といふことであらう。讀癖の方で「大念佛ト」と云つて居るのを聞くと、大念佛講とでも呼ぶ催しがあることのやうにも聞こえ、また其の方が妥當で、「大念佛を申す事」では落ちつかぬやうに思はれるが、もとのまゝ「大念佛を申す」では催しの意味に取るとは出來まい。金春流の謠本には、たゞ「扨もこの川は大事の渡りにて候ほどに、番に居つて舟を渡し候」とあるだけで、大念佛の事は全く無く、遙か後になつて「あれは人の追善のため大念佛を申し候。これについて哀れなる物語の候」とあるが、金春流の作者が、幼稚な修辭上の趣味から、最初に大念佛を言ひ出すのを無用として、削り去つたのでもあらうか。さて冒頭にかうぼんやりと言つたのは、觀衆讀者に怪訝の念を起こさせ、其の念の融解する所に興味を感じさせる爲めである。なぜかといふに、かういふ處を、もし平凡な作者に書かせるならば、或は「去年の今月今日、此の河畔に於いて梅若丸といふ旅の兒にしか〳〵の悲劇があつた。餘りに哀れなるによつて、一週忌の今日にあたり、特に大勢相集まつて、彼の子の後世菩提を弔ひたいと思ふのぢや。淚ある有志の方々の御參加を願ひまする」など云ふでもあらう。かういふと、當面の事情は殘る隈もなく、はつきりと解るが、後の大切なる狂女の歎き、船頭との問答、塚の前の念佛等の段々が、この冒頭の一節の附屬說明となつて、すつかり新鮮味を失ひ、從つて此の曲が、頭でッかち尻すぼまりの、つまらぬ作となるであらう。さすがに世阿彌は此處に氣がついた。そして彼れは大切な委曲のデテールは、後の慰みに取つておいて、冒頭には唯だ「さる仔細あつて大念佛」とだけ云はせた。觀衆は之れを聞いて、「ハテ、特別の事情があつて」と云つたな！しかも滅多にやらぬ大衆念佛をやるとある。何事か知らん？と怪しむであらう。此の怪訝の念＝解決を求める大關心の問題＝を意識の底に潛めつゝ、段々に觀進み、聽き進み、讀み進むと、やがて妙な狂女が出て來る。之れを見て何の爲めの狂ひぞと、又怪しませられる。そして調戯心地で慰み半分に狂亂の體を見てゐる。（此のからかひ氣分の慰みあしらひは、無論後の同情を更に深くせんが爲めの準備で、謂はゆる揚げんが爲めの抑へである。）船頭は更に輪を掛けてたしなめ、叱りつける。（此の激

しいたしなめ叱りは、同じく揚げんが爲めの準備で、同時に同情場面への轉廻機を作る爲めの刺撃である。）かう、いろ〳〵の問題や轉勢の準備を着々と整へておいて、さて先づ船頭をして、人商人が病に苦しむ稚き者を捨てゝ立ち去つた事を語らしめ、つゞいてその稚き者のやがて死んでしまつた事、この稚き者が都北白河の吉田の某の一人子なる事を語らしめ、同時に船中の都人にも大念佛への參加を勸めさせるのである。讀者はこゝにも三樣三重の趣向の含まれてゐることを見出だすであらう。一つは一般觀衆にぼんやりと同情させる事、即ちどこやらの子供が氣の毒な目に遇つたさうな、可哀相な事であると思つて、今日の大念佛の意味の半ばを會得させる事である。もう一つは、狂女なる母親に、さては我が子かと、氣づかせる油斷なき段取りである。彼女は船人が「去年の三月十五日」と言ふのを聞いて、先づ月日に於ける大體の合致に、もしやと感じたであらう。次ぎには「十二三ばかり」と言ふのを聞いて、「いよいよ！」と感じたであらう。それから人買にさいなまれ、置き去られて末期に臨む慘酷な光景に息づまる心地がしてゐる中に、今度は「北白川の」といひ、「吉田」といひ、更に「一人子」と言ふのを聞いて、「もういよ〳〵！」と思つたであらう。而して此の順序によつて、今度は狂女の方から、疊みかけて息づまるやうな質問を發した。第一に「いつの事ぞ」と聞いて、「去年三月今日」の答を得る。第二に「年」を聞いて、「十二歳」といふはつきりした答を得る。名は梅若丸、父は吉田。悲しい期待が一々着々と事實化されて、最後に

その稚き者こそ、この物狂が尋ぬる子にて候へとよ。

と宣言する。いかにも巧みに書かれてゐるが、かういふ間にも作者の注意が八方に配られて、油斷なき取扱振を見せて居る。といふ其の一つは、月日や、年や、住所や、父の名を繰り返す間にも、同中異、異中同の變化を見せてゐる事で、例へば、第一の月日については、最初に船頭に「去年三月十五日、しかも今日」と、わざと精確に語らせておいて、狂女との問答には、「去年三月今日の事」と、あつさりと簡略に答へさせ。第二の年齡については、船頭には「十二三ばかり」と、わざと漠然と言はせておいて、問答では、はつきり「十二歳」と定めて言はせ、名前については、船頭にはわざと「稚き者〳〵」とぼんやり言はせておいて、問答では、はつきり「梅若丸」と答へさせ、そして、所の「都北白河」をば問答の方にはわざと省いて、父の姓名をば、前の船頭の詞と同じく輕く「吉田の某」と答へさせてゐる如き、實に隙間のない注意の妙筆ではありませんか。玆にもう一つ、堪らなく面白いのは、作者が筆の遊びの綽々たる餘裕である。已に月日を確かめ、年齡を慥かめ、國をも名をも父をもたしかめた以上は、

すぐに「それこそ我が子なれ」と云はせてよささうなもの、又平凡なる作家ならば恐らくさう云はせたであらうが、さすがに世阿彌、かういふ場合にも、いさゝか洒落氣の餘裕を見せて、

親が來なかつたか？　母が尋ねで來はしなかつたであらうな！

と云はせたのは面白いではありませんか。狂人などいふ者は、折々常識はづれの意外な事をいふもの、これはそこを摑んだ趣向でもあらう。或ひは作者が作中の人物の陰に隱れて、一寸觀衆を操つて見たのでもあらう。とにかく何とも云はれぬ餘裕のあるユーモアの筆致で、結果をいそがぬ大家の筆、滿を持して容易に放たず、細心放膽、兩方を兼ねた言語道斷の筆といふべきものである。

調子に乘つて、ちと運び過ぎた批評までして了つたが、第三の、もう一つの趣向は、作者が船頭の詞を通ぼして、大念佛の謂はれを說明した事、及び「船中に都の人もありげに候」と云つて、都人たる狂女に出る機會を與へた事、殊に「逆緣ながら念佛を御申し候ひて御弔ひ候へ」と何氣なく一般的に言つて、それが意外にも、子にこそ弔はるべき母が、逆まに子を弔ふといふ逆緣念佛の傷ましい、しかし文學的には非常に面白い場面を湧出せしめる機會を與へたことである。

かくして、この船頭と狂女との問答によつて「さる仔細あつて大念佛を申す事の候」といふ怪まれたる宿題の意義が、何とも云はれぬ興味の間に於いて、溜飲の下るやうに明瞭する。つづいて今度は柳の下なる墓所の前の、母を加へた念佛によつて、先きに豫告された抽象的なる「さる仔細の大念佛」が、深長なる意義と特殊性とを有つた言語道斷なる大念佛となつた。この冒頭に於ける、ワキの詞の

仔細あつて大念佛を申す事の候

といふ、たゞの十四字より成る意味の漠然たる詞遣が、此の作に、疑念解決、結尾千鈞の大きな興味を與へる事、言ひ換へれば此の作を堂々たる雄篇大曲たらしめる事に與つて、如何ばかり力あるかは、これで大體察せられるであらうと思ふ。

序ながら近ごろの謠曲研究家の中には、文句や修辭の研究は、もう仕つくされたなどと云つて居る人もあるが、飛んでもない事で、かういふ趣向や、文章や、詞あしらひや、要するに、內容の中心意義を言葉に表現する上の工夫こそ、名作家達が、節や、舞の型や、裝束や、その他の事と同樣に、若しくは同樣以上に骨折つたことで、考へ樣によつて、かやうな言語的、文

章的、文學的の研究が、高い意味では、まだ殆んど手を着けられて居ないといふ方が中たつてゐると、私は考へて居るのであります。

【僧俗を嫌はず】　世捨人の坊さんたると、世間在家の俗人たるとに頓着なく、といふこと。「僧俗を」は、僧たると俗たるとをの意。

【人數】　ニンジュと讀む。首や須をシュともスとも讀むやうに、室町當時にはかう讀んだのである。

【末も東の旅衣】　謠ふ時には「末もあづまの旅衣、末も東の旅衣、ひも遙々の心かな」と、初めの句を繰返すのである。「ひも」は衣の紐に「日も」を掛けた秀句。大意は、旅衣の紐を結んで東の國を、行く末の落ちつき所と志して出かけたのであるが、何日かゝつて着けるやら、山河雲煙渺々として、さて果てしのないことである。といふこと。

【かやうに候者は云々】　謂はゆるナノリ(名乘、名宣)で、ワキの自己紹介。もと出場した人物の誰れたるかを見物に知らせる爲めの心添で、それがやがて能樂組織の肝心な一要素となつたものである。

【雲霞、あと遠山に越えなして…】　この道行全體を一束ねにして解釋すると、初めの句は『和漢朗詠集』なる紀齊名(きのなりな)の詩句に、「山遠雲埋(クシテ)ム行客跡(ノ)こ」とあるのを踏まへたのであらう。眼前脚下に近々と通り過ぎて來た野山里々が、程經てふり返ると、雲や霞のやうに遠く〳〵見える。斯樣に多くの山里を越えつ越えつして、京都から武藏まで、相坂關、鈴鹿關、新井關、清見關、箱根關、足柄關と幾つの關を越えて來たやら、かくして多くの國々を通り過ぎて行く中に、目の前に見えたは音に聞こゆる隅田川、其の川の渡場にもう無事に着いたことではある。といふ意。「あと遠山に越えなして」は目の前に近き山々を越えては、やがて雲霞を望むやうな遠山になしつなしつしてといふ意。卽ち近い山を遠山と化(な)すといふこと。「なす」は漢字の「做」の字で、「見做す」「聞き做す」皆同じこと。「いく關々」の「いく」は「行く」と「幾」との掛詞で、越え〳〵て行く幾つもの關所といふこと。東ねて簡潔にし、同時に一語兩義、一舉兩得の味を添へたのである。「名に負ふ」は名高いといふこと。「隅田川、渡りに」は、普通の散文ならば「隅田川の渡りに」と書く所であるが、七五調にして運んで來たので、一音を省いたのである。もし「スダガハ」といふ川ででもあれば、勿論「こゝぞ名に負ふ須田川の」としたのであらう。

【なか〳〵のこと】　「なか〳〵」は大昔は「却つて」の意に用ゐられたが、室町頃には「然り」

「いかにも」「よろしい」などいふ意に用ゐられた。こゝはその意。その後にはまた三轉して「頗る」「可なり」などの意に用ゐられるやうになつた。

【召され候へ】お乘りなさい。

【けしからず】異樣に。不思議に。どうも變だと怪しまれる程。「あなたの御いでになる後ろの方が馬鹿に騷がしい。あれは何で御座るか」といふこと。狂女を出す準備として男を出し、男のうしろに狂女をめぐるざわめきを見せて、船頭に怪しませ、好奇心から、その狂女を待たせて、主人公の狂女を登場させるといふ趣向である。能作者が人物を出す工夫の骨折も容易なものでないといふこと、同時に謠曲や劇を讀む者の心くばりも好い加減のものではすまないといふことが、これでわかるであらう。

【さん候】「さに候」の義で、「さればです」といふこと。

【女物狂】ヲンナモノグルヒ。女の狂人。

【是非もなく面白く狂ひ候】滅茶苦茶に狂ひまはる所が、とても面白いですよといふこと。「是非もなく」は、狂人の振舞として、專門家の舞踊のやうに、指す手、引く手、かざし、足踏みなどに何の規律もなく、めちやくちやに面白く狂つて居るといふこと。是非善惡を超越した面白さ」といふ意味にも取られるが、さうではあるまい。

【人の親の心は云々】『後撰集』にある藤原兼輔の名高い歌。意味は、親の心として闇ではなく、光にも照らされて道理もわかり分別もあるが、一念子に及ぶと、心が愛に暗んで道理も見えなくなり、分別をも失つてしまふといふ事。「げにや」は此の歌の人口に膾炙してゐることを豫想した心持で、「いかさま」といふ意。謠曲には「まよふ」とあり、他にも「まよふ」と書いてあるが、『後撰』の原歌には「まどひぬかるな」とある。

【今こそ思ひ白雪の……】此の一聲の大意は、是れ迄はさまで心にも留めなかつたが、今にして始めてしみ〴〵と思ひ知つた。見れば三月彌生のなかば、空は花吹雪して、落花も雪の如く、花をめづる人々が其の間を右往左往してゐるが、これら行路の人に託し、それからそれと言ひ傳へてなりとも搜したいと思ふが、扨あの子の行方を何として尋ねあてたものであらう。この狂亂の母が、身も世もあらず、かうして尋ねて居るのがお前の耳には入らぬのか。あれ見や、無心に空吹く風でも、音なふ毎に、松が應じて好い韻を聞かせるぞよ。かうまでなつて待ちに待つに、音づれ一つ聞かせてくれぬお前達が恨めしい。あゝ〴〵眞葛が原におく露同樣、はかない此の世に、失ひ別かれたいとし子を搜しもえせず、此の身の不幸を恨み〴〵、夜を明かし

日を暮らす、これが私の運命なのであらうか。といふことであらう。かういふ文句は、唯だ讀んでは面白いが、はつきりした意味は解りにくく、解釋は實にむづかしい。しかし是れが謠曲文特有の味で、作者の特に骨折つたところであるから、或る點までは眞義をあきらめてやらねばならぬのである。

「白雪の道行き人」は『古今集』なる凡河内躬恒の「春來れば雁かへるなり白雲の道行きぶりに言やつてまし」を踏まへたのである。そして躬恒の歌は越路の友を思ふ心を空飛ぶ雁に託したので、「白雲」と云つて相應はしく、また北の國に歸る序の、通りすがりの「道行きぶりに」(行觸)と云つて相應はしいのであるが、こゝは隅田河畔の地上であるから、「白雲」とは云はれず、子の在りかに行き觸れる人に託するのでないから、「道行きぶり」とも云はれぬので、白雪の「道行き人に」とはしたのであらう。白雪の「ゆき」は道行きの「ゆき」に對する同音の序として利用したのには相違ないが、なぜ「雪」と云つたかは、はつきりしない。强ひて考へたのではあるが、時しも三月の十五日(今の四月の中旬)、盛りの中にも落花して、謂はゆる「人間憂への花ざかり」、花びらが雪のやうに散り、雪のやうに大地を白くしつゝある頃であつたので、その聯想から、「雪のやうな落花の道を行く人」とは云つたのであらう。「何と尋ぬらん」は文法的に正しく解釋すると、「尋ねるのであらう」といふ意味になるが、察するに是れは作者がテニヲハの意味の思ひ違ひから來たので、「尋ねてん」といふべき處、卽ち「尋ねたものであらう。困つたな」といふ意味なのであらう。「松に音する」は、風が松を吹けば松が應じて音するといふ意に、眞心は千萬里を隔てゝも通ふもの、「待てば必ず音づれのあるのが習ひ」といふ意を兼ねたのである。「身を恨み」は我が身の不仕合を恨む意に、葛の葉の裏を見せることを兼ねたのであらう。「恨みてや明け暮れん」は徒らに不幸をかこちつゝ明かし暮らさねばならぬのであらうか、といふこと、「日々夜々を過して行かう」といふことではない。尙ほ嚴密にいふと「身を恨みてや」の他動を受けては、「明かし暮らさん」といふべきで、「身を恨みて明け暮れん」では、文相偶整(unity of voices)の規則を破ることとなり、意味も「我れは不幸の身を恨んで、其の間に月日が明けては暮れることであらう」といふことになるのであるが、作者は恐らく「明かし暮らさん」のつもりで書いたのであらう

此の一聲の美しい文句で、狂女シテの境遇感懷を簡潔に微妙に言ひあらはさしめ、つゞいて愛子を失ひ尋ぬる來歷を細かに述べさせた。順序立、開展ぶりが面白い。

【北白河(きたしらかは)】白河は山城國愛宕郡白河村地方の舊稱。此の川南禪寺の北から西へ流れ、三條と四條

との間で賀茂川に注ぎ入る。中古賀茂川以東の地を一般に白川と呼んだが、「北白川」はその北部の稱である。

【思はざる外に】思ひの外に、意外にの意。國語の中に打消があつてもなくても同じ意味に取られるのがよくある。「けしう」「けしからず」、「斜めに思召し」「斜めならず思召し」の類ひで、これも、その一つ。

【人商人】ヒトアキビト。人の子をかどはかして商賣する者。人買ひ。

【行方を聞けば逢坂の、關の東の程遠き、東とかやに】普通の散文ならば、「行方を聞けば、逢坂の關の東の程遠き東とかやに……」とつゞけるのであるが、七五調の韻文になつてゐるので、調子を本位とし、意義の文法的聯絡を犧牲にして、かうは讀むのである。

【千里を行くも親心】白氏文集に「親千里行不忘子」とあるのが、最初の出典であらう。謠曲「木賊」にも「親は千里を行けども子を忘れぬぞ誠なる。」とある。「行くも」は嚴密には「行くのも」の意になるが、こゝは「行きても」のつもりで、いかに遠く離れても、子を忘るることがないといふ意。

【聞くものを】聞いてゐるのに。それ以上の事を言ひつゞける前置の言葉。

【契り假りなる一つ世の】親となり子となる緣は、此の假りなる果敢なき現世だけだといふこと。「親子は一世、夫婦は二世、主從は三世」など云つて、親子は現在の一世だけしか添はれぬものといふ諺があるのでいふ。

【四鳥の別かれ】『孔子家語』の中、顏回が孔子に答へた言に、「回聞桓山之鳥、生二四子一焉。羽翼既成、將分二于四海一、其母悲鳴而送之」とある故事。

【これなれや】吾等母子の別れは、まさしく桓山四鳥の別かれである、といふ意。「これなれや」は本來「これなればや」といふ疑問の「係り」の意味であるが、室町頃には原意を失つて、「これであるよ」といふ意に誤り用ゐられるやうになつた。こゝもその意である。

【尋ぬる心の果てやらん】失つた子供を尋ねる心も、もう働き得ぬとゞのつまりとなり、同時に旅路の最端ともいふべき、遠い〳〵隅田川にも着いたといふこと。このあたり『伊勢物語』の東下りに據つたので、「東下り」の「その川のほとりに群れ居て、思ひやれば限りなく遠くも來にけるかなとわびあへる」の意をもち、「隅田」の名にも、或ひは最極端の隅ッこといふやうな味をもたせたのであらう。此のあたり、下歌、上歌であると同時に、道行の趣をも兼ねてゐる。この下歌上歌の意味を言ひつゞけると、ざつとかういふ心持である。子に引かさるゝ親

心、遠く千里を離れても、子を忘れぬといふではないか。さうまで思ふ最愛の子に、親子の契りは本來現世限りといふ、その現在世の中をだに伴ひ得ずして、あつちに、こつちに親一人子一人が、まるで桓山の四羽の鳥そのまゝの悲しい別れをしてゐるのだ。母心の一筋に、こゝまで尋ねては來たものの、もう精の盡き旅の果て、武藏下總の國境の名高い川、業平朝臣の遠い〳〵と云つてがッかりされた、その隅田川に着いたのだ。

【なうなう】　なうの重言で、人を呼びかける語。

【お事】　目下の者を親しんでいふ對稱の代名詞。そなた。おん身。

【面白う狂うて見せ候へ】　狂人に對して、「面白く狂へ」は、いかにも殘酷な要求である。もう三十餘年にもならうか、能樂研究會の席上で、故佐々醒雪氏が、謠曲に於ける狂人取扱の餘りに殘酷で非人道的なことを論ぜられたことがあつた。いかにも尤もな事である。けれども是れには一つの歷史的由來があるので、それを知れば、其の餘儀なさも知られ、同時に特別なる興味のあることもわかる。それは能樂の種子になつた延年舞の中に「狂ひ」といふ一種の曲藝のあつた事で、それの正氣を失つた氣の毒な人の是非もなく狂ふ樣を取り集めたしぐさが、馬鹿に面白いので、大衆の大歡迎を受け、そしてそれが又能樂に取り入れられて、最も興味ある一部を成したのである。能、謠曲の作者は、つまり然るべき機會を攝まへては、此の、竹の枝を肩げた男女のうつゝなき狂態を舞臺に演ぜしめたので、それをいかなる場合に、いかにして自然に取り入れるかが彼等の大いなる關心事であつた。此處も、やはり其のつもりで批評もし鑑賞もすべきであらう。思ふに、當時の觀衆は、ワキが

面白う狂うて見せ候へ。狂はずは此の舟には乘せまじいぞとよ。

といふと、女の境遇には同情しながら、同時にシテ役者の演ずる狂ひぶりを待ちこがれて、

太夫どの、しつかり狂つて貰はうぜ。

といふ氣持になつてゐたのである。

【うたてやな隅田川の渡守ならば・・・】　「うたて」は「うたゝ」の轉じたので、物事のあるが上に重ること。後にそれが專ら惡い事の重疊する事に用ゐられて、「いやな事だ」「餘りにひどい」といふやうな意味をもつやうになつた。こゝもその意。この邊殊に『伊勢物語』に據つたのらしく、謠曲の「隅田川の渡守ならば、日も暮れぬ舟に乘れとこそ承るべけれ」は、『伊勢』に「渡守、はや船にのれ、日も暮れなんといふに」とあるのを踏まへたので、原文では「早く御乘りなさい。ぐづ〳〵してゐると、日が暮れますぞ」と云つたのを、わざと文句を變へ、順序

を替へて「もう日が暮れましたぞ、早くお乘りなさい」と云つたのであらう。そして一つは夜念佛を唱へさせ、幽靈を出すに都合のよい時刻にしたのであらう。「かたの如くも都の者を云云」は、貌を見てもわかる如く、此の通り都の者なるを、「舟に乘るな」とお拒みあるは、その昔業平朝臣を乘せた名船頭の流れを渡む名所の渡守とも覺えぬ不粹無同情な事ではないか、といふ意である。即ち「都の者を」は「都の者なるを」の意で、田舍者でもあらばこそ、業平朝臣と同じく都から下つた者であるのにといふこと。それから「…渡守とも覺えぬ事な宣ひそよ」は、二度言ふべきを一度に束ねた「括り書き」で、一種破格の文致である。委しくいふと、

舟に乘るなと言はれるのは、隅田川の名渡守らしくもない事を仰しやるなよ。

こは、照應が喰ひ違つて、物に成つてゐないので、文法上正式には、

舟に乘るなと承るは、隅田川の渡守とも覺えぬ事なり、さる隅田川の渡守とも覺えぬ事をな宣ひそよ。

と言ふべき處であるが、それをば、重複する部分を掛持にして簡潔にしたのである。即ち大意は、「情ない事を言はれる。隅田川の渡守ならば、もう日も暮れましたよ、早く舟に乘れとそ言はるべきそはありませんか。見らるゝ通りの都の者を、舟に乘るなとは、名川隅田の渡守らしくもない、その樣な不粹無情な事を言ふものではありませんよ」といふこと。

【名にし負ひたる優しさよ】　さすが都人といふ名を持つてゐるのに、恥ぢない風流なことであるといふ意。『伊勢物語』なる「名にし負はば」の歌に思ひ寄せた含蓄的引用の味。

【その詞はこなたも耳に】　お前も話せる。いかにも「名にし負ふ」といふその詞は、私の耳にも留まつてゐる業平朝臣の歌だといふ意。

【ありやなしやと―なう舟人】　この渡場で「…ありやなしや」と詠まれたが…と續けようとした處を、フト珍らしい鳥が目に入つたので、文路を中斷して「なう船頭どの」と呼び掛けたといふ、破格の味の文章である。即ち文路を中斷した點からは遮斷法（interruption）ともいふべき人く、突然人に呼びかけた點からは招呼法（apostrophe）ともいふべき詞姿である。是れも『伊勢』の東下りを思ひ寄せたので、一種の飜案ともいへば云はれるであらう。

【浦にては】　何の由緒もない平凡な海邊などでこそ、の意。

【白き鳥をば都鳥とは】　古典趣味、都會趣味の現はれで、昔の名人の逸話や、名所の由緒を重んじた室町時代の、また日本的趣味の現はれともいふべきもの。

【心なくて】　風流心がなく、「物のあはれ」を解さないので。

【沖の鷗と夕波の】「ゆふ」は言ふ迄もなく「言ふ」に「夕」を掛けた秀句で、眼前に打つては返して居る夕暮方の川波に興を寄せたのである。こゝの前後は、シテ、ワキの掛合になつてゐるが、しばらく自由に大體の意味を解釋すると、「風雅をわきまへずして、名所に住んで居りながら都鳥とも答へず、海ならぬ川邊で「沖の鷗」など申したは恥かしい事」「あゝタべの川波がザブ〳〵と打つては返して居るが、さて打ち返し、昔に溯つて考へると、業平朝臣が「我が思ふ人は無事か」と都鳥に尋ねられた、その都の人は愛する妻、わたしがかうして東國の果までさまよふのは愛する子供の行方を尋ねる爲め、妻を戀ふのも、子を尋ねるのも、同じく人を戀しいと思へばこそ」といふ意。「思ひ妻」「思ひ子」は對の語を成してゐるが、「思ひ」は愛するといふこと。都の人を思ひ妻」は一寸解し難い詞つゞきであるが、察するに「言問ひしも」がこゝの主格になつてゐるので、「ありやなしや」といふ歌を詠んで都鳥に尋ねたのも、都の愛人を思ふあまりに出た詞の端くれ、斷片語だといふので、その詞の端といふ意の「つまを、同時に妻の意に寄せたのであらう。

【うたて都鳥、鄙の鳥とやいひてまし】「かう迄問ふに、尋ねるのに、答へぬとは、エゝわからずやの鳥め、もう〳〵お前を都鳥などとはいふまい、田舍鳥の田吾作鳥と言つてのけうぞ」、といふ意。おれた心を、非常に面白く言ひ現はしてゐる。

【げにや舟ぎほふ、堀江の川の】大伴家持の歌、萬葉集卷第廿に見え、「右三首江邊作之」といふ添書がある。「舟ぎほふ」は舟を漕ぎきそふこと。「堀江の川」は人工で開鑿した堀割のこと。一首の意は、出船入船の賑やかに漕ぎ競つてゐる難波堀江の岸近く、人にも怖れず飛び群れつつ、啼いてゐるのは都鳥か。繁華を愛し人に親しむらしい所を見ると、いかさま都鳥の名が相應はしいわい、といふ味である、「げにや」は轉じつゝ續けたので、「いかにも、家持卿が都鳥の歌もあつて、此の鳥隅田川の獨占ではないが、それは難波、これは東國」とつゞいた味である。

【思へば限りなく、遠くも來ぬるものかな】『伊勢』の「思ひやれば限りなく遠くも來にけるかな」を、謠曲風に調子づけて書きかへたのであるが、謠と舞とを合はせて見て、實に飄渺幽遠の限りなき味を見せてゐる。「さりとては」は實に面白い味の詞だが、說明しにくい。「お前の言ふ事に一理はあらうが、さればとてそれは餘りにつらい」といふやうな意味でもあらう。又「人を散々狂はせ舞はせておいて」といふ心もあらう。「舟こぞりて狹くとも」は『伊勢物語』では「船こぞりて泣きにけり」とあり、「船中の人悉く」といふ意味になつて無理はないが、と

こでは「澤山の船が全部」といふやうに聞こえて、穩かならぬ嫌ひはあるが、それにも拘はらず、詞が古雅で『伊勢』を思はせ、又前後の關係から、難なく「人が一ぱいに込み合つて」といふ意味を理解させて、換へ難き味がある。

乘せさせ給へ渡守、さりとては乘せてたび給へ。

は、例の變化をつけて繰返した謠曲文獨特のもので、これも何とも云はれぬ妙味である。

【われも又いざ言問はん】から、引きつゞけてざつと散文譯を試みる。能ではこゝから、シテの狂女が、ワキの求めに應じて狂ひ舞ふので、舞ひ了つて、これほど言はるゝがまゝに舞うたのに、殊には胸に萬斛の憂を懷いてゐる妾である、さりとては惆悵な乘せて下され、といふのであるから、其處を頭に入れておいて下さるやうに。「昔の業平朝臣に倣つて、妾も尋ねるであらうぞ。都鳥よ、忘るゝ間もなく思ひ尋ぬる我が愛し子は、東國のどのほとりに居るのか？　たゞしは居ないのか？　これ程問ふのに答へぬとは、情知らずのろくでなし、「都」の名は勿體ない、もう是れからは田舍の、ゐなかの肥たご鳥と云つてのけうぞ。そりや、外にも都鳥が居るには居る。「堀江に來ゐる都鳥」とも云つて、家持卿の歌にもあるが、それは遠くの西の難波江、これは東の隅田川、その果ての隅の東國まで、子故に心狂うてとは云ひながら、よくも遠く遠く來たものではある。それにしても聞こえぬは船頭殿、船一ぱいで込み合ひもせうが、乘せて下され船頭どの。ねい船頭どの」といふのであらう。

【大事の渡りにて候】大切な油斷の出來ぬ渡りでありますぞ。

【かまへて】注意して、落ちついて、はやる心を制して、

【さん候あれは大念佛にて候】冒頭なるワキの最初の詞に、「さる仔細あつて、大念佛を申す事の候間」とあり、此の大念佛の催しは、已に觀衆一同の知つて居る事であるから、「あれこそ大念佛にて候へ」といふ方が利くかと思ふが、多分此の問を發した「男」がまた知らないと見て、初耳の人に言ふ如く、「あれは大念佛にて候」と云つたのであらう。

【偖も去年三月十五日、しかも今日に相當つて候】この「語り」がワキの働きどころで、また聞かせどころ、見せどころになつて居り、文章もなか〳〵よく出來てゐるが、冒頭の「しかも今日に相當つて候」などは、之れによつて、今日が三月十五日で、亡兒が一週忌の當たり日なる事が知られ、同時に何となく聞手の心を緊張せしめる效果があつて、簡潔自然の妙を極めて居る。「奥」は奥州のこと。「違例」では不斷と違つた心地になることで、病氣のこと。

【なんぼう世には情なき者の候ぞ】何と、世間には無情な者のあるものではありませぬか。とい

ふので、文路を逸らして、感投的の味を見せたのである。

【由ありげに云々】何か由緒ありさうに。身分ある者の子らしく見えたので。

【前世の事にてもや候ひけん】ゼンゼと讀む。前世から定まつた因果應報の天命ででもあつたのでせうか。

【たんだ】「たゞ」の音便。回復の徴候は少しも見せず、ずん〳〵めき〳〵と弱つたといふこと。

【いづく如何なる人ぞと、父の名字をも國をも】「何處の誰れだと云つて父の苗字をも尋ね、生れた國をも尋ねたといふことであらう。

【かどはされて】「かどはかされて」ともいふ。「かどはかす」は、暴力または詭計を用ゐて、小供や婦女子等を誘ひ出して連れ行くこと。誘拐。

【誠は都の人の足手影までも懐かしう候へば】觀世流の本には「都の人の足手影も懐かしう候へば」とあるが、寶生流の方が解りもよく又情もうつるやうに思ふ。「足手影」は足と手と影との三つを擧げたのであらう。懐かしきは生れ故郷の都の人、其の人（全人）の懐かしいのは言ふまでもなく、せめて都人の足に踏まれ、手を合はせて貰ひ、また通りすがりの影がさすだけでもうれしいから、その手足の觸れ易く、影のさし易い路傍に埋めて下され、また人を誘ふやうに柳を植ゑて下され、といふのであらう。在來の諸註には「手足の影」と解いて居るが、さうではあるまい。第一に足手の影は順序も語路もわるし、又足は身體の中最も地に近くして、殆んど影のさゝぬものである。決くこれは足と手と影と、三つの列擧であらう。そして此の順序立は（一）踏まれるだけでもうれし、（二）立ち止まつて手をかざして、回向でもして貰へば更に難有し、（三）又無心の素通り姿の影がさすだけでも悦びだから、といふのであらう。「足手影までも」の「までも」が、殊に此の情味を現はして居るやうに見える。

【おとなしやかに念佛四五遍唱へ遂に事終はつて候】大人らしく殊勝に念佛を唱へて、事きれたといふこと。「事終はる」は絶命、絶切。此の處觀世本には

柳を植ゑてたまはれと、おとなしやかに申し、念佛四五遍唱へ、終に事終はつて候。

とあるが、さうすると、柳を植ゑよなどと、大人らしく云つて、といふことになる。味はそれぞれだが、おとなしやかに念佛を唱へたといふ方が穩かで面白いと思ふ。

【逆縁】不順不合理の關係といふこと。年長者が年少者を弔ひ、或は死者と何のゆかりもない者が法會を營む如きことにいふ。

【いかにこれなる狂女、何とて船よりは下りぬぞ急いで上がり候へ。……落涙し候よ。急いで船

。より上がり候へ】狂女が素性の打明けを自然にし、哀れにする爲めに、乘客一同の下船を求めた上に、改めて狂女の下船を促し、更に詞を強めて再び下船を命じたのであるが、全體がよく出來てゐる中に、殊に面白いのは、一たび下船を促した次ぎに、「あら優しや……落涙し候よ」と獨言の嗟嘆を交へ、再び相手に對つて下船を促した、自然で而して變化のある筆致である。「變化」といへば、「上がり候へ」が此の三行の間に三度まで繰返されて居る間に、人知れず見せた變化の筆であるが、最初には船客一同に向つて

とう〳〵御上がり候へ。

と言つたのが、狂女を促す時には、

急いで上がり候へ。

と言つてゐる。「急いで」と云つたのは、「とう〳〵」に對して、同語を繰返さじの心じらひであらう。「御」の字の敬語を除いたのは、敬意を失つた自然の結果ではあらうが、一つは變化避板の人知れぬ苦心を見せたのであらう。更に再度の促しには、

急いで舟より上がり候へ。

となつて居る。「舟より」と云つたのは、いまでも舟に居るので、舟を離れよと云つたのであらうが、之れを追加した他の有力な理由は、やはり、同語を用ゐずして變化を見せる作者の文章潔癖に歸すべきであらう。

【あらあさましや候】「候」は「ざふらふ」と濁ることになつてゐる。意味は「あさましき事にて候」といふのであるが、「あさましや」と感歎式に言ひ切つて、「候」と言ひ添へると、中間に省略思入の餘地があつて面白くなつて來る。たとへば「ひどいことですね」と「ひどいわ、ね」との違ひのやうなもの。「痛はしや候」「うれしや候」みな同じことである。

【言語道斷】善惡共に言葉に道ひ現はしきれぬ深い意味のあること。「言語道斷の事にて候」など云はずして「言語道斷」と云ひ切つたのは感投的の味。

【墓所】ムショとよむ。

【今まではさりとも逢はんを云々】今といふ今までは、悲歎し失望しながら、それにしてもつまりは逢はれさうなものと、それを賴みにしてかく遠方まで來たのに、といふこと。

【さても無慙や死の縁とて】それにしてもむごたらしい、かうして死ぬべき因緣があつたのであらう、わざ〳〵生れた故郷を去つて、東の國の遙かの果ての、哀れや路傍の土となつて、尋ぬる我が子は影もなく、見ゆるは春の若草ばかり。おゝ此の下にとそ居るのであらう。といふこと

と。「死の縁」は少し曖昧だが、旅で死ぬべき宿縁といふ事ではなく、唯だ「死なねばならぬ宿縁があつて」といふのであらう。而して死ぬに所もありさうなものを、選りに擇つて東國邊土の果てまで來て死ぬるとは、とつゞくのであらう。「道の邊りの土となりて春の草のみ生ひ茂りたる」は、白樂天の詩の句「化作=路傍土一年々春草生」を踏まへたのである。櫻の盛りの三月の十五日に、春の草の生ひ茂るは少し不自然な誇張だが、實際ばなれの理想化を特色の一つとしてゐる謠曲の文としては、別に目角を立てるにも及ぶまいと思ふ。

【殘りても、かひあるべきは空しくて……】文飾が入り組んで解りにくゝはあるが詞が美しく、調子がよく、その上一種の深い人生味を暗示する力があつて、何とも云はれぬところがある。大意は、「生き殘つて、殘り甲斐のある、未來に富んだ可惜子供は空しくなつて、存命へ居るは生き甲斐もなき母一人、そして信濃の國の園原にありといふ帚木の如く、亡き兒の影が幻に立つて、見えては隱れ、かくれては見えるのに茫然として居るのだ。あゝ老少不定、さだめの無いのが憂き世の習ひ、しかも人間の花盛りはまた憂の盛りで、無常の嵐までが物凄い音を添へて散れよと誘ふのだ。生きる死ぬるで過ぐし行く人の一生は、たとへば長き夜の夢のやうなものの、その長夜の夢路を、眞如の月に導かれて、辛うじて過ぐすのだが、その月の影をも、あてにならぬ村雲が覆ひかくすのだ。それは想像ではない、譬喩ではない。他の身の上ではない、眼前脚下の憂世の姿、それがまざ〳〵と我が子の上に現はれて居るではないか。」といふ事であらう。「帚木」はハワキギと讀む。信州園原山の老樹の幹の間などに、箒のやうに叢生した寄生木があつて、遠く望むと薄々と見えるが、近寄ると見えなくなると言ひ傳へられた傳說の木。それが音の類似から「母」に譬へられることとなつた。こゝは例の秀句の掛詞で、上につゞいては「生きてゐても役に立たぬ母」といふ意味になり、下につゞいては「帚木のやうに見えたり隱れたりする亡き兒の面影」といふ意味になるのである。そして其の「面影」が同時に次ぎの句にもかゝつて、「ちら〳〵と見え隱れする亡兒の俤のやうに、定めなき世の習ひ」といふ意味になるのである。「人間憂の花ざかり」は破格の名句ともいふべきか、解らないやうでゐて、實に面白い、花盛り、世ざかりの全盛期には、生憎と同時に心配事の簇生群起することを歌つたのであらう。「人間憂への」から「雲覆へり」までは、謂はゆる「月に叢雲花に風」の心を現はしたので、花盛りは憂の續出する折であるのに、嵐までが加勢して散らさうとする、月の光をたよりにして、やつと一生を渡らうとするのに、雲の奴めがその月の光を隱す、といふ意味を、詞をあやなして暗示的に言ひ現はしたのである。「無常」「不定」は語を變へて變化

をつけたので、謂はゆる諸行無常、世の中の事物は常に移りかはるものだといふ思想のこと。

「不定」はフヂャウと讀む。尙ほ全部がさうであるが、此の邊の句讀の接き離れの變になつてゐるのは、悉く、謠曲の謠ひ方によつたのである。

【後世を御弔ひ候へ】念佛を唱へ、その功力によつて、梅若丸の後の世、卽ち來世が、助かるやうになされ、現世の今生が此の通り不幸でも、次ぎの世は助かつて、極樂淨土に安住されるやうになされ、といふこと。

【已に月出で川風も】十五夜の月ももう出て居る、川風の身にしむのは夜も大分ふけたのであらう、もう念佛を始むべき時分であると云つて、といふこと。

【鉦鼓】シャウゴ。念佛の時伏せておいて撞木で鳴らす鉦。ふせがね。

【鳧鐘】フショウ。鳧鐘は本來鐘のことであるが、こゝでは前の鉦鼓を指す。周禮に「鳧氏鎛鐘矣。」とある。

【聲澄むや】この「澄むや」は、上には「聲」にかゝり、下には「月」にかゝる。

【南無や】以下は淨土宗念佛の文。南無は歸命と譯する。佛や法や僧やの謂はゆる三寶に對して歸依、敬禮、信順を表する語である。重ねては「南無歸命頂禮」などといふ。

【西方極樂世界】佛敎で西方にありといふ極樂淨土、西方極樂とも、西方世界、西方安樂國、西方淨土ともいひ、また單に極樂世界、極樂淨土などもいふ。至極の快樂幸福のみのある清い淨い國といふ意。西の方十萬億土を隔てた彼方にある阿彌陀如來の居所で、佛果を得た亡者だけが往生することの出來るところ、而して淨土宗では、專心に念佛さへすれば誰れにもそこへの往生が叶ふといふのである。

【三十六萬億同號同名阿彌陀佛】西方極樂には概算三十六萬億の世界があり、そのおの〳〵に同じ名號の阿彌陀佛が居られて、娑婆世界から來る無數の善良な亡者を迎へられるといふ佛敎の所說を踏まへた文句である。阿彌陀佛は淨土宗、淨土眞宗の本尊で、無量壽佛、無量光佛、無碍光佛、盡十方無碍光如來等の異名がある。

【シテ「この身も鳧鐘を取り上げて ワキ「歎きをとゞめ聲澄むや シテ「月の夜念佛もろともに ワキ「心は西へと一筋に シテ、ワキ「南無や西方極樂世界。】大體は一筋に聯絡した文句を、ワタリ臺詞式の掛合に、シテとワキとで引き取つて謠ふので、大意は、母が鐘を取り上げて、涙を抑へ、聲を澄まし、十五夜の明月のもとで、大衆の念佛の聲にうれつゝ、心の中にはどうぞ佛樣、わが子を淨土にお救ひ取り下されと、一心に稱へた、といふ事であるが、假りにシテ、ワキに分

けて意味を取ると、こんな事になるであらう。

シテ「我が子の爲めになるならばと、自ら鬼鐘を取り上げると、

ワキ「さう〳〵其の通り、歎きをやめ、聲をすましてね。

シテ「かうして明月の下で、大念佛の人達と御一しよに、

ワキ「西方淨土に御救ひ取り下されと、一心不亂にですヨ。

シテ、ワキ「さあ聲を揃へて御一緒に、南無や西方……

【南無や西方極樂世界……】　佛樣の御前に身を投げ伏して、一心不亂に祈り願ひまする。西方十萬億土の彼方には三十六萬億の極樂世界があつて、其の一々に同じ御名の阿彌陀樣がおはすと申す。その阿彌陀樣よ、どうぞ我が子を……と一心に祈ると、

【隅田川原の、彼風も聲たて添へて】　……一心に祈ると、心なき波も風も感應したか、「あれ聞け……隅田川の波風も南無阿彌陀佛〳〵〳〵と、音を添へて共に祈つてくれるではないか。のみならず、今度はさすがに名鳥、都鳥までが聲を添へて、共に祈つてくれるではないか。いや〳〵今度は河風のみならず、都鳥のみならず、アレ〳〵子供の稚い聲の念佛が、大衆の聲をバックとし、波の聲、風の聲、鳥の聲にうち交つて聞こえるではないか。なう〳〵皆の衆や、あれをお聞きなされ、……といふ味。幽界の子供を出す爲め、またその出現を自然にする爲めに、第一に大衆の念佛、第二に母、第三に川原の波風、第四に都鳥と、段々に調子を進めて、最後に子供の聲を聞かせ、更にその姿を現はさせたので、こゝにも藝術家の念の入つた準備を見るべきであらう。而して一たび聲が聞こえてからも、先づ母をして

「申し、今の念佛の中に、子供の聲が交つてゐたではありませんか。此の塚の中らしいやうですね。

と云はせ、

「いかさま、」さうと聞きました。

では吾々の方の念佛はやめませう。お母樣一人で唱へて御覽なさい。

「あゝもう一聲が聞きたいのだ、南無阿彌陀佛」

とつゞけさせ、之れに應じて、子供の念佛が聞こえ、同時にその姿が幻に見えて來た、などは、拔け目の無い用意といひ、面白いあしらひの愛嬌を添へた技巧といひ、文句の落ちつきといひ、實に見あげたものである。

【手に手を取りかはせば又、消え〳〵となり行けば】　うれしやと、互に手を取りかはす、取りかはすと思ふ中にすぐ消え〳〵となつて行くので、といふのを、「かはせば―行けば」と、手續を

省略して呼吸を急にしたのである。

【いよ〳〵思ひはます鏡……】いとし子に逢ふと思ふ間に、すぐ姿が消えさうになるので、逢ふの嬉しさ、別かれのつらさが絡み合つて、益〻心配が増して來るといふこと。「互に手に手を取りかはせば」は母子二人の事、それからは母一人の事になり、子供の姿が消え行くのに愁へ歎きが加はつて來たといふこと。「ます鏡」はますみの鏡の意、よく澄んで明るい鏡のことで、上に連ねては「思ひは増す」とかゝり、下に連ねては「鏡に面影、幻が見えつ」とかゝる。此のキリの句の大意は、互に手を取る、うれしやと思ふ中に、その姿が片端から、かき消すやうにおぼろになつて行くので、悲しい思ひは増しに増すばかり、其の中に面影がはつきり見える、と思ふと幻のやうにぼんやりとうすれて見えなくなる。あゝ又見えた、又うすれた、隱れたと思ひ〳〵してゐる中に、いつしか東の空が白みかける。次第々々に明るくなると、今迄隱見してゐた、怪しき影がすつかり失せて、いとし子と思つたのは塚の上の草であつた、しかもその草がつゞき續いて、その間にぽつちりと唯だ一基の墓を點ずるばかり、あとは滿目蒼茫々たる野原とはなつた。といふこと。幽靈を出すまでの用意も行き屆いて自然なものであつたが、その幽靈の姿を長く留めずに忽ち消した手際、明暮（あけくれ）、味爽の、夜晝の移りかはる境目の中に、ぼうッと美しく消えさせた手際も亦妙といはねばならぬ。「あと絶えて」は一寸曖昧だが、幽靈がすつかり見えなくなつたといふことで、見えつ隱れつする中にも、隱れる方が多く長くなつて、段々と影がうすれて來たが、その辛うじて止めた薄き影の跡がといふ味であらう。「塚の上の草茫々として」は、同時に上下兩方にかゝるので、上に連つては、「我が子と見えしは塚の上の草なりき」となり、下に連つては、その草が茫々と野一面に廣がる、といふ意になるのである。「面影も幻も」は一寸曖昧だが、「面影」ははつきり見える方についていひ、「幻」はぼんやりと消える方について云つたのであらう。即ち面影も見えつ、幻も消えつ、とつゞくのであらうかと思はれる。

【批評】文章の局部々々や、情景の開展、仕組などに關する批評は、以上にかなり委しく試みたつもりである。最後に全體について一二言を加へると、此の作の名曲となつた因由の一つは、世話物的興味ともいふべきもので、具體的にいふと室町時代に頻りに行はれて、時人の興味の中心の一つとなつてゐた「人買ひ」や、親子の別れを主題とした點にあらう。もう一つは古典的興味ともいふべきもので、具體的にいふと、王朝の大古典たる『伊勢物語』の業平東下りを取り入れた點にあらう。殊に「隅田川」が、同じ人買ひや親子、兄弟、夫婦、主從の別離を主

題とした、他の「櫻川」や「三井寺」や「百萬」や「班女」や「花筐」や「花月」や「柏崎」などよりも遙かに味ひの深きもの、品位の高きものと思はれるやうになつたのは、主として此の古典に一脚を立てた爲めであらうと思はれる。之れについては、他の別離物が、再會をキリの興味としてゐるのに對して、「隅田川」が「つひの別れ」を、しかも幽靈との假りの再會を經た後の永久の別かれを、主なる興味としてゐる事も、此の作のえらく見らるゝ一つの因由であらう。是等いろ〳〵の優れた條件を具へた上に、文句、趣向の方に於いて特別の輝きを見せて居る事が、此の曲、成功の最も大切な原因となつてゐること、是れはいふまでもないことである。

第九　謠曲、羽衣

――その本文、解釋及び批評――

（結崎世阿彌作）

ワキ、立衆、一斉、ツヨク「風早の、三保の浦廻を漕ぐ船の、浦人さわぐ、浪路かな。

ワキ、サシ「是れは三保の松原に、白龍と申す漁夫にて候。萬里の高山に雲忽ちにおこり、一樓の明月に雨はじめて晴れり。げに長閑なる時しもや。春のけしき松原の、浪立ちつゞく朝霞、月も殘りの天の原、及びなき身の眺めにも、心そらなるけしきかな。下歌「忘れめや山路をわけて清見潟、遙かに三保の松原に、立ち連れいざや通はん、立ちつれいざや通はん。上歌「風向ふ雲のうき浪たつと見て、雲のうき浪たつと見て、釣せて人や歸るらん。待てしばし春ならば、吹くも長閑けき朝風の、松は常磐の聲ぞかし、波は音なき朝なぎに、釣人多き小船かな、釣人多き小船かな。

ワキ、詞「我れ三保の松原にあがり、浦の景色を眺むるところに、虛空に花ふり音樂聞こえ、靈香四方に薫ず。これ只事と思はぬところに、是れなる松にうつくしき衣かゝれり。寄りて見れば色香妙にして常の衣にあらず。いかさま取りて歸り古き人にも見せ、家の寶となさばやと存じ候。シテ、女、詞「なう其の衣はこなたのにて候何しに召され候ぞ。ワキ、詞「これは拾ひたる衣にて候ほどに取りて歸り候よ。シテ「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべき衣にあらず、本の如くに置き給へ。ワキ、詞「そも此の衣の御主とは、扨は天人にてましますかや。さもあらば末世の奇特にとゞめ置き、國の寶となすべきなり。衣をかへすことあるまじ。シテ「悲しやな羽衣なくては飛行の道も絶え、天上に歸らんこともかなふまじ。さりとては返したび給へ。

ワキ、カヽル、ヨワク「この御言葉を聞くよりも、いよ〳〵白龍力を得、本より此の身は心なき、あまの羽衣取りかくし、かなふまじとて立ちのけば、シテ「今はさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、ワキ「あがらんとすれば衣なし、シテ「地に又すめは下界なり。ワキ「とやあらんかくやあらんと悲しめど、シテ「白龍衣を返さねば、ワキ「力及ばず、シテ「せんかたも、同「なみだの露の玉かづら、がさしの花もしを〳〵と、天人の五衰も目の前に見えてあさましや。シテ「天の原、ふりさけ見れば、霞たつ、雲路まどひて、行方知らずも。下同「住み馴れし空にいつしか行く雲の羨ましきけしきかな。上同「迦陵頻伽の馴れ〳〵し、迦陵頻伽の馴れ〳〵し、聲今更にはつかなる、雁がねの歸り行く天路を聞けばなつかしや。千鳥鷗の沖つ波、行くか歸るか春風の空

に吹くまで懐かしや空に吹くまでなつかしや。ワキ、詞「御姿を見奉れば、餘りに御痛はし候く程に、衣を返し申さうずるにて候。シテ、詞「あら嬉しやさらは此方へ賜はり候へ。ワキ「暫く。承り及びたる天人の舞樂、たゞ今爰にて奏し給はゞ、衣を返し申すべし。シテ「うれしや扨は天上に歸らんことを得たり。この悦びにとてもさらば、人間の御遊の形見の舞、只今こゝにて奏しつ、世の憂き人に傳ふべしさりながら、衣なくては叶ふまし、さりとては先づ返し給へ。ワキ「いや此の衣を返しなば、舞曲をなさでそのまゝに、天にやあがり給ふべき。シテ「いや疑ひは人間にあり。天に僞りなきをもの。ワキ、カヽル「あら恥かしやさらばとて、羽衣を返し與ふれば、シテ「をとめは衣を着しつゝ、霓裳羽衣の曲をなし、ワキ「天の羽衣風に和し、シテ「雨に潤ふ花の袖ワキ「一曲をかなで、シテ「舞ふとかや。同「東遊の駿河舞、東遊の駿河舞、此の時や始めなるらん。クリ、同「それ久堅の天といつば、二神出世のいにしへ、十方世界を定めしに、空は限りも無ければとて、久かたの、空とは名づけたり。シテ、サシ「然るに月宮殿の有樣、玉斧の修理をこしなへにして、白衣黑衣の天人め、數を三五に分かつて、一月夜々の天少女、奉仕を定め役をなす。シテ「我れも數ある天をとめ、同「月の桂の身をわけて假りに東の駿河舞、世に傳へたる、曲とかや。クセ「春霞、棚引きにけり久方の、月の桂の花や咲く。げに花鬘いろめくは春のしるしかや。面白や天ならで、爰も妙なり天つ風、雲の通ひ路吹き閉ぢよ。をとめの姿、しばし留まりて、此の松原の、春の色を三保が崎、月清見潟富士の雪いづれや春のあけぼの、類ひなみも松風も長閑なる浦の有樣。其の上あめつちは、何を隔てん玉垣の、內外の神の御末にて、月も曇らぬ日の本や。シテ「君が代は、天の羽衣まれに着て、同「撫づとも盡きぬいはほぞと、聞くも妙なり東歌聲添へて數々の、笙笛琴箜篌、孤雲の外に充ち滿ちて、落日の紅は蘇命路の山をうつして、緣は波に浮島が、はらふ嵐に花降りて、實に雪をめぐらす、白雲の袖ぞ妙なる。シテ「南無歸命月天子、本地大勢至。同「東遊の舞の曲、シテ「或は、天つ御空の緣の衣、同「又は春立つ霞の衣、シテ「色香も妙なりをとめの裳裾、同「左右左、左右颯々の、花をかざしの天の羽袖靡くも返すも、舞の袖。

キリ、同「東遊の數々に、其の名も月のみや人は、三五夜中の空にまた、滿願眞如の影となり、御願圓滿國土成就、七寶充滿の寶を降らし、國土にこれを施し給ふさるほどに、時移つて、天の羽衣、浦風に棚引きたな引く、三保の松原浮島が雲の、愛鷹山や富士の高嶺、かすかになりて天つ御空の、霞にまぎれて、失せにけり。（寶生流の本による）

講釋

我々は前章「隅田川」に於いて、謡曲概念の一斑を知つた。あの「隅田川」とこの「羽衣」とどちらもいはゆる「鬘物」と稱せられる、女性を主役とするものであるが、二者の內容と情趣とは大いに異つてゐる。先づ彼れは子を失うた母の悲歎を主題とし、これは地上のものならぬ天女の一喜一憂を述べてゐる。たとひ能樂は現實的寫實的のものでないとはいへ、彼れはとにかく人情の曲折を寫さうとねらつてゐるが、これは無論人情の機微に觸れた點を有ちつゝも、要するに超自然的の物語である。彼れはかどはかされた愛兒の跡を物狂ほしく尋ねて來て、最後にその兒の死に遭ふといふ悲劇で、唱ふるは念佛の聲、奏づるはしめやかな鉦鼓の音、これらに和して物さびしい秋の風が、荒涼たる武藏野を吹いてゐる。これはまたのどかな春の空に聳ゆる富士の靈峰を背景とし、風光明媚な三保の松原、清見潟を舞臺として、端嚴美妙の天女が、花やかな、きらびやかな、そして朗らかな奏曲の裡に、羽衣をひるがへしつゝ昇天する。徹頭徹尾美しいが、殊に最後の昇天は神韻縹緲として觀る者を夢幻の淨樂世界に彷徨せしめるの感が有る。前半に於ける人天の隔絶、後半に於ける人天の融合、この天と地と、現實と理想との境に於いて、夢の如く幻の如き崇高美に心靈の淨化を感ぜしめるのが、此の曲のおもなる德の一つであらう。此の曲の有する全面美は特別の機關と機會とが無くては味はふる由も無いが、文章の美しさを知るだけでも、目的の主なる一部は達せられるであらう。ワキの白龍が副主人公として、殆んど完全に役目を果たして居る事も見逃がされぬことである。彼れが心境の推移と之れに伴ふ言動とは、いかにも自然であるが、我々は特に、彼れが率直な人間感情の代表者として、天女と相對立しつゝ、一段々々とこの曲を展開させて居る趣に注意したいと思ふ。尙ほ本曲に於いて注意すべきは、文中に日本意識を多分に含蓄して居ることである。尤もこれは謡曲の大部分の持つてゐる特色ではあるが、此の曲に於ける特別な現はれは、殊に吾々の推稱に値するであらう。

「羽衣」の作者は「隅田川」と同じく世阿彌元清といはれてゐる。以前は謡曲の文詞は多く僧

侶の手に成つたもので、曲や舞だけをその業の人が作つたと想像されてゐたが、明治の末年に世阿彌が遺著の十六種、謂はゆる『世阿彌十六部集』が發見されるに及んで、始めて、文章も亦能藝專門家の手に成つたことが證明された。謠曲の主なるもの內外二百番の中、世阿彌の作は凡そ百番位と考へられて居る。世阿彌の父を結崎清次といひ、觀阿彌と稱した。此の觀阿彌、世阿彌の父子が足利義滿の保護のもとに能を大成したので、義滿と彼等父子とが能樂に寄與した功績は忘れられぬものである。同時に又藝術論としての『十六部集』も亦我が文化史上の一大名篇として忘るべからざるものである。

この「羽衣」に類似した傳說は我が國にも幾種かあり、世界各國にも數多く、また天人が羽衣を着る代りに白鳥となつて舞ひ下るといふ形式のが多いので、傳說學者はこれらを總括して白鳥處女式（swan maiden）の傳說と云つてゐる。我が國に言ひ傳へた二三を擧げると、近江國伊香郡與胡の鄕伊香の小江に、八人の天津少女が白い鳥となつて天下り、江流に浴してゐるのを、伊香刀美といふ男が見て、ひそかに手飼の白犬に一人の羽衣を盜ませた。これが爲めに一人は天上に歸ることが出來ず、到頭刀美の妻となつて男女二人の子を產んだ、といふのが一つである。『丹後風土記』には、丹波郡比沼山の頂上なる眞井といふ靈泉に、或日七人の天女が來て浴してゐると、和奈佐の翁、和奈佐の嫗といふ老夫婦が之れを見て、ひそかに一人の羽衣を取隱した。衣の主なる天女は止むなく老夫婦の子となつた。かくして彼等は同居十年の久しきに及ぶ中に、彼女の釀した酒が、立ちどころに萬病を癒やすといふので、老夫婦は追ひ〳〵富貴の身となつたが、いつしか其の恩義を忘れて虐待を始め、到頭彼女を追ひ出した。その時に天女が空を眺めつゝ立ちつくして詠んだのが「天の原ふりさけ見れば霞立ち家路まどひて行方知らずも」の歌である。彼女は遂に竹野郡船木鄕奈具村にさすらひ着いた。奈具の社の豐宇賀能女命が卽ち是れであると書いてある。或は南洋セレベス島の美人が駿河灣に漂着した。南洋の言葉で、地獄を「ノルカ」といひ、極樂を「ソルカ」といふ。この漂着した美人が三保から富士を仰ぐ絕景に驚いて、極樂に來たものと思ひ、こゝはソルカかと云つた。此のソルカが訛つてスルガとなつたのである。そしてこの異裝の美人が天女と視られて、此の傳說を生んだといふ說もある。西洋の傳說にもこれらに似たものがある。但し西洋のには地上の生活に終はらせたのが多く、それに比べると、この謠曲の傳說は實に淸淨無垢で、神韻縹緲の感じがする。

謠曲の文章には、和漢の詩歌文章の名文句を寄せ集めた樣な趣がある。そのために口さがなき批評家からは、つぎはぎ文章、雜巾文學などと惡口されるが、しかしながら、それは謠曲文の半

面（といふよりは寧ろ少ない側の一面）を見たもので、大體においては寧ろそれらの綜合振に一種の美を見出ださるべきものである。殊に謡曲本來の趣旨により、曲節に合はせて之れを誦すれば一層の妙趣を感じ得るであらう。また謡曲は言葉の種類について見ると、會話は一昔前の鎌倉期のもの、地（じ）は二昔前の平安朝のもので、その交互する間に優美と遒勁（しうけい）と、花やかさと澁さとの調和が出來てゐる。これが謡曲文の主なる特色で、朗吟して特殊の諧調を感ずる理由もこゝにある。殊に秀句や緣語や美しい引用句などが非常な效果を擧げてゐるが、併し缺點も亦そこに在るので、すら〳〵と淀みなく讀まれた文句が、之れを現代的に言ひ換へようとすると、すつかりつかへてしまふことが度々ある。思ふに之れを强ひて文法的、論理的に換言しようとするのが無理なことで、寧ろ修辭的說明を與へ、大意を把捉するに止めて、朗誦の間にその美しき點を感得すればよいのであらう。

釋義

【謡曲の術語】 謡曲の文章を讀むには、文句の初めに小さく肩書きしてある、あの符號めいた術語の意味を心得ておく必要がある。こゝに主として前に擧げた「隅田川」とこの「羽衣」とに見えるのを擧げるであらう。

シテ　能の單位―普通の文章ならば一篇と呼ぶところ―を「一番（いちばん）」と呼ぶことになつてゐるが、シテは一番の能の主人公で、「隅田川」では梅若丸の母の狂女、羽衣では天女がそれである。能には一段組織のものと、二段組織のものとがある。二段能は「中入」を境として筋の前後に分かれるものであるが、中入後に出て來るシテを「後（のち）ジテ」といひ、之れに對して前段のを「前ジテ」といふ。「隅田川」も「羽衣」も共に一段組織の能である。

ワキ　シテの相手役で、シテの脇（わき）に副ふ人物の意。「隅田川」の渡守、「羽衣」の白龍がそれである。

ツレ　連れ添うて主役を助くる役者の意。シテに添ふをシテツレといひ、ワキに添ふをワキツレといふ。

トモ　おもなる人物に伴うて末々のわざをつとめる端役。

子方　子供のする役目で、「隅田川」の梅若丸、「鞍馬天狗」の牛若丸の類。

名乘　名宣とも書く。登場人物が自分の名前素性を吹聽するのである。ノルは公然と宣言する意。例へばこれは「三保の松原に、白龍と申す漁夫にて候」「これは平宗盛なり」の類。

道行　旅する者の道すがら歌ふ心の文句で、シテの歌ふのも、ワキの歌ふのも、ツレの歌ふの

もある。而して其の殆んど凡てが、出立の抑もから「着きにけり」の到着までの經過を報告したものである。道行文の形式は、第一句は五七五、第二句以下は七五の數句から成り、而して第一句の末と末句とを繰返すのが普通である「羽衣」には道行がない。

次第　シダイ。多く人物が自分の境遇感懷を、登場の最初に述べるものになつてゐる。從つて事の次第を前置に謠ふので、introduction（導入の意味だなどといふ説もあるが、まことは印度の聲明の「次第音」から來たので、音頭取が初句を唱へると、一座の人衆がつゞいてそれを繰返すところから云つたのであるといふ。役者が初句を繰返し、全部を地が引き取つて繰返す（地取）のは、それから來た餘風である。

サシ　謠ふといふよりは、寧ろ詞に少し節をつけ、綾を加へて朗讀すると云つた風の謠ひ方をするもので、拍子にかゝらず樂器の添はぬのが普通である。平家にサシゴエ（指聲）といふのがある。聲明で音譜を記入することを「章をサス」といふ。それから轉じたので、常の詞でなく平家の味を加へる爲めに譜を差し添へたといふのであるが、謠曲のサシは恐らく此のサシ聲の略されたのであらう。卽ちサシは「一寸加へる」の意で、謠曲の風味をホンの少し差添へるといふ意味であらうと思ふ。「カヽル」或は「セル」と記してあるのも、ほゞサシと同じやうに謠ふところである。

一聲　多くシテやワキの開吟にある、長く伸べて謠ふもので、一イッセイと讀む。壯快な一聲で舞臺の靜かさを破るの意、卽ち一聲寂寞を破るの意である。

下歌、上歌　サゲウタ、アゲウタ。鼓、笛、太鼓の拍子に合はせて歌ふので、多くサシやカヽルを承けて低い調子で歌ふのを下歌といひ、つゞいて高い調子で歌ふのを上歌といふ。此の下歌、上歌で、謠曲の一段落がつくことになつてゐる。

地　ヂ、地謠といふ。舞臺に立つて藝はせず、唯だ數人同坐して一緒に謠のみを謳ふコーラスで、謠本には、略してただ「地」と記してある。また之れを「同吟」とも「同音」ともいふところから、「同」の一字を記入してあることもある。

クリ　元來節の名稱で、刳るやうに、ゑぐるやうな調子に謠ふ所から云つたのであらうが、此の節の必ず用ゐられる著るしい部分があつて、それをクリ或は「クリ地」といふ。

クセ　曲舞から來た名稱だといふ。風變はりな一癖ある謠ひ方で、一番中での特に肝要な長い部分である。

ロンギ　佛敎の論議から出た名稱で、問答式、掛合式になつてゐる謠である。

待謠　中入の後、開場のきつかけにワキの歌ふ上歌。シテの出場を待ち受ける謠の義である。

クドキ　かき口説くやうに愁歎の次第を述べるもの。大體サシに似た謠で、鼓、笛の伴はぬのが普通である。

キリ　曲の切、卽ち最後の末尾に謠ふ特別の謠ひ方。

强吟、弱吟　ツヨギン、ヨワギン。普通ツヨク、ヨワクと書いてある。これは實際に謠ふのを聞かねば解らず、聞いても餘ほど馴れねば解らぬが、强吟は剛く、威勢よく、直線的に謠ふもの、弱吟はその反對に柔らかく、しなやかに、曲折ゆたかに謠ふもの、前者はおもに剛强、莊嚴、古雅なる儀式ばつた心持を現はすに用ゐられ、後者はおもに柔軟、優雅なる、近代式のくだけた味を現はすに用ゐられる。

詞　最後にコトバ、これは謠はず、間拍子に合はせず、ふだんしやべるやうに語る文句のことしてあるが、しかしながら、それは比較的の沙汰で、詞にも間も拍子も音階もあるのである。巳に聲明家は人の談話の聲は宮商角徵羽、謂はゆる五音のいづれにあたるかを說いてゐる。又謠曲の詞には一定の速度、間があるのみならず、一種の緩急メリハリがあつて、その上、中間に、ワケと云つて、波濤のやうなウネリを見せる所もある位である。

【風早の……】萬葉集卷七詠人不知、風早之三穗乃浦廻乎榜舟乃船人動浪立良下。の第五句「浪立つらしも」を除つて、第四句の「船人」を「浦人」とし、第五句を「浪路かな」と改めたのである。「風早」は紀伊國日高郡三尾浦邊の總名。卽ちこの歌の「三穗の浦」は紀州ののであつたが、それを同名なる駿河の三保の浦に轉用したので、まづ、海邊の景色を述べ、同時に自分が漁夫なることを暗示したのである。

【これは三保の松原に】この下に住めるといふが如き語を補つて見るべきであらう。「これは」は能及び狂言に常用される第一人稱の人代名詞で、歌舞伎や普通劇になき所の自己說明である。謠曲に於ける人物の言葉は、專ら鎌倉期以來の候體を用ゐることになつてゐる。

【立衆】タチシウ。觀世流本では「ワキヅレ謠」となつてゐる。立衆でも、シテヅレでも、ワキヅレでも、皆多人數連れだつて出る端役のことである。

【萬里の好山に云々】宋の魏慶之が、おもに南宋人の詩話を收めた『詩人玉屑』第四卷にある「千里好山雲乍斂、一樓明月雨初晴」とあるのを少し變へて引いたもの。晴れやかな景色を言はんが爲めの序である。

【晴れり】文法上からは誤りで、合法的には「晴れたり」或は「晴れぬ」などいふべきであるが、

【傳來を重んずる能のこととて、數百年來の讀癖を動かしやうもない。謠曲には「名をもくだし」（くたしと澄むべきもの）「手折り」、「山は動ざる姿」など、かういふ類が多くある。しかし斯ういふ讀癖は一種の時代風として許さるべきものでもあるので、必ずしも不法として咎め立てするにも及ばぬであらう。「晴れたり」を「晴れり」といふ形式は『倭漢朗詠集』その他に澤山あつて、平安朝の眞盛り時代に於いて、已に許された語法であつた。

【時しもや】「し」は休め詞、「も」、「や」は詠嘆。それ、まあ、よ、といふやうな意で、時なるかなといふこと。

【春のけしき松原の云々】「松」と「待」と、「浪」と」並」と懸詞。又「立ち續く」は「浪」と「朝霞」と「松原」とにかけてある。此の邊の前後を關聯させて見ると、前には、「浦人さわぐ浪路かな」と荒海の模樣を述べ、こゝでは「げにのどかなる時しもや」と平和な景色をたゝへるが如き、又すぐ前には「一樓の明月」とあつて、次ぎには「朝霞月も殘りの」とあるが如き、前後矛盾してゐる文句が可なりあるが、しかしそれらの矛盾した美しい詩の句の中に沒入して了ふのが、一面謠曲文の特色でもあるのである。

【及びなき身云々】漁師風情の、風月を玩ぶ雲上人などには及びもつかぬといふこと。案ずるに此の「及びなき」は自然美の觀賞に手が屆かぬといふ事と、風月玩賞專門の雲上人に並び得ぬといふ事との二義を兼ねたのであらう。「心空なる」は、何もかも忘れて、心が恍惚となる樣なといふ意。

【忘れめや云々】續古今集、中務卿親王の歌、「忘れずよ清見が關の浪間よりかすみて見えし三保の松原」を蹈まへたのである。「忘れめや」は忘れむやの意。

【清見潟遙かに三保の松原に】來と清見と秀句。遙かに見と三保と秀句。清見潟は駿河國有渡の海に臨んで、昔關所の置かれた處、こゝに清見寺といふ名高い寺が有り、そして海を隔てゝ三保は右に見渡され、富士は左に仰がれる。三保の松原は安倍郡に屬し、清水港を距る十餘町、長さ四十町、幅十町乃至二十町の白砂青松が海に斗出して、さながら浮島と見える。今も羽衣の松といふのが有り、由緒を書いた碑なども立つてゐる。

【立ちつれいざや通はん】うちつれてさあ、三保の松原に出かけよう。

【風向ふ雲のうき浪云々】定家の子爲家が瀟湘八景の中、遠浦歸帆の歌を引いて、下の句「釣せぬ先に歸る舟人」とあるを作りかへたのである。本歌の意味は紛らはしくてはつきりしない。風が向ひ吹きに吹いて來る、雲が浮かび出でる、それにつれて氣懸りな心憂き浪が立ち始めて

來たので、折角志して來た釣を見合はせて舟人どもが歸る、といふことか。風の吹き向ふまに
まに雲が浮かぶ、此の空模樣ではやがて面白くもない浪が立つぞとて歸る、といふことが。い
づれ此の中の一つであらうが、「風の向ふ雲」とつゞけるのも意味が取り强く、「風は向つて吹
いて來る、雲は浮かぶ」と並べるのもいさゝか穩かならず、取捨に迷ふが、まあ〳〵第二の意
で、風の吹き向ふまゝに雲が浮かぶといふのであらうか。「うき」は前後の雲と浪と、兩方に懸
かるので、「雲の浮く、憂き浪の立つ」と二義を成し、そして初めは浮かぶ意、後は憂き意に取
られるのであらう。

【待てしばし】　前の釣らずに歸る人に呼びかけた心で、まあお待ちなされ、風は吹いても春の風
で、しかも朝の風が松原を吹きそよぐのだ、吹きは吹いてもそれは目出たい常磐の聲で、音を
たてるやうな大浪は立てませんよ、といふこと。

【春ならば】　今は春だ、春ならば風も長閑に吹かうの意。

【聲ぞかし】　聲なるぞかし。「ぞ」「かし」共に、たしかめ、强めのテニヲハ。

【風早の……小舟かな】　こゝで一寸立ち止まつて、好んで古文の名句を點綴する謠曲文の特色に
ついて一言したい。私は前に謠曲文の此の綴れの錦式なる文致を褒めた。しかしそれは必ずし
も絶對的に褒めたのではない。謠曲の此の文致は、恐らく謠曲の作者が古文に對する絶對の崇
拜心と、それを我が文章に借り用ゐずには居られぬ利用の心と、崇拜はすれども理解し盡くさ
ず、借用はすれども支配し得ぬ學力文章力の不足と、此の三つの因緣の和合によつて出來あが
つたのであらう。これは斯界最高級の作者たる世阿彌についても言ひ得る事で、要するに彼等
は眼高手低の作家であつた。志は高く、目の配りはよかつたが、古典の原材を使ひこなして、
自在に我が用をたさせることが出來なかつた。適材を適所に置くことが出來なかつた。たまに
はお誂ひに出來てゐる原材を、あらずもがなに矯め直すことすらもあつた。思ふに彼等が古文
按排の呼吸は、大體の見當を定めて、それに嵌まりさうな材料を手あたり次第に搜して、好い
加減に點綴するにあつたのであらう。しばらく此の「羽衣」の最初の部分について見ると、作
者の意圖した大まかな輪廓は、春の一朝、風雨の後を受けて、空には靜かに有明の月が懸かり、
海には美しく釣船が群れてゐる。この三保の浦の松原で漁夫が天女の羽衣を見出だした、とい
ふ光景を描かうとしたのであらう。そしてそれに緣ある古名句を八方にあさり、『萬葉』から
は「風早」の歌を、『詩人玉屑』からは「萬里の好山」の一聯をと、次ぎ〳〵に見出だして、料
理不足のまゝにあちこちに點綴したのであらう。その結果「浦人さわぐ浪路」と「長閑なる時

しもや」と、「憂き浪立つと見て」と「浪は音なき朝なぎに」との如き意義の相反した句が交互して、心ある讀者をして、矛盾相殺する句の來往に驚かしめたのであらう。又辛うじて句の美しさと曲譜の面白さとに醉うて、句の取合はせの拙と醜とを忘れしめたのであらう。『詩人玉屑』の原句には「千里好山雲乍斂、一樓明月雨初晴」とある。これは雨後の明月を歌つたので、それには雲たちまち斂りでこそ嵌まれ、「雲乍ち起り」では「明月雨初晴」を打壊すのみならず、此の謠曲の初めの部分全體をも殺風景にするわけであらう。私は謠曲を愛する餘り、謠曲のために、又謠曲の作者の爲めに、之れを惜しむのであるが、しかし彼等の素養と時代とを考へると、これも餘儀のないことで、またかういふ惜しい所はありながら、差引勘定して、全體としては、とにかくすばらしい新藝術を建立してくれたのだから、難有く感謝すべきであると考へるのである。

で、大意を取つて、現代語譯を試みると、これは三保の松原に住む白龍と申す漁師でござる。古人の句に「遠くの山々には雲が不意に起こつて煙霞の趣を加へ、近くの高樓をば雨後の明月が皎々と照らしてゐる」と御座るが、わが眼前の景色もまさしくその通り、長閑な春を待ちつけて、朝霞した松原つゞきの彼方には、のたり〳〵する浪のうねりを見、空には殘んの明月のさやかなる影を仰ぐ。漁師風情の勿體なき僭上ながら、ハテ心もうつとりとすることで御座る。忘れかねるはあの三保の松、いざ諸共に山路を分けて清見潟、それからあの松原と、眺め〳〵連れ立つて行かうでは御座らぬか。海を見れば、釣人達が鉤もおろさで歸る樣子。いかさま、風が吹く、雲が浮かぶ、これでは心配な浪も立たうと、急いで歸るものと見えるが、ハテ短氣な、先づお待ちなされ、時は春、春ならば風が吹いてものどけかろ、殊には朝風の松に吹かば常磐千歳のめでたき音をも奏でるであらう。浪は立つても、のたり〳〵と音もすまい。此の朝なぎに、何の歸り支度ぞや。……オヽ解つたと見えて、皆々歸ることを見合はせたさうな。もう櫂から手を放した。オヽもう絲を垂れてゐる。扨も揃うたり〳〵、夥しい釣船ではある。

と、これでは折角の謠曲が、狂言の調子になつたやうだが、意味の移り進みは、まづこんな事であらうと思ふ。

虚空に花降り音樂聞え、靈香四方に薫ず】佛菩薩の出現する前に起こるとされる現象で、これはやがて天人の出現すべき前觸である。何事の起こり來べきかと、驚異的期待を持たせる花やかな諧調である。「靈香」はレイキヤウと讀む。

【これ只事と思はところに】「これは不思議だ只事ではないぞと思つてゐると、果たして…」といふ意味であるが、私はこれは「只事ならずと思ふところに」と云ふべきで、「只事と思はぬところに」では、妥當でないと思ふ。「これは只事でないと思つてゐると、果たして」と云へばよく續くが、「只事とは思つてゐないと…」云つて落ちつかないことは、現代語に譯して見ても明らかなることである。もう何百年と謠ひ馴れて來て、口についてゐるから、今更仕樣はないが、私はこゝを謠ふ毎に、此の名曲の品位の爲めに惜しい氣がするのである。

【何しに召され候ぞ】「召す」は着る、食べる、乘る等の意に廣く使ふ敬語であるが、こゝは白龍が身に纏うたではなく、持ち歸る位の義であらう。「何しに」は何とて、何で。「此方のにて候」「召され候ぞ」など、つまらない平凡な語のやうだが、實は掛替のない嵌まり詞で、その證據には「我が物にて候」「われらのにて候」「取られ候ぞ」、「持ち行かるゝぞ」等の同義語を置きかへて御覽なさい。此の語以上の妥當語のないことがわかるであらう。

【これは拾ひ…歸り候よ】いかにも當然だといふ氣持が、この冷然とした言ひ方にあらはれてゐる。落ちてゐる物は拾つて我が物にしてもよいやうでもある。しかし一寸おいた物を拾つて奪られ〳〵しては困るであらう。この當然のやうでもあり、無理のやうでもあることを、あどけなく言ふ所が面白い。

【人間】今は人といふ義に專用されてゐるが、本來は「世間」「人の世」といふ意味に用ゐられた。こゝもその第一義に用ゐられたかと思はれるが、しかしこゝは人の意に取つても差支はあるまい。

【そもこの衣の御主とはさては…】前には冷然と言ひ放つたが、天人と聞いて、急に襟を正す氣分になつたのが、この言葉に、よく表はれてゐる。本來ならば、天人の姿を見、「なう、その衣」と言ひ出した神々しい聲を聞いて、最初から敬意を拂ふべき筈であらうが、一つは凡眼の悲しさ、一つは利慾に執着して冷淡にあしらつた、といふ心持で書いたものらしい。「そも」「さては」の二語は、簡單な言葉ながら、相呼應して白龍が驚異の念を面白く表はしてゐる。「御主」「ます」の、急に改まつた敬語も同然。

【末世】マッセ。佛教に正、像、末の三期が說かれて居る。佛法の最も榮える期間を正法の世、衰へたが、それでも命脈を保つてゐる期間を像法の世、全く衰亡亂離した時を、末法の世といふので、末法の世を約めて末世とは言ふのである。末法澆季の世ともいふ。こゝでは白龍自身の時代を「末世」と言つたのである。

【奇特】　キドク。不思議な事、稀有な事、かやうな末世には到底有るまじき瑞相。

【國の寶となすべきなり】　前に「家の寶」と言つたのを「國の寶」と言ひかへたのは慾望の高まつたのであるといふ解釋もあるが、これは寧ろその樣な稀有のものと知つて、私有慾を離れ、國家公有の寶器としようとしたので、漁夫の私心が公的な國民心への飛躍と解釋すべきであらう。この外に白龍の心的變化が次ぎ〳〵に皆微笑ましく描かれてゐるが、後にも出るやうに、この謠の中には愛國意識の高調と見るべき言葉がぽつ〳〵ある。「國の寶となすべきなり。衣を返す事あるまじ」ときつぱりした語調に變はつた所にも、昂然とした公的意氣がよく現はれてゐるやうに見える。

【さりとては】　この下に「つれなし、さうはずに」の如き語を補うて見るべき省略で、少し無理なやうではあるが、大體の推量は出來る。口譯では、「さう仰有らずに」位でよいであらう。

【聞くよりも】　「も」は詠嘆。本來此の「も」は鎌倉時代あたりから用ゐ始められた一種の俗調（「辨慶此の由聞くよりも」といふ調子）であるが、後世はさらに使はれるやうになり、必ずしも下品といふでもなくなつたものである。

【力を得】　元氣づく、威勢がよくなる。

【心なき天の羽衣取隱し】　「心なき」の「心」にはいろ〳〵の意味が有る。道德的な善心の義もあれば、藝術的な趣味心をいふ事もある。また無考な、不用意な、不親切な、野暮な等々で、その場〳〵に適譯するを要するが、こゝは趣味的、人情的、それに皮肉の味を兼ねたやうな心で、もとより自分は風流の嗜みもなき海人ではあり、少し無情だとは思つたが、どうせ物知らずの漁師だ、隱して了へといふので、といふやうな意味であらう。「天」と海人とは秀句で、說きほごせば、「心なき海人なれば天の羽衣を取りかくし」といふ意味になるのである。謠曲には人物の會話を地が言つたり、地の文をシテやワキが述べたり、のみならずシテの言ふべき事をワキが言つたり、ワキの言ふべき事をシテが言つたりして、一寸不自然不合理とも見える交錯した文致がある。これは殆んどあらゆる謠曲に見るところで、本篇中にも所々に見えて居るが、こゝもその一つである。

【カヽルに於ける文句の取替式】　私は今謠曲には、シテの言ふべき事をワキが言ひ、ワキが謠ふべき事をシテが謠ひ、或は地に謠ふべき所をシテやワキが謠ひ、シテやワキの謠ふべき所を地で謠ふといふ形式、取りすべていふと、役者各〻の領分を互に取替へて謠ふことが屢〻ある、と云つた。これは謠曲の中でも主として、此の「カヽル」といふ節附の部分に見る現象である

が、此の狂つた領分替の謠ひ方は、何の爲めに起こつたのであらう。また如何なる心理により如何なる興味のために試みられ、頻用され、完成されたのであらう。私は之れに關して未だ曾て合理的の説明を聞いたことがない。「謠曲には斯ういふ狂つた超越的の謠ひ方があるのだ」とか、「能の世界は現實的といふよりは寧ろ夢幻的のものであるから、寫實を超越し飛躍した、かやうな謠ひ方をするのだ、而してそれが一種の特別なる興味なのだ」といふ類ひの、不思議な事實を其の儘に受け入れるか、或は神祕視して觸らずに祭り込むかの以外以上に、一歩でも、踏み込んだ説明を聞いたことが無い。私はこれを甚だ遺憾な事に思つてゐる。

ひそかに思ふに、かくの如く自他の領分を取替へた物言ひをするのは、國文學史上謠曲に於いて始めて現はれた現象である。言はゞ鎌倉末期若しくは室町初頭に「能」といふ劇形式の文學の現はれたのを緣として、始めて現はれた修辭現象である。のみならず、寡聞な私の知る所では、世界諸國の文學に殆んど類例の無い現象である。若しさうだとすれば、それは決して輕視し、若しくは神祕視してうち捨てゝおくべきものではあるまい。それが表現形式として、善い習慣であるにせよ、惡い習慣であるにせよ、また謠曲に於けるこの形式の使用振が上手であるにせよ、下手であるにせよ、とにかく心理の鏡に照らし、道理のメスを揮つて、一應の合理的説明を試みるべきものであらうと思ふ。

こんな考から、一寸立ち止まつて勝手な臆説を試みようと思ふのであるが、前に云つた通り、此の格はづれの狂つた修辭現象は、先づ主として、「カヽル」といふ謠ひ方の部分に試みられたものである。「カヽル」の意義については、或は節に掛かるの義で、今まで只だの詞であつた會話が、簡單ながら、とにかく上、中、下、下の二などいふ正しい音階のフシに謠ひ出す所につけた名稱だといふ説もある。或は「カヽル」はかゝつて謠ふといふ意味で、突ッカヽル氣持で威勢よく謠ひ出す所から言ふのだといふ説もある。成程「カヽル」は節のない詞から一種のフシに成り始める所である。また謠曲家の間では靜かに抑へずに、急ぎ氣味、推し氣味に謠ふ事を「かゝつて謠へ」といふのが、一つの通り詞になつてゐる。これらを合はせ考へると、兩説いづれにも多少の理由のあることであらうが、こゝに一つの愚考は、「カヽル」は係り合ふの意で、シテ、ワキ、甲、乙の詞が彼れ一語、是れ一句と掛合になつて、せはしく詞を掛け合はせ遣り取りする意味ではなからうか。「カヽル」に限つて文句が短く、而も比較的長い句立から、段々短く短くと迫り詰めて、遂に一句、半言となつて、到頭地に渡すといふ趣のあるのが、此の消息を物語つてゐるのではなからうか。（ロンギにもこの氣味はあるが）また此の「カヽル」

の謠ひ方が、一方の文句の切れぬ中に一方のを續けるやうに、前者の謠ふ最後の一音と後者の謠ふ最初の一音とが折重なるやうに、卽ち相手の詞の切れるのを待ちかねて謠ひ重ねるやうに定められてゐるのも、此の消息を暗示してゐるのではなからうか。また此の「カヽル」の事を「セル」とも云つたらしく、それが少ないながら「カヽル」と交互に用ゐられてゐるが、「セル」に、迫る、競る、摩る、突ッ込む等の意味がある所から押すと、やはり此の部分が、迫り合ひ競ひ合つて詞を掛合はせる所から、斯うは言つたのであらう。さて意義語源の詮索は此の位にして、此の「カヽル」の掛合に幾つの場合があるかといふと、大凡そ左の四つ位かと思はれる。

第一はシテ、ワキ等が互に自分の領分を謠ふ普通の場合で、例へば左の類である。

シテ「悲しやな羽衣なくては飛行の途も絶え（羽衣）

シテ「いや疑ひは人間にあり、天に僞りなきものを。（同）

ワキ「げに〳〵誤り申したり、名所には住めども心なくて、都鳥とは答へ申さで、（隅田川）

第二はシテ、ワキ、互の領分を奪ひ合ひ、取替へて謠ふもので、例へば

ワキ「とやあらんかくあらんと悲しめど、

シテ「白龍衣を返さねば（羽衣）

シテ「沖の鷗と夕波の（隅田川）

三は連絡した一事を分けて二人で交互に謠ふもの、例へば

シテ「少女は衣を着しつゝ、霓裳羽衣の曲をなし、

ワキ「天の羽衣風に和し、

シテ「雨に濕ふ花の袖、

ワキ「一曲を奏で、

シテ「舞ふとかや。（羽衣）

これは本質的には地の文となるべき所で、それを變化を添へる爲め、シテ、ワキが代はつて、而も二者互に競ひ合ひつゝ詞を交互したのであらう。

第四は共通の事を、一緒に謠ふもので、此の例は羽衣には見えないが、「隅田川」の中にある

シテ「月の夜念佛もろ共に、ワキ「心は西へと一筋に、シテ「南無や西方極樂世界……

の類である。

さて以上を前置として、「カヽル」に於けるシテ、ワキ等が各自所領の文句を取替へて謠ふ心理の根據は何處にあるか、劇藝術として、文章としてのそれの興味は、何處にあるかといふに、

第一には、詞の掛合、取合、競合の興味を現ずるためで、先づ「カヽル」全體の構成からいふと、初めに比較的長い文句を使はせ、それをば次第に短くし短くした、短切迫促の揚句を地が引き取つて、こゝに句立調子の、前とはすつかり變はつた暢びりした世界を現じたのであらう。而して其の間に兩者（多くはシテとワキと）の先を爭ふ競合の興味を高めるために、中途から互に他の詞を取り替へさせたので、これが持前の文句を取替へる形式の主要第一の原因であつたであらうと思はれる。別行式に書き改めた左の句並びがこれを證據立てるやうに見える。

ワキ「この御詞を聞くよりも、いよ〳〵白龍力を得、もとより此の身は心なき、天の羽衣取り隱し、かなふまじとて立ちのけば、（十句、六十三音）

シテ「今はさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、（四句、二十四音）

ワキ（實はシテ或は地）「あがらんとすれど衣なし。（二句、十三音）

シテ「地にまた住めば下界なり。（二句、十二音）

ワキ（實はシテ或は地）「とやあらんかくやあらんと悲しめど（二句、十七音）

シテ（實はワキ或は地）「白龍衣を返さねば（二句、十三音）

ワキ（實はシテ）「力及ばず（一句、七音）

シテ「せん方も（一句、五音）

地「涙の露の玉かづら、……

右は七五を二句と見たのであるが、若し七五の一鎖を一句と見れば、五句から二句となり、一句となり、一句の揉み合ひが四度つゞいて、やがて七音の半句となり、最後に五音の半句となつて居るので、これがカヽルの藝術的本質をよく現はし、同時に他の領分に立ち入つて、文句を取替へる藝術的兼心理的理由をよく説明して居るものであると愚考する。

この取替謠に於ける起原及び趣味の第二は、自他の役目の取替ッこに、見出だす興味であらう。第三は他の事を此方から言つてやる皮肉、或は思ひやりの味であらう。第四は我が心境身境を他人に言はれて、自分を客觀視する味であらう。第五は思ひ設けぬ者が他人事をいふ超越味の變化であらう。第六は甲が甲の事を言ひ、乙が乙の事を述べる普通尋常の對話の間に、甲が乙の領分を奪ひ、乙が甲の持前を引き取り、また人物同士の詞を第三者の地が述べ、作者としての地の記述を人物が語りなどする處に、不自然、背理、反常識の觀がありながら、同時にそこに敵味方入り交つて、縒れつもつれつする亂鬪を見るやうな趣があつて、一種の興味があり、また人と詞とあべこべに入り亂れながら、大體の意味は何の苦勞もなく取られて、といつ

も味だ、面白いと見てゐる中に、やがて地に引き取られて、今度は一糸紊れずに、着々と正路の記述を辿るといふ、云はゞ讀者を快く欺く味で、もつれの後の和解した姿、荒れた後の晴れ模樣、ごた〳〵の後のはつきりした叙述、此の對照の味を、際やかに感ぜしめる爲めの前譚の味であらう。

思ふに、此の羽衣の一節の語句を、文法的に正しくシテ、ワキ及び地に配すると、次きのやうになるべきものであらう。

この御詞を聞くよりも、いよ〳〵白龍力を得　（ワキ「もとより此の身は心なき、海人（なればとて）天の羽衣取りかくし、

ワキ「かなふまじ。

とて立ちのけば、今はさながら天人も羽なき鳥の如くにて、あがらんとすれば衣なし、地にまた住めば下界なり、

シテ「とやあらんかくやあらん

と、悲しめど、白龍衣を返さねば、力及ばず、せん方も。

即ち大部分はシテやワキの詞と云ふよりは、寧ろ地の文となるべきものであるが、謠曲の作者は、變化、錯落の趣致あらしめんが爲めに、大體事件の所屬に從つて、之れをシテとワキとに配し、更に競合ひ、奪合ひの味を添へんが爲めに、所々に事の實際とは反對の配屬を試みたのであらう。例へば

ワキ「此の詞を聞くよりも、いよ〳〵白龍力を得……かなふまじとて立ちのけば

シテ「今はさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、

の如きは、内容の性質に從つて、地の一部を、それ〳〵ワキとシテとに配したのである。之れについては特に說明する必要がない。また

ワキ「あがらんとすれば衣なし、

ワキ「とやあらんかくやあらんと悲しめど、

は、本來シテなる天人に屬すべき事なるを、わざと轉換してワキに述べさせたのである。而してワキから見れば、「ソレ御覽、着物がなくなつてあがれないぢやないか」といふ皮肉の味を見せ、或は「どうしようかと氣を揉んでるわい、可哀さうに」といふ思ひやりの意を暗示し、シテから見れば「自分の氣持を、ワキがそつくり言つてくれてるわ」といふ、他人の忖度した詞に自分を見出だすといふ、これも一種の變はつた皮肉の味を見せ、そしてまた觀衆一同には、

「おや、シテとワキと二人で、あべこべに相手の事を言つてるわ。をかしいぞ、しかし是れもおつだな！」といふ感じを懷かせたのであらう。シテの方から云つても同じ事で、シテ「白龍衣を返さねば、涙を袖に入るるぞ」とは、本來ワキの白龍に屬すべき事なるを、わざと轉換してシテに述べさせのたで、シテから見れば「お前が返してくれないものだから」といふ文字以外の餘意を見せ、ワキから見れば「これは、ひどく恨まれることになつたぞ」といふ、これも文章以外以上の或心持を暗示するといふ結果になるであらう。無論作者が一々かういふ事を意識して書いたか否かは疑問であるが、此の超法格的、超常識的なる狂つた修辭の生起した心理的、藝術的の因縁は決なく此の通りであつたであらうと思はれる。また讀者觀衆がこの樣な心持を意識して見たり聞いたりするか否かは更にむづかしい疑問ではあるが、しかしながら、彼等が怪しみながら面白いと思ひ、もしくは一種の神祕として無言の叩頭をして居るのは、心理、藝術の根本義に於けるかやうな含蓄によるのであらうと愚考する。

以上の說明は、甚だごた〳〵して長きに過ぎたが、謠曲に於ける此の、事と人とをアベコベに配屬せしめる取替式の修辭が、古今東西の言語藝術の上で非常に珍らしい現象であること、少なくとも國文學史上では、謠曲の「カヽル」に於いて、始めて試みられた修辭であること、これが後代の歌舞伎のワタリゼリフなどにも用ゐられたが、歌舞伎のは唯だセリフを割るのみで所屬の轉換がなく、此の點に於いて謠曲の「カヽル」は空前絕後の珍らしい試みであること、それが一見背理、反常識と見えながら、むしろ道理常識に超越した深い味を持つてゐること等の大體を說明し得たかと思ふ。とにかく二人の人物が別々に出て來て、てんでの境遇、感懷を述べる。相見て話を進める中に、やがて彼我共感の核心に觸れ、觸れると同時に情が昂まり意が迫つて、詞の應接が段々急になり、短くなる。かくして七音五音の短い句を競ひ爭ふ中に、他人の事を自分が言ひ、自分の事を他人に言はれ、撚れつもつれつして、窮した揚句を通ぜしめるのが作者の地の文で、あとは文法論理の格式に違ひつゝ、暢びやかに美しく、シテ、ワキの言ひ合ひ、揉み合つた大切な事柄の意義を明らかにしてくれる＝と、かういふ段取りの進みは、非常に面白いではなからうか。

【今はさながら天人も云々】「さながら」はそのまゝ、あたかも、丁度の意。「今は天人もさながら云々」と、普通ならば言ふべき處を、曲調の上からかうしたのである。

【とやあらん、かくやあらん】「とやせん、かくやせん」と同じ樣な意ではあるが、これは寧ろ

【結果について、どうなる事かと悲しんだが、】と云つたのであらう。また「とやせん、かくやせん」に比べて「とやあらん」の方が、非常に大様で上品であることに注意したい。

【力及ばず】どうすることも出來ず。自分の力がとてもそこまでは達かないといふ義。

【せん方も、＝涙の露の玉かづら】涙と無とが秀句、露の玉と玉かづらとがまた秀句になつてゐる。「玉かづら」は珠玉を緒に貫いた髪飾。いかにともしようが無く、泣く涙は露の玉の如く、髪飾の玉かづらも、と連なつて行くのである。また謠方からいふと、「せん方も」で、シテ、ワキの問答が窮した所を、地が引き取る味である。これを「地取」といふ。

【かざしの花もしを〳〵と】「かざし」は挿頭と書く、冠や髪に挿すもので、こゝでは花、それが萎れるやうにといふのである。「しを〳〵」は、かざしの花と、天人の有樣との兩方にかゝる。一筆双叙の文法である。こゝで、玉かづら、かざしと一種の頭韻を爲し、かざしの花もしをしをと、しの音の重なるのも、亦美しい諧調をなしてゐる。

【天人の五衰】天上界でも盛衰の理は免れず、天人の命の終はる最期には五衰の相を現ずるといふ。その一は頭上の華鬘が忽ちに萎むといふので、丁度この場合に當たる。その二は天衣に塵垢がつく。その三は腋の下から汗が出る。その四は身體がくさくなる。その五は本居卽ちその居る處を樂しまなくなるといふのである。「力及ばずせん方も」から「あさましや」まで、極めて短い文句ながら、實に美しく、流暢に、天人の悄然たる形貌を敍してゐる。「あさまし」は本來あきれるの意であるが、こゝはその上に、あはれさ、はかなさの心持が加はつてゐる。

【天の原ふりさけみれば霞立つ雲路まどひて行方知らずも】解題に記した通り、『丹後風土紀』に出て居る比沼山の頂に天降つた八天女の一人が、老夫婦の虐待に堪へず、天に歸らうとして歸ることを得ず、歎いて詠んだ歌を引いて來たので、本歌の「霞立ち家路」を「霞立つ雲路」と改めたのである。大空を遙かに見やると、地上をば一面に霞が立ちこめ、上の方は渺茫として、どう行つてよいのやらわからぬ悲しさよといふ義。

【すみ馴れし空にいつしか行く雲の羨ましきけしきかな】わが住み馴れた天上界、あの大空の故郷に、いつになつたら行けるかと思ふ、その天上にいつの間にか自由に行つてしまふ雲の樣子のさて羨ましいことかな、といふ意。「いつしか」の處は「いつしか行くべきと思ひ、とがれてゐる處へ、いつしか行きつく雲」と二度繰返すべきを一度に括つた括り書きの文法である。

【迦陵頻伽】カリヨウビンともいふ。好音鳥又は妙音鳥とも譯する。極樂に於ける美音の不死鳥で、その姿は美女の顏をした人面鳥身のものである。

【はづかなる…】hazuka と謠ふ。天上界で始終聞き馴れてゐた、カリョウビンの聲も遠く隔たつて、今はさらに聞こえないといふ否定の意味で、初めを書き出して、そして其の「はづか」を、今度は肯定の意味で雁の方に取りなし、その音の辛うじて聞こえる遙か上空の雲路を雁が鳴き〳〵故郷に歸つて行く、その音をきくと、あゝ〳〵雲路天上の故郷のなつかしいことであるといふ意。カリガネに二義がある、本義は雁が音卽ち雁の聲、轉義は雁そのもの。とゝは紛はしいが、主として本義。

【行くか歸るか】「鷗の」の「の」は口語の「が」の意。千鳥や鷗が沖の浪間を飛び翔る、あれは何處かへ行くのか、または歸るのか、それもあの翼があるならばと羨ましく、のみならず、春風が大空で吹いて居る、それまでが、我が故郷の天上に近く吹くのかと思ふと懷かしいことである、といふ意。『春風の空に吹くまで』は一寸わかりにくい詞遣だが、「空に吹くのまでが」の意で、つまり「空に吹く春風までが懷かしい」といふのである。

このあたりに天女愁嘆の舞があつて、この能前半の見所である。その愁嘆の振に感じ、流石の白龍もすツかり氣の毒になつて、衣を返すことになる。家の寶から、國の寶へと飛躍して、强硬に羽衣の返還を肯んじなかつた白龍の心境が、こゝで再びかはる。

【返し申さうずる】「返し申さんとする」の音便。

【暫く】この言葉は强く發せられる。そしてこゝで句を切つて讀む。白龍の心境の變化を聞いて天女は飛立つ思ひ、「あら嬉しや！」と早速手を出さんばかりにする。それと又對照的に白龍が「暫く」と、强く冷然と言ひ放つ。後出風流な註文の腹が有るからである。このあたりは寫實的に實に生き〳〵とよく描かれてゐる。

【舞樂】ブガク。舞の伴ふ音樂。

【天上に歸らん事を得たり】前の「天上に歸らん事もかなふまじ」に照應した詞であるが、異樣な詞遣である。正しくは「歸ることを得べし」といふべきで、このまゝに解釋すると、實際歸れるかどうか解らぬが、歸られるだらう權利だけは得た、といふやうなひねくれたことになる。いやな句法だと思ふが、致し方がない。

【この悅びにとてもさらば】「悅び」は「御禮」の意であらう。昔は御禮のことを悅びとも云つた。

「さらば、とても」は逆さまに云つたので、ではとてもの事に、卽ちどうせするなら、いつそ奮發して、といふ意である。

【人間の御遊のかたみの舞】人間は前に云つた通り世間の意。御遊は歌舞管絃の遊びのこと。詞

があやにからんで一寸解りにくいが、貴族達が歌舞の遊びなどをされる時に、これは天人が記念に教へてくれた舞だと云つて、思出になるやうな舞を教へてあげようといふ意である。

【世のうき人】「憂き人」は普通づれなき人といふ意味に使ふが、こゝは憂を持ち不幸に泣く人といふ意で、憂へ悲みといふものの更に無い天上極樂の世界とは違つて、下界の世間には憂、悲みといふものがある、その憂き世の人達の憂さを晴らし、悲みを紛らす料に教へて上げようといふこと。

【さりとては先づ返し給へ】前の「さりとては返したび給へ」と比較すると、前には「たび給へ」と敬語を重ねて嘆願したが、今度は、舞ふにつけては、先づ入用な衣を御返しなされといふわけで、天女の心持も前とは變つて、大分輕くなり、半ば命令の調子を帶びて來てゐる。

【天にやあがり給ふべき】テンにあがり給ふべきか。

【いや疑ひは人間にあり、天に僞りなきものを】「人間」は例の世間の意で、「人」の意ではない。天上、人間と相對し、或は桃花流水香然去、別有ニ天地非ニ人間一といふ、あの人間である。『丹後風土記』に「天女答へて曰はく、妾獨り人間に留る。何ぞ敢て從はざらんや。請ふ衣裳を許せ。老夫曰く、天女娘何ぞ欺心を存する。天女云ふ、凡そ天人の志、信を以て本と爲す。仍ほ疑心多く、衣裳を許さずとは。老夫答へて曰く、疑多く信無きは率土の常、故に此の心を以て許さゞるのみと云々」から出た言葉と云はれてゐる。從つて天上界には信有つて疑ひなしといふ意のやうに解されてゐるが、「羽衣」の思想は更に一歩を進めて、天上界は信僞の差別を超越してゐるといふのであらう。いふ迄もなく僞は信の對稱で、信ある所には僞が有り、僞のある所には信も有る。しかしながら僞なき所には信も無い筈で、天上界は此の僞も信もない世界、即ち信僞を超越した絶對善のみのある所、信か僞かと疑ふべき何物もない所と、かういふのであらう。

【あら恥づかしやさらばとて……舞ふとかや】前に云つた「カヽル」である。こゝでもシテ、ワキ兩方で言ひ合ひ競り合つて、文句が段々短くなり、遂に地にわたす呼吸を味はひたい。

【霓裳羽衣の曲】唐の玄宗皇帝が一夜天上月宮殿に遊んで天樂を聞く夢を見、これに象どつて作つた曲であるといふ。白樂天の「長恨歌」の、安祿山が叛亂して攻め上ぼつて來た處に、「漁陽鼙鼓動レ地來、驚破霓裳羽衣曲」といふ句が有る。帝が楊貴妃とこの曲に聽き惚れてゐる最中に敵軍が攻めよせて來たといふので、天女がその曲を舞つたといふのである。

【東遊の駿河舞】アヅマアソビのスルガマヒ。神樂に似て神事に用ゐる舞曲に「東遊」といふの

が有り、五首中の一つに駿河歌があつて一番長く、今、春秋の皇靈祭、神武天皇祭などに、宮中賢所の庭上で奏せられ、その他加茂、男山、氷川、八坂、北野神社等でも奏せられる。東國地方の風俗歌に合はせた舞である。駿河歌は六段から成つてゐるが、その第一段及び第二段を抄錄すれば、第一段は「ヤ、うど濱に、駿河なる、うど濱に、打ちよする波は、七くさのいも、ととぞよし、ととそよし」、第二段は「なゝくさの妹は、ととそよし、あべる時、いささねなむや、なゝくさの妹、ととそよし」で、まづかういふ風の、打ちかへして歌ひ舞ふ、催馬樂式の古風なものである。

【この時や始めなるらん】　これは謠曲家の作意で無論史實ではない。この駿河舞の始めは、二十七代安閑天皇の御宇に、駿河國有渡の濱に天人が天降つて歌舞したのを、一人の翁が砂を掘つてその中にかくれて居て、見て傳へたと言ひ傳へられる。とにかく歌曲から見れば平安朝初期のものであらう。

【それ、ひさかたの天といつぱ】「天」はアメ。「それ」は下の語を強く引き出す爲めの前置きの接續詞。「ひさかたの」は枕詞。語原について、日さす方、日離る方、日榮足る、ひさご形、久しく堅き、などいろ〳〵ある。天、雨、月、光、等の天象にかゝる。「いつぱ」は「いへば」の轉で、誇張的に、もしくは勿體振つて強く言ふ味の言ひ方。歌舞伎の「勸進帳」にも、辨慶が「それ、山伏と言つぱ役の優婆塞が行儀を受け」と揚言する。

【二神】　大八洲を生み、造りかためられた、伊弉諾、伊弉冊、二神のこと。

【出世のいにしへ】　この世に出現まし〳〵た昔。「いにしへ」は往にし方。「出世」にはこの義の外に、立身出世のそれと、世俗の緣から出離する意味との二義が有る。

【十方世界】　四方は東西南北、六方又は六合は四方上下、八方は四方の外に東北、東南、西北、西南、十方は八方と上下。卽ち全世界、無限の空間といふ意。

【然るに月宮殿の有樣】「然るに」は「ところが」といふやうな意味の接續詞だが、こゝはホンの序出のあしらひに使つたので、「先づ」「さて」といふ程の意であらう。「月宮殿」は月の都の宮殿。廣寒宮、月天宮などとも言ふ。

【玉斧の修理とこしなへにして】　ギョクフのシュリ。「玉斧」は神斧、鬼斧など言ふに同じく、神靈界の建築なるが故の美稱。「修理」はいはゆる繕ひの修理ではなく、修造の義。卽ち名工が神斧を揮うての築造ゆゑ、永久に壞るゝことなしといふ意。

【白衣黑衣の天人の數を三五に分つて】　白衣の天人、黑衣の天人を各〻十五人宛にわけて。

【一月夜々の天をとめ奉仕を定め云々】　複雑な事柄を簡單化するので、作者も困つたであらうが、讀者もこれでは何の事か解らぬであらうと思はれる。仔細は、月の盈虧明暗を、奉仕する白衣黑衣の天女の數の增減によつて說明した神話を縮約したので、細かくいふと、月の一日には白衣の天つ少女一人が奉仕し、二日には二人、三日には更に三人が奉仕する。かくして明るい白衣の天女の數が多くなるに從ひ、段々光を增して、十五夜には白衣の天女が滿員の十五人となり、同時に滿月の光となるが、それからは反對に暗くなるので、十六日には白衣の天女が一人去つて、黑衣の一人が之れに代はり、かくして三十日には、白衣が全く影をかくし、黑衣の者ばかりが十五人滿員となるので、月色が暗黑となるといふ。それを縮約したのである。筋を素直にあらはすと、黑白三十人の天つ少女が、一月の間奉仕する數を定めて、その通り名々の役をつとめる、といふのである。因に十五日迄を白月といひ、十六日以後を黑月といふ。

【我れも數ある天少女】　我れもその三十人といふ數多の天女の一人だといふ義。

【月の桂の身をわけて】　月の中に在るといふ桂の實と天女の身との秀句。その月界の身を一時此の下界にわけてといふ意。「分けて」といへば分身の義で、此の天女が二體となつて天上にも地上にも居る事となるべきだが、こゝは唯だ天に居るべき者が假りに天を別かれて地に下つたといふつもりであらう。

【かりに東の駿河舞、世に傳へたる、曲とかや】　例の謠曲流に、後先に引ッかけ合ひ、略し合つた文句振で、實に解りにくゝ、また說明しにくいが、合法的に素直に書くと、「天上に住む身が假りに此の東國の駿河に天降つて、駿河舞を傳へるのだと云つて、舞つて見せたが、今日世に行はれてゐる駿河舞といふのは、卽ち此の時に天人から傳はつた曲だといふことである」といふのである。「東の駿河舞」は例の前後に掛け、一句にして二役を勤めさせた括り書きで、前につゞいては「東國の駿河國」といふ意になり、後に連ねては「駿河舞として世に傳へた」といふ意味になるのである。また「東」は東國のといふ事を意味すると同時に「東遊」の意をも兼ねたのであらう。

【クセ】　前に術語の處で說明した通り、曲舞から來た文句で、能としても、謠としても、一曲の中の最も主要なる部分とされてゐる。これから以下の文句は、天女の舞ふ趣と、心持と、周圍の景色とを、古歌や古文やの名句を取りまぜつゝ、大自由大放漫に、極彩色、豪華版式の美辭をつらねたので、大體の意味の連絡を知れば、あとは名句に見とれる丈で澤山であらう。

【春霞たなびきにけり云々】　紀貫之の歌で、原歌の「桂も」を「桂の」にかへ、最後の「らむ」

を省いたのである。

【花かづら】その季節の花を糸に貫いてかざしにするもの。

【色めく】色がはえて美しく見えること。天女の花かづらの際立つて美しく見えるのは、季節が春なるが爲めか、といふ意。前の「玉鬘かざしの花もしを〳〵と」とあるのに對照。

【面白や天ならで】天女は是れまで天上月宮で舞うてゐたのだが、下界で舞ふのも言ふに云はれぬ味だといふこと。

【天つ風云々】「天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ」をとめの姿しばしとゞめん」といふ僧正遍昭の名高い歌をそれとなく引いて作り換へたもの。遍昭の歌は、彼れがまだ良峰宗貞と稱して居た頃、五節の舞を見つゝ舞姫の入るのを惜しんで詠んだ歌である。天女にも準ふべき美しい舞姫だがもう舞ひ了つて入るのか、空ふく風よ、こゝは雲の上と云はれる宮中、その雲の通ひ路を吹きとぢてくれよ。さすれば天女の姿を今暫らくこゝに留めることが出來るであらう、といふ意。それを踏まへて、遍昭は少女の姿をしばし留めんと云つたが、今は眼前に本物の天つ乙女が暫らく下界に留まつて舞を見せてくれるのだ、といふ味を見せたのである。

【春の色を三保が崎、月清見潟富士の雪】好風光の地名を並べ、秀句で之れをあやなしたのであるか、大意のつゞきは、天女が妙なる舞を見せてくれる上に、周圍の絶景揃ひを、しかも年中第一の春の季節に見るとは、難有いぢやないかといふ意。三保と見、月清みと清見とは秀句。

【いづれや春の曙】「や」は疑問のテニヲハで、「いづれか春の曙ならざる」の意かとも思はれるが、よく思ふに「や」はやり感投詞で、「どれもこれもがサ、皆春の曙の絶景だらう」といふ意であらう。これは「や」のテニヲハといひ、「春の曙」の止めといひ、餘り結構な文章とは云はれぬやうである。

【たぐひ浪】無しと浪と秀句。

【天地は何を隔てん玉垣の、內外の神の御末にて、月も曇らぬ日の本や】此の邊も秀句と緣語と一筆双叙との交錯で、國は日の本、帝王は天つ日嗣の天子樣、天地が同一體に融合するといふ日本國土の光明禮讃を巧みに述べてある。「隔つ」の緣で「玉垣の內外」を引き出し、「內外」を直ちに內宮外宮の大神に移して、萬世一系の皇統を頌し、「月」の緣で「日の本」を呼び出し、「曇らぬ」を月と日とにかけた。六合を照徹する神明の御子孫の知ろしめす國だから、天上地下隔てなき明るい尊い神聖な國であるといふ義。「玉垣」は神籬、瑞籬、神垣。かう並べるとやゝこしく錯雜紛糾して、いやになつて了ふが、かういふ文章の妙味は、うるさい文句の意味を一通

り知つた上で、それを忘れてボカンとして讀み謠ふところにあるのである。

【君が代は、天の羽衣】「日の本や」を承けて、「君が代」の古歌を引いて來た。この歌は佛典の「劫」の譬喩話を本として、君が代の無窮無限を祝したものである。一劫とは一世界の定住懐空――出來始めの期間、定形をなしてそのまゝ暫らくつゞく期間、段々壞滅して行く期間、滅し了はつて空に歸した期間――の四期の一めぐりする間をいふ。その譬喩もいろ〳〵有るがこの歌の本づく所は、四十里四方の大巖石を天人が百年に一度づつ天降つて來て、その輕やかな羽衣で撫で〳〵して、その巖が結局磨滅してしまふまでの時間を一劫といふのである。

即ち歌の意は、君が代は天人が柔らかい羽衣で、百年に一度位、稀々に來て、撫でても〳〵容易に磨滅することではない、その大磐石の如く無窮無限に榮えますであらう。といふと。「稀に」には來と着とを懸けてある。

【東歌】萬葉や古今に出てゐる、東國人の歌が東歌であるが、こゝのは東遊の歌のこと。

(簫)　セウ。笙シャウとも書く。長短不揃の竹管を十管或は十六管、二十三四管編み並べて鳳凰の翼の形に作り、兩手に堅に持つて吹き鳴らすもの。

【琴】琴は絲の樂器の總名で、それに一絃、二絃、三絃、四絃、六絃、七絃、十三絃、二十三絃、二十五絃などいろ〳〵あるが、こゝは多分七絃のキンのつもりであらう。しかし此の「簫、笛、琴、箜篌」は、法華經の成語を取つたのであるから、この琴は何と限らず、絲の樂器を指したのであらう。

【箜篌】タテゴト、クダラゴトともいふ。二十三絃で洋樂のハープに似てゐる。こゝの語音に注意。チヤク、キン、クゴ、とカ行の音を重ねて更に次ぎの孤雲を引出してゐる。

【シテ君が代は……聲そへて數々の】クセが暫らくつゞいてから、シテが一句或は二句を謠ふのを「クセアゲ」といひ、舞の方では「あげ羽」と云つて、こゝで調子を變へることになつてゐる。こゝを特に上羽にして、シテの天人に舞はせてゐる所を見ると、天女が我が日本を頌し大君を壽ぎ奉つて、此の歌を謠つたといふのであらう。そして天人が之れを歌ふと同時に、天樂が四方に起こり、いろ〳〵の樂の音が、雲の外から聲をそへて持て囃したといふのであらう。こゝにも此の「羽衣」の日本的なる持味を見ることが出來る。

【孤雲云々】大江定基が支那の清涼山で詠じたといふ詩をそれとなく引いたもの。定基は三河の國守として、赤坂の宿に居り、甚愛の女を失つて遁世し、名を寂昭と改めて渡唐した名僧。事は『今昔物語』や『海道記』、『東關紀行』、『十六夜日記』その他に屢出してゐる。この詩は

二十五菩薩來迎の趣を述べたもの。「聲そへて」は君が代の歌に與をそへる爲めであるが、同時に聲をそへて來るのは天女を來迎の聖衆の一隊のつもりであらう。「孤雲」「落日」共に寂昭の詩をふまへた味で、雲が唯だ一かたまりといふのではなく、殊に落日夕陽の前で奏したといふのではない。かやうに美辭麗句をめちや〳〵に取り入れるのが、謠曲文の一つの惡い癖であるが、此の曲の本意は、時は朝で、まだ朝霞の棚引いてゐる中に、天女が舞ひあがるといふのである。

【蘇命路】　梵語の Sumeru で、又修迷樓、蘇迷盧とも書き、迷盧とも略稱する。普通須彌山（シユミセン）と稱へる。妙高の義である。一世界の中央金輪の上に在つて、七山七海が環り列なる。四面別々に一色をなして、東は黄金、南は頗梨、西は白銀、北は瑪瑙の色をなすといひ、或は、東は白銀、西は赤玻璃、南は青玻璃、北は黄金ともいふ。「落日の紅」と云つたのは須彌山の西面が紅だからで、謠曲文の引つかゝりのやゝこしいことがこれでも知られる。

【綠は浪に浮島が、はらふ嵐に】　綠は浪に浮きと「浮島がはら」と秀句、又浮島が原と拂ふと秀句。浪と島と綠語。浮島が原は駿東郡愛鷹山の裾野にある。「嵐に花降りて」の綠で「雪を廻らす」と承け、その綠で又「白雲」を出した。「雪を廻らす」は廻雪の舞を含めたので、それから「白雲の袖」とは承けたのである。また「綠」は前の「紅」を承けたので、それから花、雪、雲と、息もつかせずに、綠語を續けたのである。

【南無歸命】　「南無」は梵語 namah. 歸命、歸依、敬禮等の義で、從つて「南無歸命」は、梵漢同義語の重複である。

【月天子】　グワッテンシ。月天とも月光菩薩ともいふ。日光菩薩と共に本尊藥師如來の左右に立つ脇侍の一體で、月世界統治の神とされ、又月そのものともされる。

【本地大勢至】　ホンヂダイセイシ。その月天子の本地は、大勢至菩薩であるといふ意。「本地」は「垂跡」に對するので、佛菩薩が衆生濟度のため權に他の者と化現する場合、佛菩薩を本地として、權化した方を垂跡といふのである。つまり月天子の本地は大勢至菩薩で、吾々を救濟する爲めに、假りに月天子＝月光＝月となつて我々に接するといふ信仰である。勢至は觀音と共に阿彌陀佛の脇侍である。

【あるひは、天つみ空の……靡くもかへすも、舞の袖】　舞ひ遊ぶ天女の羽衣の翩翻とひるがへる有樣の形容。「或は」「又は」と詞をかへたので、一寸わかりにくゝなつてゐるが、舞を舞ふ天女の衣は或は天空の綠の如く、或は春の野に立つ霞の如くといふのである。口調については、

アマツミソラのミドリのコロモ、マタは春たつカスミのコロモ、色香も妙なりヲトメのモスソ、このマ行音の連續的諧音に注意したい。「立つ」は春と霞と衣とにかゝる三重の掛詞。

【左右左、左右颯々】　のサイウサで切り、サイウサッサッのと續ける。左と颯と秀句。指す手引く手につれて、左、右また左と美しい長い袖のひら〳〵する趣の形容。「颯々」は風の音、下の「なびくもかへすも」に係る。

【天の羽袖】　アマのハツデ。天女の羽衣の袖の意。

【東遊の數々に、その名も月の宮人】　これから終りまでが仕舞などによく舞はれる名高い面白いところで、同時に東遊の數々をいろ〳〵に面白く舞つて見せたといふ事の豪華版式形容である。「數々に」から次ぎへの續きがはつきりしないが、恐らく、妙なる空中の舞の數々によつて、月世界の天人の名も尤もとうなづかれたといふのであらう。そして次ぎには、今は春の曉だが、此の月宮の天人が、秋の十五夜には滿月の姿を現じていろ〳〵の寶を雨のやうに降らすのだ、とつゞけたのであらう。

【その名も月の宮人】　「宮人」はもと「色人」とあつたので、「色人」の方が正しいのである。寶生流の稽古本にも、二三十年前までは「色人」とあつたものだが、いつの頃からか「宮人」と改めるやうになつた。多分「色人」といふ語の意味がわからず、また色男、色女などいふあだあだしい聯想を喚び起こすので、典據を知らぬ其道の人が改めたのであらう。「宮人」ならば唯だ月宮殿に奉仕する天女といふこと。「色人」ならば名までが明月の色をした人と、佛書にも稱へられた、清らかに美しい天人といふことになる。佛書に身色月の如し、菩薩身色白月の如しなどと有る。またこの月の色の縁で、次ぎの三五夜中（新月色とつゞく白樂天の名句）の句が引かれてゐる所を見ると、かた〳〵「色」の方が本當で、さうでなければならぬのである。

【三五夜中云々】　白樂天の八月十五日夜禁中獨直、對ㇾ月憶ニ元九一　と題する詩に「銀臺金闕夕沈沈、獨宿相思在ニ翰林一、三五夜中新月色。二千里外故人心、渚宮東面煙波冷、浴殿西頭鐘漏深、猶恐清光不ニ同見一、江陵卑濕足ニ秋陰一」とある。卽ち深夜宮中に宿直して、月を賞しつゝ、遠く江陵に居る親友元稹を思ひやつた詩で、「三五夜」は十五夜。「新月」は、普通月初めの弦月を言ふが、こゝは十五夜の滿月で、出たての鮮かな月の意。

【滿願眞如の影】　マングワン、シンニョ。滿月の光を、願の滿ち足りて、心にかゝる雲の一點もない相にたとへたのである。眞如は、煩惱の雲を拂ひ去つた心の本體。

【國土成就】　前述大勢至が月に權化して、人の願を滿たし、國土を豐饒にすること。

【七寶】シッパウ。般若經では金、銀、瑠璃、硨磲、瑪瑙、琥珀、珊瑚としてゐるが、經典によつて異同が有る。「七寶充滿の寶を降らし」は、月の光の燦々たるを寶玉の降るにたとへたのである。香川景樹の歌に、「照る月の影の散り來る心地して夜行く袖にたまる雪かな」とあるのが聯想される。

【浮島が雲の、愛鷹山】アシタカ山。三保の松原から、浮島が原、愛鷹山を經て富士の高嶺の方へ舞ひ上ることを述べた。「雲」は「浮」の縁であり、また浮島原の上、愛鷹のほとりに棚引くの意でもある。雲の脚と愛鷹と秀句。

【東遊の數々……に施し給ふ】例の名句殺到の極彩色文學で、ふと見ては春夏秋冬の季節もわからず、朝か暮か夜かの時刻もはつきりしない、やたら縞式、寄せ鍋やみ汁式の文章であるが、作者の意を察するに、多分先づ天女の舞の面白さを述べて、次ぎに季節や時刻に關係の無い天女及び月天子の功德を述べたのであらう。試みに講釋すると、「天の羽袖を空中に翻し〳〵舞ふその面白さは、月宮に住む天女の名も恥づかしからず。此の明るく澄んだ月の色にも紛ふばかりの天人は、仲秋三五の十五夜になると、諸人の願ひの滿ち足りて、煩惱濁穢の影だになき眞如の相は此の通りと、明々皎々圓滿充實の姿を見せて、帝、將軍、大名方など高貴の御願を何一つ缺けずに叶へ、五穀豊饒國土平安、その上に月の光の降るやうに、七つの寶を飽くほど與へて國民を殘らず惠まれるのだ」と、かういふので、扨舞ふ程に〳〵時刻は過ぎて……と續くのであらう。こゝに「月の宮人」、「三五夜中」、「滿願眞如の影」などいふ文句があるので、つい迷はされて、これは夜の事だらう、秋の十五夜の事だらうなど思ふ人があるかも知れぬ。それも一つは妙にからんだ文章の罪で無理もない。和田萬吉博士の『謠曲物語』などにも、

東遊の曲も數重なり、天人は此の十五夜の空高く舞ひ上りて、澄みわたる滿月の影の如くあらはれ……

と、これをば十五夜に月光を浴びての事と解してゐる。しかし白龍が三保の松原に羽衣を見出だして、天人と「賜はれ」「やらじ」の掛合を始めたのは、ほの〴〵明けのことで、やがて妥協して、衣を返して、置土產の舞が始まつたのであり、またクセの處にも「いづれや春の曙」とあるのだから、まさか早朝から十數時間後の夜の月の出までは引ッぱるまじく、況んや秋の八月までは引ッぱらぬであらう。思へばあやに絡んだ文章も、罪の深いものである。

「さる程に時移つて」からは、しばらくは田子の浦わで、低空飛行式の舞を、諸人の目の前で見せてゐたが、段々空高く舞ひあがつて、愛鷹山や富士山の高さに至り、やがて春霞の間にそ

の影をかくしたといふのである。

【寶生流】ハウシヤウリウ。能の流派のおもなるものに觀世、寶生、金春、金剛、喜多の五つがある。室町時代の初め頃には、近江、丹波、河內、攝津等にも猿樂を業とする者が有つたが、奈良の春日社に奉仕する圓滿井、結崎、外山、坂戸の四座（大和申樂の四座と云つた）が優勢になり、結崎が觀世、外山が寶生、圓滿井が金春、坂戸が金剛流と稱せられて長く榮えることとなつた。喜多流は金春流から出た支流で、遙かに遲れて、初め秀吉に仕へ、後德川家に仕へた泉州堺の喜多七太夫から始まる。近代最も盛んなのは觀世、寶生の二流である。各流の謠に多少文章に異同があり、曲節に相違する所が有る。

【批評】批評は釋義の部で、已に多過ぎるほど試みたが、玆に改めて大括りの感じを述べると、――細かい部分に立ち入つて、文句の連絡や本筋と引用句との關係などを調べれば、或は場所不相應の引き事をなし、或は美辭麗句の傍若無人な連發で讀者を煙にまくなど、可なり多くの缺點もあり、また其の缺點には作者の文章力の至らぬ事を證するやうなものもあるが、しかしながら遠く離れて大模樣に見、また文法修辭のメスを暫らく收めて、放焉恍惚として眺めて居れば、實に面白い、美しい、目出たい作である。この大まかな見方からいふと、文句の美しさ、進み、それから少し專門がかるが、節附や、舞ばたらきなど、どれもこれも、頗るよい。

組織は一筋到底式で、普通一段能といはれるが、また二段落ものと見てもよいであらう。ワキの白龍が和漢の名句などを思ひ浮かべては、眼前の景色を賞しつゝ、三保の松原にさしかゝると、思ひかけず天の羽衣を發見する。＝拾つて行かうとすると、われらの物なり、賜はれ、返してたまはれといふ＝斷然返さぬと云つたが、之れを見て天人がすつかり萎れる。これ迄を前曲一段と見てもよい。白龍氣の毒になつて、さらば返して進ぜませうといふ。悅んで受ける、そして其の御禮に天上界の舞を奏して、置土產にしようとて、先づ月宮の行事、我が身の上を語つて、それから翩翻と舞ひに舞ふ、その面白さ、美しさ、尊さ。此の妙なる舞の暗示的な極彩色的、豪華的な描寫が此の曲の中心興味で、尤も、局部的には辻棲を合はせにくゝ、難解でもあり、人迷はせなところもあるが、精神的には人を引き入れる素張らしい味と力とを持つて居て、見る者を恍惚たらしめる。云はゞ、理窟を捨てゝ來い、うぶな、素直な、自然な、美に憧れる心だけで、向つて來い。引込まれて忘我遊神同化せずに居られるか、と云ひさうな文章である。まあこんな作、こんな文章であると、一つ買ひかぶつて讀んで見て下さい。それでとにかく世阿彌といふ作家の精神、謠曲の本體といふものがわかるかと思ひます。

第十　「羽衣」によりて試みに謠曲に於ける「カヽル」の意義役目及び趣味を説く

（前章羽衣の講釋の一部と重複する所がある）

一

最初に小論の大意を述べて、それから本論に入ることにする。

謠曲文の中に「カヽル」と呼ばれる一種の節のついた部分があるが、その一種に、二人の人物が問答を交はしつゝ、その文句が次第に短くなり、その調子が段々迫つて來て、最後に「地」に渡す、といふ形式のものがある。また其の人物の問答の中に、甲の言ふべき事を乙が言ひ、乙の謠ふべき事を甲が謠ひ、或は地に謠ふべき事を甲や乙が謠ひ、甲や乙が謠ふべき所を地で謠ふといふ形式、取りすべていふと、役者名々の領分を、互ひに取替へて謠ふところが屢〻ある。此の領分取替式は必ずしも「カヽル」と稱する部分にのみ現はれるものではないが、其の最も多く現はれるのは、此の一種の「カヽル」で、殊にシテの言ふべき事をワキが言ひ、ワキの謠ふべき事をシテが謠ふといふ不思議な現象は、此の種の「カヽル」に於いてのみ見出だされる獨特のものである。此の不思議な現象は、謠曲と同時代の姉妹藝術なる狂言にも見出だされぬものであるが、其の前後の國文學に於いても、恐らく全く見出だされぬものであらう。更に廣く言ふと、支那、イギリス、その他の外國文學に於いても、恐らく見出だされぬものであらう。この珍らしい不思議な領分取替の形式が、どうして出來たものであるか、此の形式の謠曲組織上に於ける意義が何處にあるか、また此の形式の藝術的、心理的の興味が何處に存するか、これらの問題について、自由な勝手な說明を試みるのが、此の小論の目的である。

私は、支那西洋に於ける同類の文學については、「此の形式の類例が無いらしい」といふ、子供めいた大膽な推量を爲すに止めて、實證的に比較することを見合はせた。管見にもとづく擧證を烏滸がましく思ふからである。私はまた前後の同類國文學に對する比較を委曲に試みる事が出來なかつた。昨今身邊の多忙がこれを許さなかつた爲めである。私はまた同じ謠曲の仲間なる五流の異同を比較考査する事をもせず、のみならずこゝに取材した實生流についても、他の曲章を博く對照することをせずして、唯だその流儀のほんの一番「羽衣」だけを取つて、自由な推斷を試みる事にした。これは一つは記述の複雜多岐に流れることを恐れた爲め、一つは成るべく多くの人に親しみのある作を選びたいと思つた爲めである。私は最後に、謂はゆる「カヽル」にも、唯だ一人の詞の中の節のついた部分を指すだけのものがあり、節から節につゞくのがあり、節がつくのみならず、拍子にもかゝるものがあり、その他乘地（のりぢ）になるもの、一聲式、クリ式のものなど、いろ〳〵あるが、こゝには唯だ、ワキが出で、次いでシテが出で、ワキとシテと互に詞をか

はす中に、唯だの詞が節にかゝり、段々文句が短くなり、調子が迫つて來て、最後に「地」に渡すといふ形式のもの、「カヽル」の中の最も纏まつた、そして最も變化があり、活氣があり、その上に超常識的なる興味のある形式のもののみを取つて問題にすることにした。

尙ほ謠曲の中には、極めてわづかながら、「カヽル」と稱する部分の全く無いものがある。またシテ、ワキの領分を取替へて謠ふ例は、有る方が寧ろ少ないが、しかしながらそれは必ずしも稀有の例ではなく、少なくとも「山姥」、「善知鳥」、「殺生石」、「昭君」、「俊寛」、「藤戸」、「蟻通」、「求塚」、「楊貴妃」、「隅田川」、「自然居士」、「通小町」、「紅葉狩」等の代表名作の中に見出だされることを斷つておく。

二

「羽衣」の中には、此の問題に該當する部分が二個所まで見えてゐるが、こゝには最初に現はれた其の中の一つだけを引用することにした。それは、駿河國三保の松原に住む白龍といふ漁夫が、長閑な春のあした、浦の松が枝に懸かつた美しい衣を見出だして、家の寶に取つて歸らうとすると、天女が呼びとめて、「私の衣だから返して賜はれ。」といふ。「天人の羽衣ならば國の寶にするから、尙更返されぬ。」といふと、天女が「それでは飛行（ひぎやう）の道も絶えて、もう天上に歸ることも出來なくなる、是非とも返して賜はれ」と哀願する。それから白龍、天女の二人が、返さじ、返せと相爭ふところが、本論の主題たる當の部分で、その全文は左の通りである。

ワキ、カヽル「この御言葉を聞くよりも。いよ〳〵白龍力を得。詞「本より此の身は心なき。天の羽衣取りかくし。カヽル「かなふまじとて立ちのけば。シテ「今はさながら天人も。羽なき鳥の如くにて。ワキ「あがらんとすれば衣なし。シテ「地にまた住めば下界なり。ワキ「とやあらんかくやあらんと悲しめど。シテ「白龍衣を返さねば。ワキ「力及ばず。シテ「せん方も。地「涙の露の玉かづら。かざしの花もしを〳〵と。天人の五衰も目の前に見えて淺ましや。

最後なる「涙の露の玉かづら」以下の地の文を除けば、あとは大體謂はゆる「カヽル」であるが、此の短い一鎖を見ても、問答が段々急になり、文句が段々短くなつて、その間に地の文句と人物の言葉とが彼れ是れ取替へられる趣が理解されるであらう。また「あがらんとすれば衣なし」や「とやあらんかくやあらんと悲しめど」などは、本來シテの天人が言ふべき詞であり、「白龍衣を返さねば」は本來ワキの白龍の言ふべき詞であるが、それがあちこちに言ひ做されて、異常の興味を與へてゐることも容易に想像されるであらう。この謠曲の「カヽル」に於ける不思議な問答

の懸合が源流となつて、後世の歌舞伎劇に於ける「わたりぜりふ」や、淨瑠璃に見る混線式問答などが出來たのであるが、しかしながら、淨瑠璃や歌舞伎の懸合は、地になるべき文句を人物の詞にし、人物の詞を地にしたといふだけで、人物相互の詞を取替へて述べさせるといふ事は全くない。此の取替式問答は恐らく謠曲獨占の、而して空前絶後の創試であらう。

歌舞伎劇の「渡り禮詞」といふのは、例へば、實演用の『桐一葉』の大切なる、

市ノ正「天の時にや大御所の、おのづからなる德風に、いつしかなびく世の有樣……

木　村「いかなればかくまでに、御運傾く西天の……

市ノ正「有明の影うすれつゝ……

木　村「東天紅と八面に、かしまく鳴くくだかけは……

市ノ正「新日東天に昇るといふ……

木　村「世の成行の……

兩　人「影なるか。

淨瑠璃「ぜひもなき世の有樣と、暫しは愚痴にをちかた寺、耳驚かす鐘の聲、夜はほの〴〵と明けにけり。

の如き、或は河竹默阿彌が『三人吉三』の

お嬢吉三「この百兩を取られては、お嬢吉三が名折となり、

お坊吉三「取らねへけりやア負となり、お坊吉三が名の廢り、

お嬢吉三「互に名を賣る身の上に、引くに引かれぬ此場の出合。

お坊吉三「まだ彼岸にも成らねへに、蛇が見込んだ靑蛙、

お嬢吉三「取る取らないは命づく、

お坊吉三「腹が裂けても呑まにやア置かねえ。

お嬢吉三「そんならこれをこゝへかけ。トお嬢百兩包を舞臺前眞中へ置く。

お坊吉三「虫拳ならぬ、

兩　人「此場の勝負。ト誂鳴物になり、兩人肌脫ぎ、一腰を拔き、立ち廻り……

の類ひで、前に引いた「羽衣」の「カヽル」との比較によつて、是等と謠曲との間に密接不離の關係のあることは容易に推量されることであるが、但しその類似は、文句が短くなり、調子情緒が切迫し、「地」と人物の詞とが混融して來るといふ程度で、まだ人物相互の詞が取替へられた例はないやうである。淨瑠璃の混線式とは、例へば近松が『天の網島』に見える、

詞「是れ小春最前は侍冥利、今は粉屋の孫右衛門商賣冥利、女房限つて此の文見せず我れ一人披見して、起請共に火に入れる。誓文に違ひはない。地「あゝ奈い、それでわたしが立ちますと又伏し沈めば、ハア〳〵。詞「うぬが立つの立たぬとは、人がましい。是れ兄ぢや人、地「片時も彼奴が面見ともなし、い

さこされ去りながら、此の無念口惜しさとうもたまらぬ今生の思出、女が面一つ蹈む、御免あれとつッと寄つて地なんだ蹈み、詞「エ、しなしたり、地「足かけ三年戀し床しもいとし可愛も、今日といふ今日たッた此の足一本の暇乞…

の類ひで、かやうな出入、轉換、擒縱の自在を極めたあしらひも、もとはやはり、謠曲の「カヽル」から來たのであるが、この近松の不思議な筆、筑後掾が微妙な曲にも、甲の詞を乙に言はせ、乙の詞を甲に述べさせるといふ、飄逸な、現實離れのした筆致語りぶりは、先づ無いやうに思はれる。

三

前置がつい長くなつたが、さて謠曲の「カヽル」といふ節附の部分に見える、此の不思議な領分取替の謠ひ方は、何の爲めに起こつたのであらうか。また如何なる心理により、如何なる興味の爲めに試みられ、頻用されて、誰れも彼れも怪しまぬ迄に成つたのであらうか。私は之れについて、未だ曾て合理的の説明を聞いたことがない。多くの解釋者は、看過してその存在を認めぬのが普通であり、たとひ認めても、「謠曲にはかういふ、常理を超越した狂つたあしらひがあるのだ。」とか、「能の世界は現實的といふよりは寧ろ夢幻的のものであるから、寫實を超越し常識を飛躍した、かういふ謠ひ方をもするのだ、そしてそれが一種の特得なる興味なのだ。」とかいふ類の、不思議な事實を、そのまゝに受け入れるか、或は神祕視して觸らずに祭り込むかの以外、以上に、一歩でも踏み込んだ説明を聞いたことが無い。私は之れを甚だ遺憾な事に思つてゐる。

ひそかに思ふに、かくの如く自他の領分を取替へた物言ひをするのは、前にも言つたやうに、國文學史上、謠曲に於いて始めて現はれた現象である。云はゞ鎌倉の末期、若しくは室町の初期に、「能」といふ劇形式の文學の出でたのを機會として、始めて現はれた修辭現象である。のみならず寡聞な私の知る所では、世界諸國の文學に殆んど類例の無い現象である。若しさうだとすれば、是れは決して輕視し若しくは神祕視して、うち捨てゝ置くべきものではあるまい。それが表現形式として、善い習慣であるにせよ、惡い習慣であるにせよ、また謠曲に於ける此の形式の使用振が上手であるにせよ、下手であるにせよ、とにかく心理の鏡に照らし、道理のメスを揮つて一應の合理的解釋を試みるべきものであらうと思ふ。

四

私はまづ「カヽル」の語義について一應の臆説を試みたいと思ふ。この語の意義については、或はフシにカヽルの義で、今まで唯だの詞であつた會話が、簡單ながら、とにかく「上」、「中」、「下」、「下の二」などいふ、正しい音階のフシによつて謠ひ出されるところから云つたのである、といふ説もある。或は「カヽル」はかゝつて謠ふといふ意味で、突ッかゝる氣持で、威勢よく謠ひ出すところから言つたといふ説もある。成程「カヽル」は節の無い詞から一種のフシに取り掛かり、成り始める所である。また謠曲家の間では、しめて、抑へて、靜かに謠ふのとは反對に、氣を張つて勢こんで謠ふ事を「カヽッテ謠へ」といふのが、一つの通り言葉になつてゐる。これらを合はせ考へると、兩説いづれにも多少の理由のあることであらうが、しかしながら難をいへば、「カヽル」が若し「取りかゝる」、「着手する」、「成り始める」といふ意味ならば、術語としては先づ第一に「何に取りカヽル」かの目的を示すべきわけで、目的を示さぬ唯だの「カヽル」は無内容無意義の嫌ひがあり、かやうな命名法は、常識的にも一寸考へ難く、殊に音聲の曲折に第一義をおく能藝謠曲家が斯樣な無意義の命名をしようとは、とても考へられぬことである。第二に、勢込んで謠ふといふ方の説が、面白いながら立派に成立ち得ぬことは、「カヽル」の中に、しとやかに、物靜かに、こんもりと謠ふ部分が幾らもある事實が證據立てるであらう。

かやうに並べて來て、然らば「カヽル」の本義は如何と云はれると、一寸困るが、私は先づ廣い意味では、「カヽリをつける」即ち「風情を添へる」といふ意味であるかと思ふ。「カヽリ」は世阿彌が能、謠曲の骨髓として頻りに繰返した「カヽリ」「風情」の、あの「カヽリ」である。

「鉢の木」に

さて松はさしもげに、枝をため葉をすかして、かゝりあれと植ゑおきし……

と云つてある、あの「カヽリ」である。俗語に「こんなかゝり」「あんなかゝり」「そのかゝりの面白さ」などいふ、あの「カヽリ」である。即ち釣合、對照、曲折、轉變などの風情おもむきの妙味のことで、くだいていふと面白い具合といふことである。これは「カヽリ」の節附が、どういふ場合に施されてゐるかを檢察すれば、おのづから明かなることで、「カヽル」の節の附けられて居るのは、先づ唯だの詞にしておいては惜しいといふ所である。詞に變化をつける爲めに選まれたる味なところである。詞から節や拍子へ渡りをつける緊ぎの部分である。かくして詞の間に挿入されては、珠玉の象嵌されたやうな味を見せて、詞に變化を添へ、詞と節拍子との間に置かれては、詞の調子を高め、節との連絡をなだらかにして、一種の緩衝、引上の役目をつとめると、言ひ換へると、詞の中の優れた文句や、選まれたる味な部分に音曲的の風情を添へて勢を爲

す、といふのが、「カヽル」の中心的本義で、「カヽリあらしめる」といふ語原的解釋が、最もよく此の消息を現はしてゐるやうに、私は思ふ。

それから、狹義の「カヽル」は、本論の中心たる、シテ、ワキが詞を交はしつゝ、段々文句を短くして地に渡す、あの「カヽル」であるが、あの部分について見ると、「カヽル」は「係り合ふ」、「引ッかゝりをつける」といふので、シテ、ワキ、甲、乙の詞が、彼れ一語、是れ一句と、掛合になつて、せはしく詞を掛け合はせ、遣り取りする意味ではなからうか。「カヽル」に限つて、文句が短く、しかも比較的長い句立から、段々短く〳〵と迫りつめて遂に一句となり。半句となつて、最後に「地」に渡すといふのが、此の消息を物語つてゐるやうに思はれる（ロンギにも此の氣味はあるが）。また此の「カヽル」の謠ひ方が、一方の文句の切れぬ中に他の一方の文句をつゞけるやうに、前者の謠ふ最後の一音と後者の謠ふ最初の一音とが折り重なるやうに、即ち相手の詞の切れるのを待ちかねて、我が詞を折り重ねるやうに定められてゐるのも、此の消息を暗示してゐるのではなからうか。また此の「カヽル」の事を、昔から「セル」とも云つたらしく、それが古い謠本に於いて、少ないながら、「カヽル」と交互に用ゐられてゐるが、「セル」に、迫る、競ふ、摩る、突ッ込む等の意味がある所から推すと、やはり此の部分が迫り合ひ、競ひ合つて、詞を掛け合はせる所から言つたのではなからうか。

是れは地謠の前驅を爲す部分のみについて言つたのであるが、さて此の風情說と係合說と、いづれが初めの第一義であつたであらうか。之れを定めるのは、畢竟詞の間々にちりばめられた孤立式の「カヽル」と、ワキ、シテがせはしく問答し合ふ、地渡しの前なる、迫合式の「カヽル」と、どつちが始めに認められ命名されたかを定めることになるのであるが、ひそかに思ふに、これは多分、詞の間々に風情を添へる爲めに節をつけた象嵌式が、第一に試みられて、それが繰返し〳〵試みられる中に、迫合式の味な試みが現はれたのであらう。そしてそれは、謠曲文全體の組織を大局的に鋭く睨んだ天才作者が、ワキを出し、シテを出し、ワキ、シテの二人に問答させ、その結果を引き取つて、美しい節の「地」の文で一部を纏める、といふ趣向開展の大切な關節部として工夫したものであらう。

五

さて意義語原の詮索は此の位にして、此の「カヽル」の掛合に、幾つの場合があるかといふと、凡そ左の四種位かと思はれる。

第一は、シテ、ワキ等、互に自分の領分を謠ふ普通の場合で、例へば左の類である。

ワキ「此の御言葉を聞くよりも。いよ〳〵白龍力を得。

シテ「今はさながら天人も。羽なき鳥の如くにて。

第二は、シテ、ワキ互に互の領分を奪ひ合ひ、取り替へて謠ふもので、例へば、

ワキ「とやあらんかくやあらんと悲しめど。

シテ「白龍衣を返さねば。

第三は、連絡した一事を振り分けて、二人で交互に謠ふもので、例へば、

シテ「をとめは衣を着しつゝ。霓裳羽衣の曲をなし。

ワキ「天の羽衣風に和し。

シテ「雨に濕ふ花の袖。

ワキ「一曲をかなで。

シテ「舞ふとかや。

の如く、本質的には地の文となるべき所であるが、それに變化をつける爲め、シテ、ワキが代はつて、而も二者互に競ひ合ひつゝ詞を交互したのであらう。委しくいふと二重の領分替をしつゝ變化、迫促の妙致を見せたのであらう。

第四は、共通の事を一緒に謠ふもので、此の例は「羽衣」には見えないが、「隅田川」の

シテ「月の夜念佛もろともに。ワキ「心は西へと一筋に。シテ、ワキ「南無や西方極樂世界……

の類である。

六

さて以上を前置として、「カヽル」に於けるシテ、ワキ等が、各自所領の文句を、互に取替へて謠ふ心理の根據は何處にあるか、劇藝術として、文章としてのそれの興味は何處にあるかといふに、

第一には、詞の掛合、取合、競合の興味を現ずる爲めで、先づ「カヽル」全體の構成からいふと、初めに比較的長い文句を謠はせ、それをば次第に短くし短くした短切迫促の揚句を、「地」が引取つて、こゝに句立調子の、前とはすつかり變はつた、のんびりした世界を現じたのであらう。而して其の間に、兩者（多くはシテとワキ）が先を爭ふ競合の興味を高める爲めに、中途から他の詞を取り替へさせたので、これが名々持前の文句を取替へる形式の成立つた主要第一の原因であつたであらうと思はれる。別行式に書き改めた左の句並びが、これを證據立てるやうに見

えるる。

ワキ「この御詞を聞くよりも。いよ〳〵白龍力を得。もとより此の身は心なき。天の羽衣取り隠し。かなふまじとて立ちのけば。（十句、六十三音）

シテ「今はさながら天人も。羽なき鳥の如くにて。（四句、二十四音）

ワキ（實はシテ又は地）「あがらんとすれど衣なし。（二句、十三音）

シテ「地にまた住めば下界なり。（二句、十二音）

ワキ（實はシテ又は地）「とやあらんかくやあらんと悲しめど。（二句、十七音）

シテ（實はワキ又は地）「白龍衣をかへさねば。（二句、十三音）

ワキ（實はシテ）「力及ばず。（一句、七音）

シテ「せん方も。（一句、五音）

地「涙の露の玉かづら…

右は七五を二句と見ての勘定であるが、若し七五の一鎖を一句と見れば、五句から二句となり、二句から一句となり、一句の揉み合ひが四度つゞいて、やがて七音の半句となり、最後に五音の半句となつて居るので、これが「カヽル」の藝術的本質を非常によく現はし、同時に他の領分に立ち入つて文句を取替へる變態表現の藝術的象心理的理由をも非常によく説明して居るものであると愚考する。

この取替詞に於ける起原及び趣味の第一は、自他の役目の取替ッこに見出だす興味であらう。第三は他の事を此方から言つてやる皮肉、或は思ひやりの味であらう。第四は我が心境身境を他人に言はれて、自分を客觀視する味であらう。第五は思ひ設けぬ者が他人事を言ふ超越味の變化であらう。第六は甲が甲の事を言ひ、乙が乙の事を述べる普通尋常の對話の間に、甲が乙の領分を奪ひ、乙が甲の持前を引き取り、また人物同士の詞を、第三者の地が述べ、作者としての地の記述を、人物が語りなどする所に、背理、不自然、反常識の觀がありながら、同時にそこに敵味方入り交つて、縺れつもつれつする亂闘を見るやうな趣があつて、一種の興味があり、また人と詞どがあべこべに入り亂れながら、大體の意味は何の苦もなく取られて、こいつも味だ、面白いと見てゐる中に、やがて地に引取られて、今度は一絲亂れずに、着々と正路の記述を辿るといふ、云はゞ讀者觀衆を快く欺く味で、もつれの後の和解した姿、荒れた後の晴れ模様、ごた〳〵の後のはつきりした叙述、この對照の味を、際やかに感ぜしめる爲めの前置の味であらう。

思ふに此の一節の語句を、文法的に正しく、シテ、ワキ及び「地」に配すると、次ぎのやうになるべきものであらう。

この御詞を聞くよりも、いよ〳〵白龍力を得、

ワキ「もとより此の身は心なき海人（なればとて）

天の羽衣取りかくし、

ワキ「かなふまじ。

とて立ちのけば、今はさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、あがらんとすれば衣なし、地にまた住めば下界なり。

シテ「とやあらんかくやらん。

と悲しめど、白龍衣を返さねば、力及ばず、せん方も……

卽ち大部分は、シテやワキの詞といふよりは、むしろ「地」の文となるべきものであるが、謠曲の作者は、變化錯落の趣致あらしめんが爲めに、大體事件の所屬に從つて、わざと之れをシテとワキとに配し、更に競合ひ、奪合ひの味を添へんが爲めに、所々に事の實際とは反對の配屬を試みたのであらう。例へば

ワキ「この御詞を聞くよりも、いよ〳〵白龍力を得、さながらかなふまじとて立ちのけば、羽なき鳥の如くにて、あがらんとすれば衣なし、地にまた住めば下

シテ「今はさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、

の如きは、内容の性質に從つて、「地」の一部を、それ〳〵ワキとシテとに配したのである。之れについては特に説明する必要がない。また、

ワキ「あがらんとすれば衣なし。

ワキ「とやあらんかくやあらんと悲しめど、

は、本來シテなる天人に屬すべき事なるを、わざと轉換して、ワキに述べさせたのである。而してワキから見れば、「ソレ御覽、羽衣がなくてあがれないぢやないか。」といふ皮肉の味を見せ、或は「アレどうしようかと氣を揉んでるわい、可哀さうに！」といふ思ひやりの意を暗示し、またシテの天人から見れば「自分の心持を、ワキがそッくり言つてくれてゐるわ。」と、他人の忖度した詞に自分を見出だすといふ、これも一種の變はつた皮肉の味を見せ、そしてまた觀衆一同には、「おや、シテとワキと二人で、あべこべに相手の事を言つてるわ。をかしいぞ。しかし是れも一種の味で、おつだな！」といふ感じを懷かせたのであらう。

シテ「白龍衣を返さねば、

シテの方から言つても同じ事で、

は、本來ワキの白龍に屬すべき事なるを、わざと轉換してシテに述べさせたので、シテから見れば、「お前が返してくれないものだから」といふ文字以外の餘意を見せ、ワキから見れば「これは

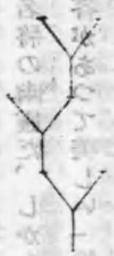
ひどく恨まれることになつたぞ」といふ、これも文章以外、また以上の或心持を暗示するといふ結果になるであらう。無論作者が一々かういふ事を意識して書いたか、どうかは疑問であるが、此の超法格的、超常識的なる狂つた修辭の生起した心理的、藝術的の因緣は、決なく此の通りであつたであらうと思はれる。また觀衆讀者がこの樣な心持を意識して見たり聞いたりするか、せねかは、更にむづかしい疑問ではあるが、しかしながら、彼等が怪しみながら面白いと思ひ、若しくは一種の神祕として無言の叩頭をしてゐるのは、心理、藝術の根本義に於ける斯樣な隱微含蓄によるのであらうと愚考する。

とにかく二人の人物が別々に出て來て、てんでの身分、境遇、感懷を述べる、相見て話を進める中に、やがて彼我共感の核心に觸れ、觸れると同時に情が昂まり意が迫つて、詞の應對が段々急になり短くなる、かくして七音五音の短い文句を競ひ爭ふ中に、他人の事を自分が言ひ、自分の事を他人に言はれ、撚れつもつれつして窮した揚句を通ぜしめるのが、次ぎに來る「地取」の文句で、あとは文法論理の格式に立派に遵ひつゝ、暢びやかに、美しく、シテ、ワキの言ひ合ひ採み合つた大切な事柄の意義を明らかにしてくれる。と、かういふ段取の進みは、非常に面白いではないか。

七

謠曲は最も單純なる劇の一種である。人物はシテ、ワキのたつた二人といふのが先づ常格で、筋の進みは、最初にワキが出て物を言ひ、次ぎにシテが出て物を言ひ、やがて二人が對話し、對話の結果を地が引き取つて、叙事的に尻を結ぶ、といふのが最も普通の形式である。また筋が複雜になると云つても、人物はせいぜい十人前後になる位、それも大抵は、シテ、ワキの兩巨頭に附屬した小末社で、大勢を左右する力のあるのが殆んどなく、また組織趣向も、前に擧げたやうな、シテ、ワキの出現から、對話を經て「地取」の結尾に至る同じ關係を、蜆蛤や眞田蟲に見るやうな關節段々式に、二累し、三累し、四累したものである。例へば諸國一見の旅僧が名所舊蹟を訪ふ。里の翁が現はれる。「なう〳〵」と呼びとめられて、問はれるまゝに周圍の名勝を說明する。それを美しい文句の地が引き取つて、一段が極まると、今度は翁が「私はとゝで討死した古名將の幽靈だ、しかも今日は討死のあたり日だからよろしく回向を賴む」といひ、また一鎖の問答があつて美しい「地」にきまる。と、今度は第三段で、ワキが「待謠」を謠つてゐると、その名將の幽靈が幻に現はれ、また問答して、今度は昔の合戰の有樣を見せて後、「跡弔ひてたび給

へ」で、大團圓となる。と、まづ斯ういふ調子のものである。で、私は能劇の代表形式を「Yの字式」を名づけて居るが、今擧げた「賴政」などは、云はゞ「三重Yの字式」とも呼ぶべきもので、圖解すれば、どんな恰好の物になるであらう。



このYの字の上の部分の、二本の筋の合流する一點が「カヽル」の最後を受ける「地取」で、二本の筋の合流點に接近した部分が、本論の中心をなすところの、謂はゆる「カヽル」である。即ち此の圖のYの字の中程の點線に圍まれた部分がそれで、これを見ても、謂はゆる「カヽル」が謠曲構成の上に於いて、いかに大切な役目を持つてゐるかが解るであらう。おもふに、能藝の古名匠は、先づ幾人かの人物を出す趣向について、彼等を一緒に出すべきか、別々に出すべきか、人物を先きに出して「地」を後にすべきか、「地」の説明があつて後に人物を出すべきか、などと考へたであらう。そしていろ〳〵と考慮し工夫した結果、ワキ、シテの順序で、二人を別々に出すのを最善として、之れを一種の常格としたのであらう。次ぎには別々に出て來た二人を如何に關係させ、彼等の間の交渉を如何に收結さすべきかを考へて、是れもいろ〳〵試みた結果、二人の間に先づ詞（節のつかぬ普通の對話）を番はしめ、詞の間々に拍子に乘らぬ自由な節を挿入して、後に來る本物の節拍子の素地をなしつゝ、今度はその自由な節の文句を、切れ目なしに續け、短文句を追ッかけ〳〵矢繼早に番はして、そこへ本物の拍子に乘つた文章を出し、それを連綿とつゞけて、一段を收結するのを、至美絶妙の趣向と考へて、その形式の試みを重ぬる中に、いつしか一種の常格とはなつたのであらう。人も言ひ殘さず、書きものにも見えぬ古事を、かうまで臆測するのは、見て來た嘘のやうな嫌ひはあるが、謠曲の體式は、恐らくこんな具合にして成立したもので、かう見ると、此の、目にも着かぬやうな僅かな文句の群なる「カヽル」は、單に「詞」に風情を添へるのみならず、掛合競合の離れわざを見せるのみならず、實に一篇の作全體を支配する樞要の關節で、作の人物や文句や節を操る命の絲の大元締の一つであると云つても過言ではないと思ふのである。

第十一　松島より平泉へ

（松尾芭蕉、奥の細道）

その本文解釋及び批評

そも〳〵事ふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭西湖を恥ぢず。東南より海を入れて江の中三里、浙江の潮を湛ふ。島々の數を盡くして、欹つものは天を指さし、伏すものは波にはらばふ。あるは二重にかさなり三重にたゝみて、左にわかれ右につらなる。おへるあり抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の緑こまやかに、枝葉汐風に吹き撓めて、屈曲おのづからためたるが如し。其の氣色窅然として、美人の顏をよそほふ。ちはやぶる神のむかし大山すみのなせるわざにや。造化の天工いづれの人か筆をふるひ詞を盡くさん。

雄島が磯は地つゞきて海に出でたる島也。雲居禪師の別室の跡、坐禪石などあり。はた松の木かげに世をいとふ人もまれ〳〵見え侍りて、落穗松かさなどうちけぶりたる草の庵しづかに住みなし、いかなる人とは知られずながら、先づなつかしく立ちよるほどに、月海にうつりて晝のながめ又あらたむ。江上に歸りて宿をもとむれば、窓をひらき二階を作りて風雲の中に旅ねするこそ、あやしきまで妙なる心地はせらるれ。

十二日、平泉へと志し、あねはの松、緒だえの橋など聞き傳へて、人跡まれに雉兎蒭蕘のゆきかふ道そこともわかず、終に道ふみたがへて、石の巻と云ふみなとに出づ。こがね花咲くとよみてたてまつりたる金花山海上に見わたし、數百の廻船入江につどひ、人家地をあらそひて、竈の煙たちつゞけたり。思ひかけずかゝるところにも來たれるかなと、宿からんとすれど更に宿かす人なし。漸くまどしき小家に一夜を明かして、明くれば又知らぬ道まよひ行く。袖のわたり尾ぶちの牧、まのの萱原などよそめに見て、はるかなる堤を行き、こゝろぼそき長沼にそうて、戸伊摩と云ふ處に一宿して平泉に至る。其の間二十餘里ほどと覺ゆ。

三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金雞山のみかたちを殘す。先づ高館にのぼれば、北上川南部よりながるゝ大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて高館の下にて大河に落ち入る。康衡等が舊跡は衣が關を隔てゝ南部口をさしかため、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつて此の城に籠り、功名一時の草むらとなる。國破れて山河あり、城春にして草青みたり

と、笠打ち敷きて時のうつるまで涙を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢のあと

かねて耳驚かしたる二堂開張す。經堂は三將の像を殘し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散りうせて、珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虛の叢となるべきを、四面あらたにかこみて、甍を覆うて風雨をしのぐ。暫時千歳の記念とはなれり。

さみだれの降り殘してや光堂

講　釋

『奥の細道』は上磐から奥羽北陸を經て美濃に至る旅行記で、日光、松島、平泉、越後、象潟、山中等の記述が、殊に妙を極めてゐる。此の課はその中なる松島、平泉の一節である。

松島は天下の絶景、平泉は奥州第一の古跡で、造化の天工は松島に極まり、人工藝術の美は中尊寺金色堂に極まると云つてもよい。芭蕉は、松島の自然美を心ゆくばかり眺めた後、高館、中尊寺に藤原氏三代の昔を偲んで、不朽の名句と名文とを殘した。松島平泉の探勝は『奥の細道』の中、最も精彩を放つてゐる部分である。

松島の描寫は概して客觀的、寫實的であり、平泉の記述は概して主觀的、懷古的、詠嘆的である。從つて松島の芭蕉は純眞な自然の讃美者であり、平泉の芭蕉は敬虔なる一個の順禮であるかのやうに見える。本來芭蕉の旅には、遊山氣分、見物氣分と云ふものが殆んどない。彼れの旅は彼れが生活の他の方面と同じく、どこまでも眞面目で、眞劍で、同時に何とも云はれぬ佗しい哀愁寂光の影の漂うたものであつた。彼れの旅を樂阿彌や彌次喜多の暢氣な旅に比べるのは不當かも知れぬが、この二つは、德川期に於ける旅行＝生活の爲め實益の爲めにせぬ、藝術氣分の旅行＝の二大風潮を暗示してゐるとも云はれるであらう。樂阿彌、彌次喜多の旅を、有頂天な洒落享樂の旅とするならば、芭蕉の旅は、わびの心境を培ふ爲めの旅、自然美人情美に引かれての旅、而して又出家捨身の頭陀行脚で、不惜身命命がけの旅である。そしてそこに、彼れ獨特の法悦境があり、また彼れ獨特の一種の享樂があつたのである。彼れはこの心境を名づけて風雅と呼んだ。即ち『奥の細道』は芭蕉に取つての風雅經であり、俳諧經であつたのである。

【そも〳〵事ふりにたれど】「そも〳〵」は事を說き起とす初めに用ゐる語。抑も。「そも」を二

つ重ねた語。「さても」といふ程の意。「事ふりにたれど」云ひ古した語だけれども。古い云ひ草だけれども。改めてそんな事をいふと、古い〳〵と笑はれる様な事だが。「にたれ」は過去完了の助動詞。古くなつてしまつてゐるが、といふほどの味。

【松島】　陸前松島、日本三景の一。

【扶桑第一の好風】　日本一の好風景。扶桑は太陽の出る所にあると云ふ神木。又其の地の稱。十州三島記に「扶桑在碧海之中、地多林木、葉皆如桑」とある。昔、支那で日本國を稱して扶桑と云つた。それをこゝに用ゐたのである。「好風」は好風景、いゝ景色の處。

【凡そ洞庭西湖を恥ぢず】　洞庭は洞庭湖。支那湖南省の北部にある湖。周囲約百二十里。風光の明媚を以て名高い。西湖は支那浙江省杭州府の西にある。周囲約一里。これも眺望を以て名高い。「を恥ぢず」は、近代の慣用語例では「に恥ぢず」といふべきところで、これは芭蕉好みの古法である。意味は「に恥ぢず」とほゞ同じではあるが、その差異をいへば、支那絶景の西湖が來ても、それば羞恥の對象とは思はぬといふ、高き自尊心を持つてゐるといふと一種の擬人である。

【東南より海を入れて江の中三里】　普通なら「大洋の水、東南より入りて」といふところであるが、「海を入れて」と擬人して生かしたのである。

【浙江の潮をたたふ】　浙江は、支那浙江省の中央を流るゝ名河で、錢塘江とも曲江とも稱せられる。「浙江の潮」は、秋季八月中旬に海から押し上げて來る潮が、狹き兩岸の山に支へられて、高さ三丈、延長二哩ばかりの白泡の波の堤を築くといふ眺めの事で、天下の奇觀とされるものである。しかしそれは松島の趣とは全く違つてゐるので、芭蕉はおそらく、同じ潮の奇觀といふ所から、凡そに想像して隱喩にはしたのであらう。

【島々の數を盡くして】　灣の内のどの島も悉く。欹つは稜立つで、風がはりな形をして、獨り際立つて聳えてゐること。八百八島悉く變はつた恰好をして居り、切立つてゐるものは、天を指ざす如く、しやかんでゐるものは、低く波の上を這つてゐるやうだといふので、「天を指し」「波にはらばふ」は、共に一種の人化である。

【二重にかさなり、三重にたゝみて…】　岩の後ろに又岩があると云ふやうに、二重にも三重にも重疊してゐるといふこと。これは前後の關係から見た形容で、次ぎの「左にわかれ、右につちなる」は、左右に伸びて、それが船の行くに從ひ、續きつ離れつする面白さの形容である。「たゝみて」は本來自動的に、「たゝまりて」とでもすべき所で、「荒海や佐渡に横たふ」と同じ

く、芭蕉が例の自他お構ひなしの使ひざまである。しかし文法的には、「たゝまり」のつまつたものと解してもよいであらう。尤も造化が三重に疊んだ事と解してもよからうが、それならば二重にかさね三重にたゝみといふべきであらう。

【おへるあり抱けるあり】「負へる」は、大岩の上に小岩の乘つてゐる樣。「抱けるあり」は、大岩の近くに小岩の添つてゐる樣。共に人間に見立てた形容。

【兒孫を愛するがごとし】「負へるあり、抱けるあり」を受けたのであるが、「愛する」は實に品がよく風情がある。今ならば「あやして居るやうだ」といふべき所。

【松の綠こまやかに、枝葉汐風に吹き撓めて】岩の叙述から、岩上の松の叙述に移つたのである。「こまやか」は色の濃いと。「枝葉汐風に吹き撓めて」は「汐風に吹き撓められて」とすべきところで、例の自他ちがひ。但し芭蕉が書くと、とにかくしつくりして一寸改められぬ所がえらい。「撓む」は曲りゆがむこと。

【屈曲おのづからためたるが如し】一寸文句が變につゞいて解りにくいが、松の曲りくねつた樣子が、自然に人が心あつて撓めたかのやうに見えるといふ意。カントの藝術論に「自然は人工に成れるが如く見ゆるに至つて始めて美なり、藝術は自然に出來あがれるが如く見ゆるに至つて始めて美なり」とあるが、その前半の味である。吹め撓めて……かのつから撓めたるが如し」は、同じ詞が重つて面白くない。

【窅然として美人の顏をよそほふ】窅然（エウゼン）は深く遠い貌で、深遠幽邃の意。奥床しいこと。「美人の顏をよそほふ」は松の方から見た擬人の形容で、松の樣子が美人氣取りで、眉や目鼻をこれ見よと化粧して、ためつ、すがめつしてゐるやうに見えるといふこと。窅然は莊子逍遙遊に、「窅然喪二天下一焉」とある。

【ちはやぶる神のむかし】神代の昔と云ふこと。千早振は神の枕詞。いちはやぶるの約にて、勢ひの强いと云ふ意味から、主として神の枕詞に用ゐられる。

【大山すみのなせるわざにや】神の爲業（しわざ）であらうと云ふこと。「大山すみ」は大山津見神。山の神樣で、大山祇とも書く。海の神を大綿津見神（おほわたつみのかみ）、風の神を科戸（しなと）の神などいふ。いづれも古事記、日本書紀の神代卷に見ゆる神の名。「ちはやぶる神の昔」以下は松島に對する作者の感想である。

【造化の天工】ゾウクワのテンコウ。造化は造化翁、造物主、造物者、宇宙萬物を創造した神のこと。天工は人工に對して云ふ語。神業（かみわざ）。神代の大昔、思ふがまゝに山を造つて、その山を支

配した大山祇神が意匠を凝らしたのでもあらうか、その何とも云はれぬ神業といふものは、どんな名人の畫かきがいかに繪筆を振ひ、文章家がいかに詞づかひの技倆をふるつたところで、迚も迚も及ぶことではない。

【雄島が磯】　小島又は御島とも書く。松島瑞岩寺の西南に在る島。陸の岸から橋を架けてあり、これを渡月橋と云ふ。新古今集に「松島や小島の海士の秋の袖月は物思ふ習ひのみかは」（鴨長明）とあり、それを引用して謡曲「松風」に、「松島や小島の海士の月にだに、影を汲むこそ心あれ」とある。松島の景致の中、纏まつて一かたまりをなした最もよき見どころの一。

【地つゞきて海に出でたる島】　半島のこと。現在は切れて橋がかけてある。

【雲居禪師の別室の跡】　雲居禪師（ウンゴゼンジ）の隱栖。雲居禪師は松島瑞巖寺中興の祖。初め京都妙心寺に住したが、寛永十三年藩主伊達忠宗に屈請されて入寺開堂し、天台寺を改めて禪刹とし、瑞巖圓福禪寺と號した。萬治二年寂。雲居は獨眼龍政宗の歸依僧で、忠宗が雲居を屈請したのも政宗の遺命に依つたのである。瑞巖寺は奥州第一の大禪苑で、結構壯麗であるが、其の大方丈の中央には、甲冑姿の獨眼英雄政宗の等身像が安置してある。臨濟宗妙心寺派に屬してゐる。

【松の木かげに世をいとふ人】　瑞巖寺に參禪する人々などが、松陰に小さい庵を結んで隱遁生活をしてゐたのであらう。「先づなつかしく立ちよる」とあるところを見ると、芭蕉が同好同味の人を見出だして、なつかしく感じたものと見える。

【落穗松かさなどうちけぶりたる】　炊事の煙がかすかに庵の軒に立ちのぼる樣の形容で、落穗は稻などの穗の落ち散つてあるのを云ふが、こゝは多分萱、薄、蘆など穗のある草の落ち散つたのを、大まかに指したのであらう。松笠は松の實。大體の意味は、本式の立派な薪などを使はずに、あたりに落ち散る草木の屑を焚いた煙の細々と立ちのぼる風情のある草庵といふと。「草の庵しづかに住みなし」は、草庵をしめ心しづかに落ちついて住み馴れてゐるといふこと。草庵の世捨人生活をまんまと我が物とし了せてゐるといふこと。「なし」の意は不精確であるが、「住み爲す」か、「住み做す」か、「住み馴らす」かの三つの中なるべく、多分「住み馴らし」の略で、取つて附けたやうな初心くさい、附け燒刃の樣子がなく、さういふ生活を住みなれて、すつかり身についてゐるといふのであらう。「晝の眺め又改む」も亦妙で、文法的には「改まる」といふべきところであるが、例の俳家が詞の曲使ひで、多分晝の眺望が、見てゐる中に、すつかり其の趣を改めた、といふのであらう。「江上に歸りて宿をもとむれば」は、入江のほと

り、即ち海岸に來て宿をとるといふ意で、「もとむれば」に「探し求め、そして探しあてゝ泊ると」といふ意を含めたのであらう。

【窓をひらき二階を作りて風雲の中に旅ねする】これも變な文句で、順序もをかしく、凡手の作ならば、一笑にも附すべき文句であるが、翁の意は、多分「二階の窓を開き座敷を取りかたつけて」といふのであらう。順序によつて御人柄に解釋すると、宿の者が、先づ海の方に向いた窓を開いて見せて、彼室此室と見比べた後に、やはり景色の見える二階が好いねといふやうな事で、二階座敷を取片附けたといふ事の樣にも見えるが、さうではあるまい。又「窓を開き二階をつくりて」と「風雲の中に旅寢する」とが、どつちやに續いて、此の二つの事をば宿の者がしたやうにも見え、また芭蕉がしたやうにも見えるが、作者の心は、宿の者が窓を開き二階を作つて」芭蕉が風雲の中に旅寢したといふのであらう。すべては俳家の文法を無視した勝手な、不法な文章であるが、破格の味ともいふべき一種の面白味のあるところが、さすがである。「松の木かげ」のあたりからの意味をざつとつゞけて見ると、「松の木かげには、此の禪剌附近の勝地に、浮世を避けた世捨人の影もぽつ〳〵見えて、わびしい草庵から乾草などを燒いた烟を棚引かせつゝ、心靜かに住んで居る者もある。どんな人かは解らぬが、懷かしさに立ち寄つて暫ちく話して居る中に、いつしかあたりが暗くなり、と見ると、十一日の月が海波に映じて、晝の眺望とはすつかり變はつた趣を見せて居る。時刻の移つたのに驚きつゝ海岸へ來て、宿を求め、定めて泊ると、さすが形勝の地の宿だけある。さあ景色を御覽になるには二階がよいでせうといふので、二階に登つて窓を開く、座敷を取りかたつけてくれる。かくしてさすらひの貧旅人が、風光雲影何とも云はれぬ絶景を、我が物とほしいまゝに眺めつゝ寢るとはまあ何といふ不思議な果報であらう。」

といふこと。解釋がてちのパラフレーズを試みれば、まづざつとこんな味であるが、それがこの短文句の中に壓搾されて、そこにわびしい俳諧の趣味を湛へてゐるのだから面白い。名文といふものは、多くかう無駄がなくて、何とも云はれぬ味と位とがあるものである。

【あねはの松、緒だえの橋】共に陸奥（みちのく）の歌枕で、古歌に詠まれた名所であるから、芭蕉がたづねようとしたのである。あねはの松は陸前國栗原郡澤邊村大字姉齒にあつた名木。伊勢物語に、「栗原のあねはの松の人ならば、都のつとにいざといはましを」と詠まれてゐるので名高い。をだえの橋は陸前國志田郡古川町にある小さい板橋。後拾遺集、藤、左京大夫道雅の歌に、「みちのくのをだえの橋やとれならむ、ふみみふまずみ心まどはす」とある。あねはの松も、をだえ

の橋も、松島から平泉へ通ずる奥羽街道にあるので、この二ヶ所の歌枕を訪ねるのならば、道を西北に取つて、奥羽街道へ出なければならないのに、芭蕉は道を踏み違へて石の卷に出てしまつた、その爲めにこの名所をば遂に見ずにしまつたといふのである。

【平泉へと志し、あねはの松、緒だえの橋など聞き傳へて人跡まれに雉兎獵蕘のゆきかふ道そこともわかず……】これも俳文風のよくいへば簡潔な、惡くいへば勝手な不しだらな筆致である。文脈を正し餘意を補つて解釋して見ると、「大體平泉へと志したが、此の邊にあねはの松、緒だえの橋などいふ名所のあることをかねて傳へ聞いてゐたので、見るつもりでゐながら、人の往來も殆んどなく、狩人や、草刈、樵夫などが、それも稀々に通るといふやうな道で、どちらへはどう行くといふともわからず、到頭道を間違へて石の卷といふ港に出てしまつた。」

【雉兎獵蕘】チトスウゲウ。雉兎は雉や兎を捕へる者。卽ち獵夫。獵は牧草のこと。轉じて草刈のことにいふ。蕘は薪。轉じて樵夫のことに云ふ。これは孟子の梁惠王に、「文王囿、方七十里、獵蕘者往焉。雉兎者往焉。」（獵は獵の俗字で、漢音ス、慣用音スウ）とあるのによつたので、普通ならば「木とり、山がつの行き通ふ」と云つてよい處であるが、芭蕉が『孟子』を讀んで目馴れて居り、之れを用ゐると漢文的古典的の品位がつくと思ふ所から、又これを讀む者も多く『孟子』などを知つてゐるので、「あゝ由緒の正しい立派な字を使つてくれた、さすが芭蕉だ」とめでてくれるだらうと思ふ所から使つたのであらう。氣取つたのではあるまい。尊敬してゐる古典語をそれとなく使つたので、それが當時にあつては斯樣な文章に品位をつけるものとなつてゐたのである。

【石の卷】陸前國牡鹿郡石卷町。北上川の河口にある港。

【こがね花咲くとよみてたまつりたる金花山】昔萬葉集の歌人大伴家持が、「こがね花咲く云々」と云ふ歌を詠んで、朝廷に奉つたので有名な金花山。萬葉集卷十八に賀陸奥國出金詔書歌一首幷短歌と端作して、長歌一首及び反歌三首が載せてる。その反歌の一首に、「すめろぎの御代榮えむとあづまなるみちのく山に黄金花咲く」とある。こがねは萬葉では、「久我禰」と訓ませてある。陸奥山に始めて黄金が出たのは、聖武天皇の天平二十一年二月で、時の陸奥守百濟王敬福がこれを朝廷に献じた。此の黄金の出現を悦び記念して、その年の四月、天平を感寶と改元した。黄金が出たのは、同國小田郡からで、金花山から出たのではないが、金花の名に附會したのである。

金花山は今世に金華山と書く山のこと。陸前國牡鹿半島の東南にある島。面積半方里、最高點

は一四七〇尺。山腹に黄金神社がある。これは、小田郡に金が產出した事を金華山に附會して建てたものである。またこゝを本文には「金花山海上に見わたし」とあるが、石巻から金華山は見えない。牡鹿半島に隱れるからである。芭蕉は多分、此の半島の西南に見える網地島を金華山だと思つたのであらうと云はれる。

【金花山海上に見わたし、鶏の煙立ちつゞけたり】例の句法脈胳の亂れた文章であるが、こゝの文法上の主格は、多分「石の巻」のつもりであらう。即ち大體のつゞきは「石の巻は、海上遙かに金華山を見わたし、入江には數百の廻船が集合し、陸には人家櫛比して炊煙が盛んに立ち上つてゐる所である」といふのであらう。尙ほやかましくいふと、「金花山海上に見わたし」の前受けの主語は「石の巻は」でなければならず、「人家地を爭ひて」の前受けの語は「石の巻には」でなければならず、又「立ちつゞけたり」は自他の不法な寄り合ひで、「立ちつゞきたり」とせねばならぬ所であるが、例の俳家獨自の勝手な自由な文法で、こんな事を一々擧げて居られることではない。凡ては斯樣な例によつて、一方に於いては俳諧師の文章などいふものは滅茶なものだといふ事を知るべきであるし、同時に法則的には無茶ながら、とにかく無類の趣味を有つた一種の名文で、文法だけで文章の價値や品位が論じられるものでないといふ事を知るべきであらう。

【廻船】クワイセン。回船とも書く。廻漕船のことで、貨物を運送する船。

【人家地をあらそひ】人家の鱗次櫛比してゐること。狹い場所に人が群集した時に、人が居所を爭ふやうに、家屋が立つべき土地を爭ふと見たので、一種の擬人。

【思ひかけず斯かるところにも來たれるかな】思ひ設けず、いつの間にか、えらい遠方まで來たことではある！といふ、來し方をふり返つた淋しい思入の詞。『伊勢物語』の東下り、隅田川のところに、「その川のほとりに群れゐて、思ひやれば、遠くも來にけるかなと、わびあへるに」とある。あれを思ひ寄せたのであらう。いかにも面白いが、兩方比較すると『伊勢』の方がすぐれてゐる。こんな處でも古典の價値を知るべきである。

【宿からんとすれど更に宿かす人なし】一夜泊めて貰はうと思つても、だれも泊めてくれる人がない。芭蕉の風采の見すぼらしい爲めでもあらうが、一つは又港町の人情の薄い爲めでもあらう。「宿」の字の繰返しは少し御丁寧過ぎるやうである。

【まどしき小家】まづしい小さい家。賤が家のこと。『徒然草』などにも、貧しを「まどし」と云つてある。古文めかした芭蕉好みの用語。

【袖のわたり】石巻町の北部、住吉神社のほとりなる北上川の渡場の古名。歌枕。新後拾遺集、戀一、相模、みちのくの袖のわたりの涙川心の内に流れてぞすむ。

【尾ぶちの牧】青森縣上北郡六ケ所村字尾鮫にあつた牧場かといふ説もあるが、それではあるまい。陸前、牡鹿郡稻井村の字に大瓜といふ所がある。それが「をぶち」の訛ではないかといふ。後撰集、雜四、よみ人しらず、「みちのくの尾ぶちのこまも野飼ふにはあれこそまされなつくものかは」といふのがある。

【まのの萱原】牡鹿郡稻井村大字眞野。石巻の東北約六里にある。歌枕。萬葉集、卷三、「笠郎女贈二大伴宿禰家持一歌三首」の中の一に、「陸奥の眞野の萱原遠けども面影にして見ゆといふものを」といふのがある。

【こゝろぼそき長沼にそうて】長沼の細長い事と旅の心細さとを一つに結びつけた面白い表現である。長沼は登米郡登米町にある細長い沼。こゝに戸伊摩とあるのは、登米のことであるが、長沼は石巻登米の間にはなく、登米と平泉との間に在る。併し、石巻から登米に至る途中には、大小の沼澤が多いから、それらを引つくるめて「心ぼそき長沼」と云つたのであらう。

【戸伊摩】登米郡登米町。といまはとよまの聞誤りであらう。今はとよまを訛つてとめと云つてゐる。北上川の西岸にある。石巻から約八里。石巻から佐伯へ出るのが便路で、登米へ出るのは少しまはり路になる。

【三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里となたにあり】藤原氏三代の榮華は一睡の夢の中にはかなく消えて、魏々たりし城門も今は影もなく、わづかにその礎石のみが、一里も手前に空しく殘つてゐるといふこと。三代――一睡――一里には、數を對照させた味もあるであらう。三代は、藤原清衡、基衡、秀衡の三代。この藤原氏は、奥羽五十四郡の鎮守府將軍として、平泉に在つて豪奢の限りを盡くしたが、秀衡の子泰衡に至り、一朝にして源頼朝に滅ぼされた。清衡は陸奥藤原氏の祖。鎮守府將軍秀郷七世の孫。後三年役の功によつて、奥の六郡を領し、陸奥の押領使となつた。喜保元年江刺郡豊田から平泉に移つた。大いに佛法を信じ、又京都の文化を慕ひ、長治二年中尊寺を建立して、京都の公卿文化を移植した。其の名殘は、今尚ほ七寶莊嚴の金色堂に見ることが出來る。基衡は父につぎ陸奥出羽の押領使となつて富强を極め、宇治の平等院に倣つて毛越寺を建てた。保元二年卒。秀衡は父祖の遺業を受け嗣いで、其の威勢全奥州を壓した。平家全盛の頃、九郎義經が竊かに京都を出でて秀衡に頼つた。秀衡は

これを厚遇した。頼朝が天下を取つて後、義經が頼朝と不和になり、再び奥州に下つたが、秀衡の厚遇は昔の如く、奥州の兵を擧げて其の驅使に任せた。頼朝は院宣を請うて秀衡を責めたが、秀衡は表に承服しながらなほ義經を奉じてゐた。そして文治三年卒するに臨んでは、子達に遺言して、國を擧げて義經のために盡くすべき事を諭した。泰衡は秀衡の子で、父に次いで陸奥の押領使となり出羽を兼管した。頼朝は院宣を請うて義經を殺すべく泰衡に命じた。文治五年、泰衡は終に義經を衣川館に襲ひ、その首を酒に漬けて鎌倉に送つた。頼朝は其の命を聞く事の遲きを詰り、大軍を發して來り攻めた。泰衡自ら出でて國分原、鞭楯に陣し、厚樫山の壘が陷るに及び、退いて平泉に入らうとしたが能はず、火を放つて城を燒き、北に逃れんとして、部將河田次郎の反忠に會ひ、遂にこれがために弑された。年三十五。

【一睡の中】　盧生が、邯鄲に於ける黄粱一炊の夢の故事を思ひ合はせたのであらう。

【榮耀】　榮華のこと。曹植の詩に「榮耀難ニ久持一」とある。訛つてええうと讀む。

【大門】　ダイモン。城の外廓の門。總門。大木戸。寺院の總門をも云ふ。今、平泉の南方三里の所に金澤村といふがあり、そこの大字に大門と云ふ名がある。少し遠過ぎるが、それであらうと云はれる。芭蕉の弟子桃隣の旅日記『陸奥千鳥』には「清水を離れて高館の大門あり、平泉より五里手前、城廓愬構なり。」と書いてある。この日記に「高館の大門」とあるのは、やはり金澤村の大門のことで、高館の大門ではなく、芭蕉の云ふ大門が謂はゆる高館の大門なのであらう。

【三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野に成りて、金鶏山のみかたちを殘す。】　言葉に變化があり、調子に抑揚があり、修辭に對偶の味はひがあり、意味に對照の妙味がある。内容と形式と、思想と言句とがよく調和し、力があり、彈みがあつて、何んとも云はれぬうまい文である。

【秀衡が跡】　秀衡が館址の意で、「伽羅の御所」と呼んだ。清衡基衡の館は、「柳の御所」と呼ばれてゐた。この二つを總稱して「平泉館」と云ふ。今の平泉驛の北約十町の處にあり、土壘殘濠が今も猶ほ殘つてゐる。北上川を隔て、束稻山に對して、よい景色を見せてゐる。

【金鶏山】　キンケイザン。平泉の館の西方にあつて、高館の西南に當たる。昔、秀衡が黄金を以て雌雄の鶏を造り、山を築いて之れを埋め、平泉城の鎮護としたと言ひ傳へてある。

【高館にのぼれば、北上川南部よりなかるゝ大河なり】　つゞきの穩かでない破格の文の一種で、芭蕉の文だから、俳文だから、人が許すといふ方の文である。平穩化すればかういふのであら

う。「高館に上ると、北上の大河が南部より來たつて眼下を流れ、和泉が城をめぐつて流れて來た衣川が、そこへ合流する。」と、かういふと平凡になるが、此の邊は原文もさして名文といふほどではない。

【高館】タカダチ。判官館とも衣川館とも云ふ。義經の居城であつたと言ひ傳へられて居る。義經が亡命して奥州に下り秀衡に賴つた時、秀衡は柳御所の廓内に別館を設けて義經を住せしめた。それがこの高館であると云ふ。平泉驛の北六町の所に在る丘陵。土は平坦で、東の崖下を北上川が流れてゐる。館（タチ）は貴人の邸宅又は城の狹小なるものを云ふ。

【北上川】キタカミガハ。岩手縣を北から南へ貫流し、宮城縣に入り、石卷港に至つて仙臺灣に注ぐ大河。

【南部】ナンブ。奥州北部の汎稱で、今の岩手縣盛岡市附近から北部にかけての一帶を總稱して云ふ。南部と云ふは、南部氏が奥州に封ぜられてから起こつた名である。南部氏の祖光行が、文治五年源賴朝の奥州征伐の軍に從つて功あり、奥州糠部五郡の地に封ぜられ、今の青森縣三戸を居城とした。其後秀吉時代に至つて、奥州の北部全體を領することとなつた。

【衣川】コロモガハ。平泉の北を東に流れて、高館の下で北上川に會する川。

【和泉が城】イヅミガジヤウ。秀衡の三男、和泉三郎忠衡が住んでゐたと云ふ館。中尊寺の西方にある琵琶柵を云ふ。和泉三郎は、父秀衡の遺命に從ひ、最後まで義經を援けて、遂に義經と運命を共にした義勇の士である。

【大河に落ち入る】大河は北上川で、「落ち入る」は衣川が北上川に合流すること。

【康衡等が舊跡は】康衡は泰衡のこと。「康衡等」と複數にしたのは、忠衡を除いた康衡以下四人の兄弟の意で、國衡、高衡、通衡、賴衡を含めたのである。泰衡の屋數跡は、平泉の館址と平泉驛との間に在る。

【衣が關】コロモガセキ。衣が關に新舊二つある。一は白鳥村にあつた衣が關で、これは、平泉全盛時代に南部方面に對する關門として設けられた新關である。一は中尊寺の西北にあつた衣が關で、衣川の關とも云ひ、安部賴時時代の舊關である。芭蕉の云ふ衣が關が、白鳥村のそれであることは『大日本地名辭書』にも、『奥羽沿革史論』にも述べてあつて疑ふ餘地がない。

【南部口】ナンブグチ。南部方面から平泉に入り込む口。

【さしかため】固める事、警固すること。警備。

【夷を防ぐと見えたり】夷（エビス）はエゾ、アイヌの事で、奥羽、北海道にかけて住んでゐた

人種。古くは、えみしといひ、訛つて、えびすと云つた。蝦夷とも書く。『書紀』景行天皇の巻紀に「東夷之中有日高見國、其國人（中略）是總曰蝦夷」とある。北上川は、日高見川を頼朝奥州征伐の時に聞き誤つたものであらうと云ふ。「夷を防ぐ」は擬人の味。

【義臣すぐつて此の城に籠り】　義臣は義經が部下の將卒。和泉三郎もその一人であらう。「和泉が城をめぐりて」の所で、義勇の士和泉三郎を思はせ、「康衡等が舊跡は」の所で不忠、不孝、不悌の叛逆者康衡等を出だし、「義臣すぐりて」で、和泉三郎以下義經が部下の將卒を寫し出したあたり、聯想、對照、抑揚の妙味がある。

「すぐつて」は選ぶこと。選拔すること。「此の城」は義經主從の最期の場所高館、今芭蕉の足が實地を踏んでゐる高館である。此の邊からが蕉翁特得の文致で、何とも云はれぬ味である。

【功名一時の草むらとなる】　義經を擁して命をすてた選まれたる武士どもの功名手柄も、束の間の夢で、今は見渡す限り茫々たる夏草が生ひ茂つてゐるばかりであるといふ意。例の簡潔なる文體で、言葉が省略してあるが、前の文句から續けて解釋して見ると、「さても文治の昔には、義經に從ふ忠義の侍、一粒選の人達が此の城に立て籠り、その功名手柄が一代にもて囃されたが、その功名手柄も一時の夢で、もう見わたす限り茫々たる一面の夏草となつた」といふ意。

【國破れて山河あり】　杜甫が春望の詩「國破山河在、城春草木深、感時花濺淚、恨別鳥驚心」を、それとなく引用したのである。修辭上に謂はゆる隱引法で、「杜甫の詩に曰はく」とあらはに引かずして、それとなく我が文に取り入れた味であるが、殊に支那式なる文句の「城春草木深」を、城春にして草青みたり」と御國ぶりに改め、漢詩の臭味をすつかり無くして了つた所など、重ね〳〵面白いといはねばならぬ。文意は、國は滅び社稷は廢れたが、山や河は依然として殘つてゐる、そして廢墟となつた古城址にも、相かはらず春が音づれて、草が青々と生えてゐると云ふのであらう。今芭蕉は、義經主從が野末の露と消えた高館の丘に立つて、平泉の廢墟を眺めてゐるのである。藤原三代の豪華を極めた伽羅の御所、柳の御所は田野となつて跡方もなく、只だ金雞山のみが昔ながらに高く聳え、北上川のみが昔ながらに溶々と流れてゐる。時は五月の初夏である。人の亡びた廢墟にも自然の春は廻つて來て、高館の古城址には芳草が青々と生えてゐる。何たる人間の亂りがはしさぞ。何たる人生の短さぞ。又何たる自然の美しさぞ、何たる自然の悠久さぞ。「國破れて山河あり、城春にして草青みたり」――芭蕉は思はず杜甫の詩を我がものにして口吟んだ。そして柔かい草の上に笠を敷いて、腰を下ろして、暫らく感慨の涙に咽んだのである。

【と、笠打ち敷きて時のうつるまで涙を落し侍りぬ】「と」からは、すつかり調子を轉じ、客觀描寫の筆をピタリと止めて、我が事を寫し、しかも、唯だ三句三事、「笠を敷いて」「久しい間」「泣きました」。實に千鈞の力で、これで上の重なり累なつた文句が、しつかりと抑へられて味ひ深く納まりました。絶妙です。「侍りぬ」は謙辭、芭蕉が殊勝らしく下うつむいたところが、手に取るやう！

【義臣すぐつて此の城に籠り、功名一時の草むらとなる】例の勝手を極めた、織物ならば矢鱈縞、滅茶織とでもいふべき文章で、法格本位にいふと、不連絡、不照應、喰ひ違ひ、不法中止、所屬不明、脈絡不貫通、自他の撚り合はせ等、いろ〳〵の無理があつて、とても合理的説明の出來ないものであるが、それが何故に許されたか、許されたのみならず、名文とまで思はれたか。又世に俳文は俳句俳諧の心持を散文に應用したものであると云はれるが、それはどういふ意味で云はれるのか。これらについて、此の機會に一應の説明を試みたいと思ふ。但し私はまだ其の邊の説明を見聞したことが無い故に、例の我流でをこがましいが、御參考になればうれしいと思ふ。

此の文につき、試みに不法の點を數へると、先づ「義臣すぐつて此の城に籠り」といふのが、意をも體をも成して居らぬやうに見える。「すぐつて」は他動詞で、選拔してといふ意味である。然らば義臣が何を選拔して此の城に籠つたことか。或ひは、何が義臣を選拔して此の城に籠つたことか。更にわからないではないか。このまゝでは、恐らく一粒選りのすぐれたる義臣が此の城に楯籠つたといふ意味には、とても取りやうがないであらう。次ぎには「功名一時の叢となる」といふ第二句へのつゞきであるが、一體「籠り」といふやうな中止句は、次ぎに「敵軍を支へた」とか「功名を立てた」とかいふやうな積極的の意味をもつ句につゞかるべき句で、「手柄がフィになつた」などいふ消極的の句に先立つべき句ではない。若し消極性の句につゞくならば、「籠りしが、折角の功名も夢になつた」といふやうにつゞかねばならぬであらう。即ち此の文は上の句、下の句の連絡に大きな無理を持つてゐるのである。

それから下の句では、「一時」がどこにつくのか、上につくのか、下につくのか、上下の兩方につくのかが明らかでない。どれにもつくやうで豐かな味を持つてゐるやうだが、其の代はり、讀者に譯がわからないといふ不安を抱かせる嫌ひがある。實際についていふと、(一)功名もほんの一時で、今は茫々たる草叢を見るのみ、といふつもりか。(二)折角の大功名が眼前の只今一寸見る間だけのはかない草やぶとなつたといふことか。たゞしは、兩天秤に慾深く行つ

て、功名はホンの一時、そして殘つた結果は、現在見る一刻の草むらとなつたばかりといふことか。恐らく何人もその中のいづれと、はつきり言ふことが出來ぬであらう。此の文章の意義脈胳は、それほど曖昧なものである。

右は此の一節に對する遠慮のない文法的の批評であるが、此の文は、その形式の類似からいふと、凡そ夫ぎの文のやうなものであらう。

優等生選拔して此の教室に入り、好成績一時の墳土となる。

私は此の二つは、文法的關係に於いて殆んどそつくりであると思ふが、若し此の文の意義が、「粒選りの優等生が此の教室に入り、試驗を受けてすばらしい好成績を得たが、それも一時で、あとはすつかり忘れられて、今存するは目の前に見る一基の墓だけである」といふことで、それを極度に洗錬して、簡潔に美しく品よくしたものだなどと云ふ者があるならば、誰れか呆れて笑はざらん。芭蕉の此の文も、法格の方面から見れば、此の通りの無理な、變なものであるが、それが許容され、のみならず名文視されるのは、一つは、俳家等が、詩歌の俳句に許す所を以て、散文の俳文に許した爲め、一つは一代の文豪の蕉翁に許すが爲めである。何故にしか言ふか。抑も詩歌韻文には、その用ゐる言語文字の數や性質に極端な制限のある所から、散文には許されずして詩歌にのみ許さるゝ破格、詩歌の許容、英語に謂はゆる poetical licence といふものがある。俳句は、十七音を本位とする世界最短の詩である。それが最も多くのポーエチカル、ライセンスを有つてゐることは自然の事であらう。例へば此の章と同じ季の同じ人の名高い作に、

ほとゝぎす大竹やぶをもる月夜。

といふのがあるが、假りにこれを散文として扱つて文法的に見れば、「時鳥が啼き〳〵大竹藪をめぐり守つてゐる月夜の光景が面白い」といふ事になるであらう。或ひは「時鳥がちよろちよろと竹藪を漏れくゞつてゐる所の見える月の夜は面白い」といふ事にもなるであらう。それが俳句としては「空には時鳥の聲が聞こえる。と見れば、月が皎々と冴えて、その光が大竹藪の中に漏れ入つてチラ〳〵ときらめく面白さ」といふやうな意味になるのだから、不思議である。而してかういふ不思議な無理が通るのは、要するに俳句が詩歌として特に許された破格許容と、長い間に馴致された歴史的背景とによるのであるが、此の詩歌としての俳句にのみ許された破格を勝手に延長して、散文にまで試みようとしたのが俳文で、それを彼等の仲間で勝手に許し合ひ、遂には彼等に好感を持つ世間迄が迎合し仰讃したのである。此の章の「義臣」は

まさしく、此の句の「ほとゝぎす」のやうなものではないか。「すぐつて 此の城に籠り、功名一時の草むらとなる」は「大竹やぶをもる月夜」のやうなものではないか。本來俳句の如きは、同じ眼鏡で物を見るやうになつた、同趣味の者のみが理解し得べきものである。同趣味の者すらも往々理解し得ざるものである。その特別許容の破格を散文に應用することの危險は云ふ迄もないことであらう。西山宗因が、時代を劃したと云はれる名高い句に、

御閑にござれ夕陽いまだ殘んの雪。

といふのがある。津田左右吉博士は其の『文學に現れたる國民思想の研究』に於いて「おひまに御座れ」と讀みました。「おひまの折に入らつしやい」といふ意味に取つたのでありませう。內藤鳴雪翁は「おしづかに御座れ」と讀んで、「落ちついてお話しなされ」といふ意味に取られました。高濱虛子氏は同じく「おしづかに」と讀んで、お靜かに歩いてお歸りなさい」といふ意味に取りました。同じ八清の一句が、斯道最高級の三家によつて、「來れ」「居れ」「歸れ」の全く相反した三義に取られるのですからね。意味を正しく取る上から見ての俳句の危險性は是れでも解りませう。又この危險な許容を、文字の使用にさまでの制限の無い散文に應用することは、是れでもわかりませう。

つい無駄言に日を暮らしましたが、つまり、かういふ文章は、俳句に許された所を延長して散文にも許すやうになつた結果として出來たものであり、又文豪芭蕉が書いたのだから、無理にも然るべく說明して合理的と思ひ、名文とも思ふやうになつたので、而して又其の特別許容の上に立ち、その色眼鏡を掛けて見れば、矢張り何とも云はれぬ味があるといふ事にもなるのである。で、蕉翁の眞意は恐らくこんな事であらうかと愚考する。

嗚呼々々それにしても、義經に從ふ忠義の臣下を粒選りにして、其の選ばれた忠臣達が、我が今立つて居る此の高館に籠り、忠義勇戰の功名を立てたのだが、その功名も其の時限り、今は茫々たる草むら、――これもやがて枯れ萎れるであらう荒涼たる夏草の藪とはなつてゐるのである。・・・俳文の趣味と無理とは大體此の寸法で想像が出來ると思ふ。

【夏草やの句】 館の跡を埋めて茫々と茂つた夏草！ はかなや、それがあの忠義の士達が勇戰し功名した夢の跡なのかといふこと。前の文句と補ひ合つて、意味は比較的たやすく解るが、まことに感慨無量のしんみりした句である。「夢」は、「つはものども」にかゝつて、彼等が其の忠義功名を萬世不朽と夢想して戰つた其の跡といふことか、或ひは「夢のあと」と後につゞいて、「時」の力「忘却」の心理則に散々に荒らされて、有りがひもなく夢のやうに殘つた遺跡―